

特攻開始80年



マバラカット西飛行場跡に建つ特攻隊慰霊碑
(80年前の昭和19年10月25日、ここマバラカット
飛行場から関大尉以下5名の特攻隊が出撃した。)



第152号

公益財団法人 特攻隊戦没者
慰霊顕彰会
編集人 金子敬志
発行人 石井光政
印刷所 株式会社SGネクスト
ホールディングス

目次

巻頭言	副理事長	岡部俊哉	2
フリーピン・マバラカット神風特攻隊80年慰霊祭	理事	鮎田英一	3
特攻開始80年特別寄稿			
「あっぱれ」という言葉	作家・ジャーナリスト	門田隆将	9
「陸軍の海上特攻」	作家	堀川恵子	12
郷友から見た大西瀧治郎	元防大教授・元1等陸佐	徳田八郎衛	19
菅原道大と大西瀧治郎の特攻指揮	元防大教授	横山久幸	32
第73回世田谷山観音寺年次法要	編集長	金子敬志	49
岩手護國神社での「特攻勇士之像」建立報告	理事長	岩崎茂	54
各地慰霊祭等報告			
三重県「あゝ特攻」勇士之像慰霊祭	事務局長	石井光政	56
第26回十三塚原特別攻撃隊慰霊祭	編集長	金子敬志	57
第六十一楠公回天祭	評議員	宮本雅史	58
旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式	評議員	中村敏弘	59
茨城県特攻戦没者慰霊祭に参列して	評議員	原島淳子	63
会員等投稿			
多田野語録	会員	多田野弘	64
第1七生隊の出撃・不時着から再出撃	散華・理事	福江弘明	68
抑止力の戦史的觀察	熊本偕行会会長	中垣秀夫	80
連載 山ある記28	会員	池田康博	87
顕彰譜(17)			88
文芸欄 歌俳柳の広場			
短歌・俳句・川柳			93
新刊図書紹介「米軍から見た沖縄特攻作戦」			94
事務局からの報告等			95

「巻頭言」

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 岡部 俊哉

「特攻隊戦没者を慰霊顕彰すると共に、尊い命を捧げられた特攻隊および特攻隊員の史実を伝え、日本の恒久平和と発展」を設立目的とする、公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会（当会）の重要な事業の一つに、「全国護国神社等への『あゝ特攻勇士之像』の建立と奉納」があり、現在、全国52の護国神社に対し、21か所に奉納させていただいております。

奉納にあたり、護国神社の許可は勿論ですが、その前提となる奉賛会などの賛助会の組織作りと毎年の慰霊祭主催、環境整備等事業運営が必須となります。元特攻隊員や特攻隊戦没者御遺族等関係者の高齢化、御逝去等に伴い、各地の賛助会の多くは自衛隊OB（例えば公益社団法人 隊友会、県隊友会）等に御尽力いただいているのが現状であります。

先般、ある護国神社への奉納をお願いすべく、地元の隊友会長に賛助会の組織化・会員募集と運営を頼みに行きました。同会長は当会の活動・意義について理解するとともに、大いに敬意を表してくれました。しかしながら、地元護国神社への特攻勇士之像奉納については、「勘弁

してくれ。」と難色を示したのです。

「隊友会としては、地元の戦没者の慰霊祭には毎年共催あるいは出席をしている。更に戦没者の中から特攻隊員だけを慰霊顕彰するとなると、賛助会の組織化・運営にあたり、『何故、特攻隊だけを祀るのか』について多くのボランティアに納得して貰わねばならず、困難だ。」と言われたのでした。

この際、お叱りを受けることを承知で正直に申し上げると、私は全く言い返せませんでした。世代交代するとともに、特攻隊関係者が御健在であった以前とは異なる状況下、これまでのやり方や当会と我々会員各自の思いのみでは、事業について説得できないことを思い知らされたのでした。そしてそれは、今でも自分の中で解決できていない課題であります。

特攻80年を迎えた現在、これは単に特攻勇士之像奉納事業に限った話ではなく、これからの当会の事業・活動全般についても言えることであります。不易流行の理の通り、当会の「特攻隊および特攻隊員の史実を伝え、日本の恒久平和と発展」を祈念する目的も含め、活動の意義は些かも変わることはありませんが、事業内容・運営要領は世代や時代に応じ柔軟に適応することが求められているのは間違

いありません。やはり変化しなければ、今後の会の目的達成、活動の活性化、会勢の拡大等も叶いません。

一方で事業は目的ではなく、目的を達成するための手段です。そういった意味で事業の成就のみならず、仮に上手く運ばなくても、その説明・調整の過程で一人でも多く、当会の目的・活動趣旨に賛同していただける方が現れれば、最小限目的は達成するものとも思います。

但し、このままでは将来に向けて柔軟に適応したことはありませんし、依然「何故、特攻隊だけなのか？」は未解決であります。会員の皆様、何方か今の時代に合った、他を説得することができると解答を御教示いただけないでしょうか。



特攻勇士の像前で斎行される慰霊祭

フィリピン・マバラカット神風特攻隊 80年慰霊祭

理 事 鮎 田 英 一

特別攻撃隊初出撃から80年となる令和6年(2024年)10月25日(金)、フィリピン国ルソン島パンガ州マバラカット市にある「マバラカット西飛行場跡」において、第27回神風特攻隊慰霊祭が斎行された。当会の日本からの参加者は、理事長・岩崎茂、世田谷山観音寺住職・太田恵淳氏、理事・鮎田英一、評議員・及川昌彦、同・中村敏弘であった。

昭和19年(1944年)10月20日、レイテ沖海戦(捷1号作戦)において、栗田艦隊のレイテ湾突入を成功させるべく、フィリピン東方沖から侵攻する敵空母部隊に対して、必死の体当たり攻撃を任務とする「神風特別攻撃隊」が第1航空艦隊で編成された。敷島隊隊長・関行男大尉をはじめとする特別攻撃隊の初出撃は10月21日、マバラカット西飛行場からであり、敵空母爆沈などの初戦果が確認されたのは10月25日であった。

以後、陸軍・海軍の特別攻撃作戦は、フィリピン戦、沖繩戦、本土防衛戦などで継続して決行され、航空、水中、水上陸上の全戦闘領域で数多くの勇士が特攻作戦に散華している。本慰霊祭は、尊い

命を祖国に捧げた特攻作戦全戦没者に対する慰霊顕彰を目的とするものであった。



フィリピン現地における特攻隊員に対する慰霊顕彰は、地元の篤志家・故ダニエルH・ディソン氏の熱意と献身によって始まったと言える。ディソン氏は少年時代、街を訪れる若き特攻隊員たちと親交があり、戦後、「カミカゼの精神を知り、その崇高さに打たれ、彼らのために何かしなくてはいけないという衝動に突き動かされ」、昭和49年(1974年)、「マバラカット東飛行場跡」にフィリピン観光当局の協力を得て「カミカゼ記念碑」を建てたのであった。

この記念碑は残念ながら、平成3年(1991年)のピナツボ山大噴火によ

り大部分が火山灰の下に埋もれてしまったが、再びディソン氏が立ち上がり、マバラカット市当局の理解と協力を得るに至り、平成12年(2000年)、マバラカット市の公道に面した「マバラカット東飛行場跡」に新たな「カミカゼ記念碑」が再建された。さらにディソン氏の懸命の努力により、平成16年(2004年)、神風特攻隊最初の出撃地である「クラーク国際飛行場」内の「マバラカット西飛行場跡」にも、関係当局の理解を得て「カミカゼ記念碑」が建立された。

このような背景の下、現地では、パンガ州、マバラカット市、隣接するアンヘレス市や日比両国の関係者・関連団体の尽力により、神風特攻隊慰霊祭が、主としてマバラカット市内にある「マバラカット東飛行場跡」や近傍の「平和観音宮」において長年に亘り行われてきた。

令和2年(2020年)以降、世界がコロナ感染症の脅威に見舞われ、日本からの慰霊祭参列がままならぬ時期においても、慰霊祭は、フィリピン及び日本の現地有志の熱意により途絶えることなく続けられた。そして、ようやくコロナ禍が去り、昨年より「クラーク国際空港」を管理運営するC I A C (Clark International Airport Corporation、クラーク

ク国際空港公社)の格別の厚意と協力により、空港敷地内の「マバラカット西飛行場跡」において、当会がCIACと実質的に共催する形式で慰霊祭が執り行われることとなり、本年の80年慰霊祭を迎えたのであった。



関大尉肖像画 (ディソン氏作)

「クラーク国際空港」の歴史は、大正6年(1917年)に米軍が開設したクラーク飛行場にさかのぼる。同飛行場は、大東亜戦争がはじまり、昭和17年(1942年)から日本海軍が進駐し航空作戦の拠点としたが、昭和20年(1945年)以降、再び米軍が奪還占拠、以後、米軍は「米空軍クラーク基地」として使用し続けた。平成3年(1991年)、20世紀最大級ともいわれる、西方のピナツポ山大噴火により、基地は甚大な被害に見

舞われ、米軍は施設全域をフィリピンに返還した。平成5年(1993年)、当該区域はフィリピン政府により「クラーク経済特別区」に指定され、現在は「クラーク国際空港」やホテル、国際会議場などの商業施設が整備されており、「マバラカット西飛行場跡」も歴史的記念公園地区として保存整備される計画があると聞いている。

さて、この度の慰霊祭は、特攻隊の初出撃基地である「マバラカット西飛行場跡」において、特攻隊の初戦果確認日である10月25日に実施された。

関係者は穏やかな慰霊祭日和を待ち望んでいたものの、折しもフィリピン東方沖に台風20号が発生し、勢力を増して10月23日から25日にかけてルソン島の北部を東から西に上陸通過、大量の降雨により土砂崩れや洪水が島内各地で発生し、死者100人以上、避難者約30万人に及ぶ大災害がもたらされた。

悪天候の影響は、「カミカゼ記念碑」前の慰霊祭会場にも及び、野外の草地にある会場は、大雨により、まともに歩くことも困難な泥濘状態となった。しかし、CIAC職員からなる慰霊祭実行部隊(タスクフォース)の献身的な努力と現地の当会会員である竹内ひとみ女史の精

力的な調整により、テント、椅子、参列者が歩行するための敷板などが設置され、記念碑前の祭壇と供花も丁寧に祀られ、式典の準備が整うに至った。

午前6時30分から受付が始まり、会場には、130名を超えるフィリピン、日本、台湾、米国の多くの関係者が参集した。慰霊祭は7時始まりの予定であったが、大雨が原因と思われる突然の停電が起こり、音響装置はすべて使用不能、代わりのバッテリー駆動スピーカーの到着を待つも、黙祷の時刻を遅らせることができないため、7時15分過ぎ、雨の中、慰霊祭は開始された。



日比両国の司会者による開式宣言



太田住職による願文奏上

司会は当会の及川評議員とCIA職員のエリカD・ウィジャンゴ女史によって、日本語及び英語で肉声により始まったが、開式宣言の途中でようやく代替スピーカーが到着し、司会者の声は会場の隅々まで明瞭に響くようになる。

特攻隊初戦果が確認された当日の出撃時刻、7時25分を前に、司会者の合図により、参列者一同は起立して特攻隊戦没者に対する敬虔な黙祷を捧げた。

次いで、フィリピン空軍音楽隊の演奏に合わせ、フィリピン国歌及び日本国歌が斉唱された後、日本側は、世田谷山観音寺の太田住職が般若心経、特攻平和観

音経からなる願文を奏上し、フィリピン側は、カトリックのガラシ神父が祈禱文を奏上した。

式典が進むにつれて英霊のご加護であろうか、空を覆う雲が次第に薄くなり、雨は小止みとなり、次の岩崎理事長による祭文奏上の時は、傘が全く不要となるまでに天候が回復した。

岩崎理事長からは、「祖国日本では、毎年各地で特攻隊戦没者の慰霊祭が行われているが、フィリピンのマバラカットに於いても、故ダニエルH・デイソン氏をはじめとするフィリピンの関係者の厚意により、長きにわたって慰霊顕彰が営まれてきた」ことに多大の感謝の意が



ガラシ神父による祈禱



岩崎理事長による祭文奏上

表され、デイソン氏の「カミカゼ特攻隊の精神は、自らのアイデンティティ、自らの名誉や文化を守るために、自らの命を引き換えにするとともに、人は到達することができ」との言葉が紹介され、亡き特攻隊員が示したこの精神こそ「常に国を護り、国を興す底力」であり、「これからも御英霊の精神と志を守り、粉骨碎身、日本の発展と文化の継承、フィリピンとの友好親善関係の向上に努力していく」との誓いが表明され、最後に、「フィリピン、日本及び連合国の全戦没



CIAC パグリナワン CEO 代理による式辞

者の御冥福をお祈り申し上げます」との祭文が読み上げられた。

次に、式典のフィリピン側主催者であるCIACの、財政局長でCEO（経営責任者）代理であるN・C・パグリナワン女史から参列者に対して式辞が披露された。本式典は、フィリピン側名称を「Commemoration for Peace and Reconciliation: 80th anniversary of the first Kamikaze takeoff in Clark, Pampanga」

（平和と和解のための記念式典…パンパンガ州クラークからの神風特攻隊初出撃80年に際して）と名付けているように、「この「カミカゼ記念碑は、比日両国を含め、国際親善に努める全ての国々にとって平和と友好の象徴」であり、紛争が絶えない現下の国際情勢において「戦争に犠牲者はあっても勝者はない」という事実を想起させてくれる」ものであり、「カミカゼ特攻の歴史を再び繰り返してはならず」、「国際社会が協力と互恵の精神で、平和と友好を達成することが私たち共通の責務である」ことが述べられた。

続いて来賓からの追悼の辞に移り、80年前にマバラカット基地において、第1航空艦隊第201航空隊の整備兵として出撃する仲間の特攻隊員たちを実際に見送った、多田野弘氏の追悼の辞が鮎田理事により代読された。多田野氏は、復員後、株式会社タダノ2代目社長を勤め、同社を世界的に有名なクレーン車製造会社に成長させ、104歳を迎えられた今もなお名誉顧問として元気に過ごされている。同氏は、昭和50年（1975年）に、マバラカット西飛行場で開催された慰霊祭に戦後初めて参列し、追悼の辞を述べており、その後



多田野弘氏の追悼の辞(鮎田理事代読)

も何度か、この地を慰霊に訪れている。今回の慰霊祭に出席はかなわなかったが、80年慰霊祭に際して、再び追悼の誠を捧げたいとお気持ちから、追悼の辞を寄せてくださった。

多田野氏は「201空は、マーシャル群島を振り出しに、ラバウル、サイパン島、ペリリュー島、フィリピンのセブ島そしてマバラカットに転戦し、西太平洋の主戦場を基地にしてよく戦い」ながら



リベラト・ディソン氏による追悼の辞

も「遂に当地域は祖国日本の最後の防衛地となつてしまい」、「私たちは、ここが俺たちの死に場所だ、一億同胞を守るために喜んで死のうと、一点の私心もなく神のように崇高な気持ちになつて誰もが死地に飛び込んで行きました」と往時を懐古され、特攻隊の英霊に対して「残された私たちは、あなた方の死を無駄にせぬために祖国の再建に取り組み」、「祖国日本は、経済大国、平和国家として世界をリードし、世界の平和と安定に貢献する偉大な国となり」、「あなた方の尊い死が決して無駄でなかった」と報告し、「私たちの行く手をいつまでもご照覧くださいますよう」と追悼の辞を述べられた。



一般参列者による献花

引き続き、「クラーク経済特別区」で広く開発事業を統括するCDC (Central Development Corporation、クラーク開発公社) のCEOであるアグネス・デベナデラ女史、故ダニエルH・ディソン氏の長男リベラト・ディソン氏、日本からの産経ツアーに同行したジャーナリスト井上和彦氏から追悼の辞が述べられた。鎮魂歌「海行かば」が奉唱された後、岩崎理事長を始め、式辞や追悼の辞を述べた主催者・来賓に加え、駐比台北経済文化代表公使の李廷盛氏、在比防衛駐在官・秋葉和明1等空佐、同・川畑範幸2等海佐、マニラ日本人会長・岡本和典氏などを始め、参列者総員による献花に移行したが、このころから再び雨が降り出した。



慰霊祭終了後の集合写真(慰霊碑前)

9時前に献花が終り、合同慰霊祭は滞りなく完了、司会者から閉式宣言が告げられた。

以後、主催者、来賓、参列者等の記念写真撮影が順次、記念碑祭壇前で実施されたが、雨は激しさを増すばかりである。マバラカットの篠突く雨は、80年慰霊祭の斎行を嘉したまう、在天の英霊の嬉し涙であつたらうか。

この後、当会関係者と産経ツアー一行30数名は、昨年同様、「マバラカット東飛行場跡」に移動し、9時30分ごろから、同地の記念碑と特攻隊勇士の像の前に花を供え、太田住職が般若心経を読誦する中、改めて特攻隊の英霊に敬意と感謝の誠を捧げた。この時には再び天候は回復しており、雨上がりの清らかな空気の中、総員の集合写真を撮影し、フィリピンで予定していた特攻隊慰霊行事を無事完了することができた。

当会は、来年以降もマバラカットにおいて、CIACをはじめとするフィリピン関係者と密接に協力し、神風特攻隊慰霊祭を継続して実施していきたいと考えている。(終)



慰霊碑前集合写真(マバラカット東飛行場跡)

特攻開始80年特別寄稿

「あっぱれ」という言葉

作家・ジャーナリスト

門田 隆将



令和六年九月九日、自民党総裁選告示を三日後に控えた高市早苗経済安全保障大臣の出馬会見が一時間に及ぼうとした時だった。

高市氏は、こんな話を始めた。

「結びに申し上げます。『私たちが生きていける今、それは誰かが命がけで守ろうとした未来だった』……この言葉は映画をご覧になった方は、ご承知かもしれません。終戦間際の時代に現代を生きる女子高生がタイムスリップする話です」
居並ぶ記者たちは、顔を見合わせた。

自民党随一の政策通として、また国家観を持つ政治家として、「日本のために何をすべきか」との視点でつくり上げた政策を語っていた高市氏が、最後になって昭和二十年にタイムスリップした現代の女子高生が、出撃間近の特攻隊員と恋に落ちる映画の話を突然、始めたのだ。

「もちろん、これは叶わぬ恋です。葛藤は深まるばかりでございます。でも、やがて彼女は気づきます。私たちが生きていく『今』、それは誰かが命がけで守ろうとした『未来』だった、ということに……。今、皆さまでも、私も、誰かが命がけで守ろうとして下さった『未来』を生きています。今のひと時代をお預かりしている私たちには、日本列島を強く豊かにして、次の世代に引き渡すその責任があると私は思っております」

テレビを通じて会見を見ていた国民も、思わず聴き入る印象的なシーンだった。映画通の人なら、高市氏が話している映画が前年十二月に封切られた『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』（松竹）であることがすぐわかっただろう。若者に支持された珍しい感動の戦争映画だ。

「日本列島を強く豊かに。これをスローガンに私、高市早苗、正々堂々と自民党

総裁選挙を戦い抜いてまいります。そして良い結果を出して、この日本の国家経営を担いたいと考えております。どうかよろしくお願いを申し上げます。ご清聴いただきありがとうございます」

今を生きる私たちが何に感謝し、何をしなければいけないか、どの候補者も語るものがなかった「歴史観」や「国を思う心」、そして政治家としての「信念」を示した出馬会見だった。

私はこの時、高市氏の言葉を反芻しながら、私自身が取材した元特攻隊員の言葉を思い出していた。

「門田さん、『あっぱれ』という言葉の意味をご存じですか」

平成二十三年一月、私は、八十八歳を迎えていた仲子義人・元海軍少尉からそう聞かれた。

昭和十八年、東京帝国大学に在学中に学徒動員となり、昭和二十年四月、朝鮮の葛麻半島に置かれた元山航空隊から出撃していった神風特別攻撃隊「七生隊」を見送った人物である。

私は、アメリカのカリフォルニア州サクラメントに生まれ、七生隊の一員として零戦で祖国アメリカの艦船に特攻した日系二世の松藤大治海軍少尉の生涯を描く『蒼海に消ゆ』の取材で、同じ元山航

空隊にいた仲子を探しあて、やっと面会が叶ったのである。

「もちろん知っております」

と私は応じた。仲子は私の答えを聞く前に、

「あれはね、漢字では『天晴れ』と書きますが、本来は『あはれ』、つまり、悲しみを表わす言葉なんですよ」

そう語った。一体、何を言いたいのか。私は次の仲子の言葉を待った。

「海軍というのは、実に合理的な組織なんです。私のような技量が劣る者は、特攻には指名されない。だって、特攻は、確実に飛行機を失うわけだから、当たるか当たらないか分からないような技量の劣ったパイロットは、絶対に指名されないんですよ」

反射神経、咄嗟の判断、空中での平衡感覚など、花形である戦闘機のパイロットになるには、さまざまな能力が要求される、と仲子は話した。その中でも選りすぐられたエリートが零戦のパイロットになることができる、と。そして、元山航空隊では、そんな優秀な人材から特攻隊員が「指名された」というのである。

「松藤は東京商大（今の一橋大学）の学徒動員組で、技量も、精神も、拔群だった。英語はアメリカ生まれだから、もちろんペラペラだし、剣道の達人でもあった。だから、空中戦の訓練でも、感覚が凄かったんだろうと思う。気のいい奴で、戦後、彼が生き残っていたら、どれほど偉い人間になっていただろう、と今でも考えます」

仲子は、そんな話をしながら、前述の「あつぱれ」のことを語ったのである。それは、松藤たち七生隊が飛び立つ時のことだ。

「選ばれた彼らの特攻の訓練は厳しくてね。訓練で命を落とすのではないかと、うぐらひ激しくて、特に急降下などは、本当にぎりぎりの訓練をやっていました」
こうして昭和二十年四月四日、ついに七生隊が出撃していく朝を迎えた。元山から釜山、そして鹿児島鹿屋基地へ。そこから沖縄方面へ特攻出撃するのである。

航空隊の指揮所前での「別杯式」を終え、いよいよ離陸の時が来た。

「松藤、行ってこいよ！」

「俺もすぐ行くからな」

「頼むぞう！」

仲子はその時の松藤たちの姿が臉から離れない。

「あの時、七生隊の第一陣として出撃していったのは、二十四機でした。四機ずつの『編隊離陸』でね。松藤は、最初の四機の中にいた。私たちは『帽振れ』といって、帽子を大きく振りながら見送ったんです。最初に上がったものから、大きく円を描いて旋回し、あとの機を待つんです。四機、八機、十二機、十六機……と、段々、旋回する飛行機は増えていきました。ものすごい爆音でね。私は息を吞みました。もう戦争に勝てないことは、私たちにも分かっている。ここまで来たら、どうやっても勝てない、と。でも、それが、あまりに勇壮でね。私は見上げて帽子を振っているうちに涙が溢れてきてしまいました」

仲子はそう言うと、目を瞑った。忘れようとしても、忘れられないそのシーンを脳裡にあらためて思い浮かべているようだった。

やがて、最後の四機が上空で待つ編隊に加わった。それが最後尾につくと、二十四機が大きく最後の一周に入った。

その時、仲子は「あつぱれ」という言葉を思い浮かべたというのである。

「あまり知られていませんが、『あつぱれ』は元来、『あはれ』なんです」

仲子はそうくり返した。

「だから、本来は、悲しみなんですよ。それが『あっぱれ』になるんです。あの姿は本当にその『あっぱれ』という感じでした。悲しみもありましたが、爽快感もありました。その姿を見て、気がついたら私は涙を流していたんです」

編隊は、訓練に明けくれた元山航空隊の上空を覆っていた。葛麻半島の隅々まで爆音が轟きわたっているかのようだった。

よくここまで一糸乱れずにまわることをできるものだと思つた。最後に編隊が上空を一周まわつて、さーっと去っていくさまは凄まじい迫力だったのだ。

「最後の一周は、彼らが私たちに『さらば』と告げているかのようでした。勇ましいというか、威風堂々というか、あまりの威容に、私は、ぽかんと見ていました。感動ですね」

不思議な感覚だった。

「あそこまで上がって編隊を組むと、もう『命』というものではないような気がしました。あれが軍隊というものでしょうか。編隊というのは、もはや個々の命を離れているかのように思えました。きれいに円を描きながら、最後は、全部が整つて、わーんっと一周して去つていっ

たわけです。その時、私は『ひよつとしたら戦争に勝つんじゃないか……』という錯覚を感じたことを記憶しています。もう戦争に勝てるわけではない、と頭の中では分かっていたのに、それでも、私はそう感じていたんです」

頬を伝う涙を拭おうともせず、仲子は去つていった仲間たちの姿をいつまでも真つ青な大空に追いつづけた。

特攻用の飛行機も不足し、結局、仲子は終戦まで特攻出撃がなかった。

仲子はつつましく高校教師として、七生隊のことを語ることもなく戦後を生きた。そして多くの教え子に慕われ、齡九十を超える天寿を全うした。

高市が記者会見で語った言葉は、私に仲子とのやりとり、そして日本の未来を見ることなく、英霊となった若者のことを思い出させた。

「私たちが生きている『今』、それは誰かが命がけで守ろうとした『未来』でした」

この当たり前のことを私たちは果たして心に刻んでいるのだろうか。『今』があることを、そしてその貴重さを、私たちはあまりに軽んじてはいないだろうか。

折しも、令和六年夏、パリ五輪で活躍

した女子卓球の早田ひな選手が帰国会見で、「今、やりたいことは？」と問われ、「鹿児島の特攻資料館に行つて、自分が生きていること、そして卓球をできていることが、『当たり前じゃない』というのを感じてみたいな、と思つています」

そう語ったことも話題になった。二十四歳の女性アスリートが「生きていること、そして自分が卓球をできていることが、当たり前じゃない」と考えていることと自体が、驚きをもって国民に迎えられたのである。

隣国・中国から疎んじられ、舐められ、国としての体面まで辱められている今、先人が命がけで守ってくれた『未来』を生きる私たちが「どうあるべきなのか」を何度も考えさせられた令和六年の夏。私は、そんな時代がやつて来てくれたことを心から喜ぶ一人である。

(文中敬称略)

特攻開始80年特別寄稿

「陸軍の海上特攻」く特攻艇①の開発とその死闘」
ノンフィクション作家 堀川恵子



わが国で彼の大戦の記憶を呼び覚まされる日といえば、昭和20（1945）年8月15日の終戦、8月9日と6日の長崎・広島への原爆投下、そして6月23日の沖縄戦終結の日が既知のところであろう。

この度、特攻隊戦没者慰霊顕彰会から、やや季節外れに思われる執筆のご依頼を頂いた。その依頼状に、昭和19年10月25日が、国内で最初の特攻が行われた日であったこと、そして今年が特攻80年という節目の年であることを知った。鰯雲の浮かぶ爽やかな秋空の下、身の引き締まる思いで筆をとっている。

国に殉じた英霊たちの死を悼むとき、

「特攻」という響きは私たちの胸を鋭く決る。陸軍の特攻といえば四式重爆撃機や九式双発系爆撃機などの航空機、海軍では零式艦上戦闘機に加えて、震洋や回天と呼ばれる水中特攻艇がよく知られている。その存在は、戦後も多くの読み物や映画の題材に繰り返し取り上げられてきた。

ところが陸軍にはもうひとつ、知られざる特攻部隊があった。しかも、その現場は海だ。陸（おか）の部隊でありながら、独自に開発した小型舟艇によって海上特攻を敢行した部隊があった。その基地が置かれたのは、今や「国際平和都市」を自認する広島である。陸軍による海上特攻について説明を始めるにあたり、まずは広島市の南端に位置する宇品港（現在の広島港）を拠点とした陸軍船舶司令部の存在について、やや長い説明が必要である。

詳細は筆者が2021年に上梓した『暁の宇品』（2024年に講談社文庫）をお読み頂きたいが、明治の建軍以来、旧日本軍において兵士や軍需品、糧秣の海洋輸送を担任したのは、海軍ではなく陸軍であった。平時に於いて船を持たぬ陸軍が、戦時になると海洋輸送を一手に担うという、軍事的合理性を欠くかのよ

うに思われる日本独自の輸送体制の始まりは明治44（1894）年に遡る。

近代日本の国家の存亡がかかった初の大戦、日清戦争。明治政府は大本営を広島に移し、明治天皇は広島城に寝起きして指揮を執られた。帝国議会も貴族院・衆議院ともに仮の議場を広島城近くに建築し、臨時軍事費特別会計の執行を即断して戦を支えた。近代日本の歴史の中で、首都機能が丸ごと地方に移転した唯一の例である。

この挙国一致の拠点に広島が選ばれたのには、2つの理由があった。軍事輸送に不可欠な軌道系アクセス・鉄道の西端が広島駅まで到達していたこと、そしてその南端に、大型輸送船が停泊できる埋立地の諸工事を終えたばかりの宇品港が存在したことである。宇品港は大陸への玄関口となり、文字通り「臨戦地境」となった。海軍は戦艦の運用や海戦の準備に手いっぱい、兵士の輸送つまり用兵は本来、陸軍に属する事柄」と主張し輸送任務を拒否、海上での軍事輸送は陸軍が一手に担うことになった（輸送中の護衛のみ海軍が行う）。

日清戦争を機に、宇品地区には膨大な国家予算が投じられ、日本軍最大の輸送基地としての機能が整えられていく。内

務官僚で防疫行政を司る後藤新平は、宇品港の対岸にある似島に世界最大の檢疫所を設けた。宇品地区には船舶の運航に欠かせぬ水を確保するための大規模な上下水道整備が迅速に行われ、兵士の糧秣を生産する陸軍糧秣支廠、軍服や軍靴を製造する陸軍被服支廠、武器弾薬を生産する兵器支廠の製造工場と、それらを備蓄する巨大な赤レンガの倉庫群が次々に建設され、宇品全体が一大要塞となっていく。

西日本を大きな台風が襲って広島が被害を受けるたび、明治天皇が「宇品は大丈夫か」と心配されたというエピソードは有名だ。その都度、陸軍大将児玉源太郎らが天皇に供覧した宇品港の修復工事の進捗を記録した写真が、宮内庁書陵部に多数保管されている。

もう暫し、宇品の歩みにお付き合い頂きたい。前述したように、平時は船を持たぬ陸軍が海洋輸送を手掛けるにあたり、大型の輸送船については終戦時に至るまで民間の船舶会社からの徴傭に頼るしかなかった。それを宇品で艤装し、軍用に使立てて運行するのである。操船もすべて民間頼みで、輸送船とセットで船長や船員も丸ごと徴傭した。この仕組みが、幾度に亘る日本の近代戦争で、甚大な民

間船員の犠牲を生んだことは記憶されるべきである。

一方で陸軍の船舶部門は、兵站といわれる「輸送」のみならず、戦闘行為を伴う「上陸作戦」においても重要な役割を担った。四面環海の日本は、どこに兵力を差し向けるにせよ海を渡らねばならず、上陸のために船舶は欠かせないからである。

世界の近代戦史で、初の大規模な上陸作戦が行われたガリポリの戦を教訓に、宇品では大正期から独自の舟艇開発に着手した。沖合に停泊した輸送船から、兵員や物資を運ぶための上陸用舟艇Ⅱ大発動艇（大発）、戦車を搭載できる特大発大発より小型で小回りの利く小発動艇（小発）、攻撃能力の高い装甲艇、敵岸視察用の高速装甲艇、伝令艇の高速艇乙、敵前で大小発の指揮を執る特殊発動艇などの開発を次々に成功させ、陸軍は初めて自前の足を得る。

ことに大発は上陸作戦の主要器材に認定されて大量生産が始まり、その性能の高さから海軍にも多数が貸し出された。のちにアメリカ軍が日中戦争期に日本軍の大発に着想を得て、さらに進化させた上陸用舟艇を開発させていくのはよく知られた話である。そして宇品には船舶学

校も作られ、これら舟艇を操縦したり、整備したりすることのできる海洋業務専門の船舶工兵（昭和18年に船舶兵という陸軍の新たな兵種として独立、最大8万人）や、輸送船の指揮にあたる船舶将校の養成が始まった。

満州事変以後、宇品ではさらに上陸用舟艇を複数搭載のできる大型艦の開発にも着手。ニューヨークライナーと呼ばれる民間の大型貨物船をベースに、空母のような甲板を備える舟艇母船を建造。この母船は現在の強襲揚陸艦の先駆けともいわれる。日中戦争初期の杭州湾上陸時にその巨大な船体が海洋に現れ、次々と大発を吐き出す姿は、各国の軍事顧問団を驚かせた。

宇品を拠点とした日本陸軍独自の舟艇開発とその運用体制について、アメリカの軍事史家アラン・リミットは「1939年の時点で、日本のみが水陸両方作戦のためのドクトリン、戦術概念、作戦部隊を保持」していると分析し (Military Innovation in the Interwar Period)、アメリカ海軍情報部も「日本は艦船からの海岸の攻撃要領を完全に開発した最初の大国」と評価している (U. S. Navy. ONI 225J. Japanese Landing Operations and Equipment.)。

しかし、陸軍船舶の栄光の歴史は、ここが頂点だった。話を進めるために詳細は省くが、日中戦争が泥沼化し、主戦場が広大な海域を舞台とする太平洋域へ広がるにつれ、日本軍の輸送船は次々に撃沈され、雪崩を打つかのごとく兵站は崩壊していく。上陸作戦では船舶が不足して満足な体制を組めず、南洋の島々では大勢の兵士を戦死でなく餓死させる事態に至る。そして宇品は明治以来、懸命に築きあげてきた「輸送」という任務から「特攻」へと、その使命を大きく変えていくことになる。ここから一気に時空を飛んで、本稿の主題となる戦争末期の宇品へと舞台を移したい。

昭和19年2月、宇品の船舶司令部が置かれた凱旋館の一室に、「入室禁止」と札の掛けられた部屋が設けられた。ここで極秘裏に始まったのが、簡易な二人乗りの小型高速艇、つまり「特攻艇」の開発だった。アメリカ軍の本土上陸企図を挫折させるため、陸岸に近接する敵の輸送船団、あるいは泊地にある船団に肉薄攻撃を行うためのものである。

当初、特攻艇の形態は、潜航艇とする可能性が探られた。しかし完全な潜航艇は複雑な構造が必要となるため開発は早々

にとん挫、代わりに「海に浮かぶクラゲのような」半潜航艇の案が採用された。吃水の深い、乾舷のほとんどない艇である。

目視により発見されやすい海上特攻の場合、特攻艇の「速度」が重要だ。開発要件は40ノット以上が必要とされたが、これを実現するには数百馬力のエンジンが必要になる。しかも特攻艇は飛行機と異なり、行動半径が限られることから、作戦には多数の配備が求められる。つまり大量生産をせねばならない。資材不足が著しい中で、これらの要件を実現することは現実的ではなかった。

そこで開発要件を速力20ノットに下げ、120キロの爆雷を搭載、エンジンは自動車用のトヨタのものを使用して、圧縮比を高めて80馬力とすることになった。平時の研究であれば、性能も量産体制も両立する設計が求められるところだが、目の前に敵を置いての急ごしらえの開発では、量産体制を優先するしかなかった。この特攻艇は当初、皇紀2604年の着手を記念して「四式肉薄攻撃艇」（呼称は四式連絡艇）と名付けられた。

これらの特攻計画を指揮したのが、前年に宇品の船舶司令官に赴任した鈴木宗作中将（陸士24期）だ。関係者の記録を

総合すると、着任早々、鈴木司令官は焦っていた。船舶司令部にはもはや大型輸送船がほとんど残されておらず、出港した船も片端から沈められていく。徐々に狭まるシーレーンは壊滅寸前で、資材不足で大発の量産も止まり、宇品は輸送の機能を失いかけていた。歴史家の秦郁彦氏は、海軍の任務であったはずの船団護衛はほとんど機能せず、輸送船が次々に撃沈される様は「ほとんど『なぶり殺し』と評しても過言ではない」状況であったと書いている（『第二次世界大戦の日本人戦没者像』）。

そんな末期的な状況の中で、鈴木司令官が関心を寄せたのが、夏ころから軍の中樞で密かに検討が始まっていた航空機による特攻作戦や海軍の特攻艇開発だった。

「航空だけでは任せておけない、船舶もやろうじゃないか」

鈴木がそう発言したと、ある船舶将校は書いている。開発にあたった現場の技術中佐は、鈴木司令官から「早く、早く」と何度も尻をせっつかれたという。

開発を担当した技術将校や船舶工兵らの記録を総合すると、2月に基本設計が固まった特攻艇の開発は、3月、船舶司令部の高級将校が参加しての試作艇の試

験が行われた。5月には陸軍兵器行政本部が乗り出してきて、兵庫県姫路に基地を置く第十技術研究所が開発を引き継ぐ。さらに試作を詰めるために、開発現場は大阪の前田造船に移される。いよいよ走行試験を行う段階に入ったところで、アメリカ軍による大阪地区への大空襲。試作艇は造船所もろとも焼かれてしまう。止む無く、再び宇品に現場を戻し、大阪・堺の木南車輛の協力を得ながら試作の作業を再開した。

難航した開発が大きな転機を迎えるのは6月である。特攻艇の船体(ボディ)の素材を、鉄鋼から耐水性ベニヤ板に変更。底外板に2枚、側外板に1枚、甲板に1枚という極めて簡易な造りとし、冷却機関についても長期間の使用は想定されていなかったので、海水を用いることにした。これにより大量生産が可能になった。7月には完成形に近い試作艇が千葉の岩井海岸で試験走行を行い、開発要件の速度もクリアした。

時を同じくして宇品沖では、廃棄船の高崎丸(5000トン)に対して、試作艇による爆破実験が行われた。ところが、爆雷120キロでは大型船に損害を与えないに不十分なことが分かり、爆雷は最終的に250キロにまで増量された。

8月下旬、試作艇は速力23ノット、航続時間3〜4時間という基本性能を維持することが可能になり、陸軍省はこれを①(マルレⅡ四式連絡艇の頭文字)と呼んで、兵器として正式に採用した。生産は日本造船、横浜ヨット、南国特殊造船、前田造船、大原造船、木南車輛、川崎車輛に分散して行われ、12月までの間に約3000隻を一気に完成させた。この間、開発の開始から10ヵ月のことであ



航走する①(四式連絡艇)

る。

宇品沖の無人島では、船舶将校たちが実際に①を使い、操縦や訓練方法の検討に入った。まず議論になったのは、①による攻撃は本当に特攻(体当たり)しかないのか、という点である。爆雷は船尾に付けられていて、操縦者がハンドルを引くことで落下する。同時に、艇が敵艦に衝突した場合にも落下する装置が取り付けられている。もし、①が敵艦に斜め方向から進入して投下すれば、爆雷は自重でそのまま敵艦船に衝突して爆発する。投下から爆発するまで、約7秒。投下後4秒以内に全速で避退すれば、乗員が生還できる可能性も示された。将校たちにすれば、部下の命を丸ごと投げ出す特攻という戦術は、決して安易な気持ちで臨めるものではなかったのだろう。

しかし結局、確実に敵艦に爆雷を命中させるには体当たりがもっとも精度が高く、もし操縦者が運よく生還できたとしても、二度目、三度目の出撃をさせることになるので、最終的に①は特攻艇とするしかない、と確認するに至るのである。

秘密兵器①に乗り込むことになったのが、前年12月から全国で募集が始まったばかりの「船舶特別幹部候補生(特幹隊)」

たちだ。特幹隊の応募要項を見ると、昇進の早さが際立つ。採用後ただちに一等兵になり、半年後には上等兵、1年後には伍長、1年半後には下士官（伍長もしくは軍曹）に進級できるという夢のような制度。士官学校を出なくても1年半で下士官になれるという触れ込みで、地方の10代の少年たちが大挙して応募してきた。ことに北海道、東北、北陸方面からの応募が多かった。もちろん、募集の時点で特攻任務は秘されている。

船舶通信課の第一期生として採用されたのは、15歳から19歳の2000人。彼らは昭和19年4月、まず香川県の小豆島に集められ、夏までに大発の操船など船舶兵としての新兵教育を受けた。そして陸軍船舶司令部は、特攻艇①の任務を外部から秘匿するため、部隊を丸ごと宇品沖の江田島北岸（海軍兵学校から山をひとつ隔てた北側の海岸）に移動させた。ここから、①操縦の特訓が始まることになる。

実は鈴木司令官は、①の搭乗員については特幹隊のみならず、この年に陸軍士官学校（57期）を卒業し、船舶司令部に配属されることになった見習い士官60人全員をも対象とした。正式な将校用軍装に帯剣した見習い士官が続々と小豆島に

やってきたとき、特幹隊の若者たちは「何か特別な作戦でも始まるのか？」と目を丸くしたという。本来なら新兵教育にあたるはずだった彼らは、いきなり任務特攻の命を下されたわけで、その心中は想像するに余りある。

ところが同年夏、海上特攻の指揮をとってきた鈴木司令官は、フィリピンの第14方面軍隷下に新たに編成された第35軍司令官に転出。鈴木の後任として、船舶司令官に着任した佐伯文郎中将の指示で、見習い士官による特攻部隊は再編されることになる。

船舶参謀の証言によれば、鈴木決定を知った佐伯司令官はかなり慌てたように、**「陸軍士官学校の卒業生まで全員、特攻に送るつもりか。そんなことをして皆が死んでしまったら、その後の組織の教育をするものがいなくなるではないか。少なくとも半数は残さねばならない」と**、着任早々、特攻要員とされた士官60人のうち30人を宇品に残すよう命令した。

戦後に生き残った陸士57期の証言によると、特攻要員が半分に絞られることになり、隊員たちの間には**「誰が外されるのか」「どうやって選ぶのか」と疑心暗鬼が生じた**。そこで公平を担保するため、55期の船舶将校が採った選抜方法は「あ

みだくじ」だったという。海の陸軍エリートたちの運命は、そのようなたちで明暗を分けたのである。

さて特攻艇①であるが、配備先はフィリン、沖縄、台湾であった（終戦間際に西日本の沿岸部が加わる）。若者たちを江田島から前線へと送り出す役目を担った宇品の陸軍船舶将校のひとり、上野滋氏（終戦時は第二輸送船舶部隊参謀長）が昭和32（1957）年に個人的に書き残した記録を中心に、その足跡をまとめてみたい。

昭和19年8月時点で、①に乗艇する海上挺身戦隊は3コ中隊、総員約100人、50から60隻の配備である。戦隊長は少佐または大尉で、幹部は独身の将校、下士官乗艇員は10代の特幹隊の若者たちだ。これとは別に海上挺身基地大隊が作られ、①が配備される沿岸に洞窟を掘って舟艇を格納する基地整備を担った。戦争末期、宇品に配属された兵士の多くが、「あちこちの海岸で穴掘りをさせられた」「銃の代わりにスコップを持たされた」と口々に語るのは、この作戦に依るものだろう。昭和19年10月末までに、海上挺身戦隊30隊が編成され、約2000人の若者たちが、江田島の北岸で外部との連絡をいつ

さい遮断された状態で㊦の操縦訓練に励んだ。この時期から、宇品と門司を出港する輸送船には、どの船にも必ずシートに覆われた㊦が多数積み込まれ、特幹隊の若者たちが同乗した（実際には多くの輸送船が目的地に着くまでに撃沈され、兵士たちは㊦とともに海没することになった）。

昭和19年末には沖縄に9隊、台湾に7隊、フィリピンに14隊が配備された。フィリピンでは、リンガエン湾方面に向かった部隊の多くが現地に着くまで海没戦死し、現着できたのは海洋挺身第11、12、18戦隊の一部に過ぎなかった。マニラ湾からバタンガス湾方面には海上挺身第6、13、14、15、16、19戦隊、ラモン湾（ルソン島東岸）には海上挺身第7、8、9、10戦隊を配備。現着した部隊はそれぞれ沿岸に洞窟を掘って出撃基地を構築した。昭和20年1月9日、アメリカ軍は大挙してリンガエン湾に上陸。この時、同方面にあった3戦隊の隊員たちは㊦に乗り込み、夜陰に乗じて次々と出撃していった。

㊦は吃水の深い半潜航艇のため海面をスレスレに走る。船体後方には250キロもの爆雷を搭載しているため、前方が

大きく浮く。波頭や船体の角度から考えて、視界はほとんどなかったはずだ。それも20ノットという速度である。

筆者は4年前、東京都内で船舶免許を取得した。毎週末、プレジャーボートを借りて芝浦から東京湾近海に繰り出して海上を走ったのは、陸軍船舶司令官関連の執筆を始めるにあたり、船舶兵たちの気持ちに少しでも近づきたいと思ったからだ。目線の高い現代のモーターボートであつても、20ノットを出せばそれなりに波にぶつかり、船は振動する。別船とすれ違ふと引き波が打ち寄せ、船体は左右に大きく揺さぶられる。真冬の強風にあおられてトリムバランスを崩しかけたときは、「板子一枚下は地獄」という恐怖を肌身を感じた。それも東京近郊の内海と、平素から高い巻波が岸边に次々に押し寄せるフィリピンとは、海面の状況も全く異なる。薄いベニヤ板の船体に身を沈め、巨大な輸送船めがけて暗闇を突つ切った若者たちの心中を想像するだけで、筆者は胸を締め付けられるような苦しさを覚えるのである。

アメリカ軍にとって、闇夜の海上を、爆弾を搭載して体当たりしてくる小さな㊦は想定外の奇襲攻撃で、最初は驚きを

以て受け止められたという。リンガエン湾では歩兵上陸艇LCIT2隻が撃沈され、他にも数隻の艦艇が損傷を受けたと記録には残る。

しかし、アメリカ軍は即座に海上に機雷をばらまく㊦対策を取ると同時に、魚雷艇による“特攻艇狩り”に乗り出した。以降、ほとんどの㊦が目的を達することなく撃沈され、若い命が次々に暗い海底へと沈んでいった（比較的多くの海上挺身戦隊が現着できたラモン湾方面にはアメリカ軍の上陸はなく、マニラ湾―バタンガス湾方面もほとんど活動するに及ばなかった）。

沖縄に配備された部隊には、アメリカ軍の上陸まで約3カ月の準備期間があつた。海上挺身第26戦隊は嘉手納沖で、27、28戦隊は中城湾内で、29戦隊は那覇沖でそれぞれ出撃した。関係者の手記には「アメリカ軍の輸送船、艦船、駆逐艦、大型上陸用舟艇を次々に撃沈した」という勇ましい記述が見られるが、筆者はその戦果の詳細を記録に確認することはできていない。

戦後、特幹隊の生存者がまとめた記録によれば、㊦で出撃した船舶兵2288人のうち、約7割の1636人が戦死し

た。中には海洋で遭難後、フィリピンに上陸してゲリラに殺害されたり、餓死したりした者も少なくないという。船舶兵は身に寸鉄も帯びず、常に丸腰であった。陸軍船舶司令部による特攻については、もう1点、付け加えておきたい事実がある。昭和20年8月6日、広島を中心部に人類初の原子爆弾が投下されたとき、市民の救援救護を行ったのが船舶司令部配下の部隊だった。アメリカ軍の本土上陸に備えて、江田島で①の訓練を行っていた若者たちも、大発で瀬戸内海を北上し、三州を遡上して爆心地に前進。終戦まで市民の救援救護や道路の開啓、水道の確保、線路の補修、非常用食糧の配布、電信の敷設などの作業に従事した。

原爆投下の当日から終戦の日に至るまで、火炎の熱気も冷めやらぬ爆心で寝起きをした多くの兵士が二次被爆をして、嘔吐や脱毛、下痢などの症状に苦しんだ。終戦後、故郷に戻って亡くなった兵士も多かったと伝わるが、国の調査はまったく行われておらず、被害の規模はいまだ分らない。

原子爆弾のもたらす影響が不明の時代のこととはいえ、大量の放射線に汚染された被災地に無防備な装備で投入された彼らもまた、違う意味での特攻を行った

といえるのかもしれない。

陸海軍の、ことに飛行機による特攻は、国民の戦意高揚のため華々しく報道され、広く称えられた。しかし、陸軍船舶司令部による海上挺身戦隊の動向は終戦まで極秘にされ、国民の耳に届くことはなかった。

その存在は戦後も長く忘れ去られてきた。ことに原爆投下の惨禍に見舞われた広島では反戦運動が盛んになり、旧軍に強い拒否感を抱く空気が醸成された。同じ市内に基地を置いた船舶司令部のこと、10代の若者たちによる②の特攻そして爆心地での救援救護についても知る人は少ない。江田島の北岸には、戦後に命を繋いだ元特幹隊の同期生が建立した③海上挺身戦隊の慰霊碑が、遠い海原に向かつてひっそり佇んでいる。

蛇足になるが、2015年、④の少年たちの爆心地での救援救護の様子を詳細に描いた拙著『原爆供養塔』（文藝春秋社）や、前出の『暁の字品』が出版されて以降、少しずつではあるが彼らの足跡を取り上げるテレビドキュメンタリーが放送されたり、平和記念公園内の施設で企画展示が行われたりするようにはなってきたことは、筆者にとってせめてもの慰みである。

限られた紙面に、駆け足で特攻艇⑤の生まれた背景、開発の経緯、その活動について記してきた。及ばずながら、この拙い寄稿が⑥に搭乘した若者たちの献身を改めて記憶する機会となることを祈りたい。数多の若者たちを特攻へと送り出した船舶将校・上野滋氏が綴った、苦渋に満ちた言葉を引いて拙稿を閉じる。

⑥は早急な思いつきで、十分な研究も準備できず、実用に供した処に難点もあったが、海上挺身戦隊将兵の燃ゆるような意気込みと、当時のいわゆる殉国の大義に徹した処よく⑦の欠点を補って、見事な戦禍を納めたのであった。

この人たちは、後に続くものがあると信じ、我さきにと、先を争って敵船にぶつかって行った。現在においては色々批判もあるだろうが、白波を蹴立って敵艦戦目ざして邁進する処、当時の軍隊教育と社会情勢の然らしめたものとは言いながら、彼等は彼等の人生に意義を求めて散華し去った。

ここに謹んで殉国の英霊に対し敬虔な祈りを捧げるものである。

特攻開始 80 年特別寄稿

郷友から見た大西瀧治郎

徳田八郎衛

(元防大教授・元 1 等陸佐)

1 特攻作戦の再評価

(1) 特攻への元米水兵の敬意

三十五年前の夏、居住する浦安市の姉妹都市選定の調査で米国フロリダ州オーランド市を訪れた。昭和 30・40 年代の姉妹都市提携と言えば、ある都市の偉いさんが海外での会議や会合で何処かの都市の偉いさんと意気投合し、姉妹都市になるうと約束して市議会に諮ったり、ある企業の城下町が、その企業が進出している海外の街と提携したりの「住民不在」で決まる事例が多かった。やがて各地に国際交流協会等が結成されてくると、「こんな決定方式では困る」という声が高まるが、現実にはいい伝手(つて)もなく、特に「なんでも都道府県にすぎる習性の」弱小市町村の場合は、「自分たちの県と姉妹都市関係にある米国や豪州の、ある州の市町村の中から探してもらった」という事例が多い。歴史上のご縁や地理的・産業的な類似点があつて万人が納得するような理由で結ばれたという姉妹都市は案外少ないのだ。

その点、当時の熊川好生(よしお)浦

安市長には立派な見識があり、「町から市になったのをきっかけに、姉妹都市を求める声が浦安市民にも高まっているが、世界のどの都市が最適か、理性的、合理的に選択して市議会に諮ってほしい」と誕生したばかりの市国際交流協会へ委託してこられた。たまたま勤務先の防大も夏休みであり、創立以来、国際交流協会の役員も務めていた筆者も調査団の一員として派遣されたのだった。ただ個人的には、もう一つ用務があつた。

以前から親交があつた在日米海軍法務官のヒューズ大佐が、「当地の弁護士で、私と同じ苗字の叔父が、貴殿のような経歴の日本の方とは是非会って自分の体験を話しておきたいそうだ」と伝えてきたからだ。

調査団の一行は、海外体験も豊富で英語も達者な方々ばかりだったが、流石に南部フロリダとなると到着早々に会いに来る知人はいない。その中で「米軍人以外の外国人と付き合つてはいかんのぞ」という時代錯誤的な職場で育つた筆者を弁護士のお老夫婦が宿泊ホテルで待つてくださっているのは実に光栄なことだったが、招待されたプール付き豪邸で切り出された話は実に深刻なものだった。

彼はアイビーリーグの中の一校の法学

部学生だったが、日本のような学徒動員ではなく、自発的に大学を休学して海軍に入り、沖縄で日本陸海軍機の特攻と戦つた元水兵だった。

彼の主張は、「日本の被害があつた程度で済み、戦後も数年で復興できたのも特攻のお陰です。靖国神社とは別に特攻神社を建立し、もつと敬意を払うべきです」であつた。彼が言うには、「神戸への空襲が始まり、父祖の霊が護る丹波へ疎開した貴方が今あるのも特攻作戦のお陰です。特攻作戦がなかったら、日本の航空攻撃をなめ切つた米国機動部隊は 1944 年末頃から日本近海に接近し、木更津沖や紀伊水道にヤンキーステーションを構築して近距離から飛び上がったのは地上の主要目標を叩きまわっています」。

B 29 による高空からの盲爆と違って、艦載機による低空からのピンポイント爆撃だから東京、名古屋、大阪といった主要ターミナルだけでなく大宮、千葉、米原、姫路などの緊要なインターセクションを破壊して全国の鉄道網をマヒさせたでしょう。大都市の食糧不足だけでなく、田舎でも米なり魚なり野菜なりが採れても交換することはできず、深刻な栄養失調が発生しています。貴殿が国民学校へ入学した翌年 4 月頃には、二千万人くら

いは亡くなっていたでしょう。浜松や釜石への艦砲射撃も、特攻に対処できるVT信管の信頼性が向上する1945年初夏になって行われましたが、特攻が無ければ同年新春から行われ、人口密度の高い沿岸部を壊滅させたことでしょう」。

(2) 大西さんと私

見事なIF戦記だ。特攻への敬意について異議は無いが、米海軍の見事な対応によって戦果が上がらないのを知りながら、情性で特攻作戦を継続した陸海軍首脳や大西さんを認めたくはない。「太西さん」と心安く記したが、いうまでもなく第一航空艦隊司令長官に任命され、すでに策定されていた計画に従って最初の神風特別攻撃隊を編成・出撃させ、その後も軍令部次長として作戦を続行した大西瀧治郎中将は、筆者に取って非常に近い存在であった。

郷里の兵庫県立柏原高校の先輩であるだけでなく、筆者の父とは柏原中学で同級かつ無二の親友だった。それも在学中だけでなく、各々が海軍のヒコキ野郎と商社機械部員となっても親交は続き、大西さんの自刃後に郷里で営まれた村葬に遺骨を抱いて帰省された淑恵夫人が我が家で一泊されるほどの仲である。筆者はお茶を運んだ程度のご縁であるが、そ

の想い出からも我が家では「太西さん」である。

その「太西さん」と特攻を改めて意識するようになったのは、1956年阿川浩之さんが、自分の暗号解読将校としての学徒兵体験とは全然別の、特攻要員となる海軍予備学生の苦悩と悲劇を描いた

「雲の墓標（新潮社）」の上梓である。高3の夏であったから読む余裕はなかったが、翌春、大学生となってから大学の図書館で閲覧した。架空の人物ではあるが、主人公の文学部国文学科学生・吉野次郎も利用したであろう図書館である。読者の涙を誘うのは、もし日本政府が



大西瀧治郎中将

ポツダム宣言受諾を数日前に決定しておれば救われた生命が失われたことであるが、もう一つある。「我々の生命を提供することで起死回生の戦果が得られるなら喜んで御国に命を差し出すが、情性的に特攻機を発進させても、まともな戦果が上がるのではないのではなからうか。無駄死には嫌だ」と嘆き、悩む吉野の姿である。これは生き延びた学友が、吉野少尉の両親に宛てた手紙にも裏書され、吉野たちの特攻編隊は日本近海の敵機動部隊目指して発進するが、どんな戦果か皆目わからないままなのである。

この「無駄死を繰り返した」という告発は、私たちの陸自幹部学校へ度々講義に来てくださった東レ役員の森本忠夫氏も「魔性の歴史」「特攻」等の著書で指摘しておられる。それは当時の陸海軍で「最小の犠牲で最大の戦果をあげる」という効率の検討が全くなされていなかったらである。昭和元年生まれの艦爆「彗星」の搭乗員であり、戦後に京大経済学部で学ばれた。筆者に取っては吉野次郎よりも身近な先輩だ。架空の先輩も、実在の先輩も、「大西さん」には批判的なものだ。この「無駄死に論」に対してヒューズ弁護士は、「それは安全な場所からの評論です。最前線の我々がどれほど特攻を恐

れたか、判っていませんよ。日本の戦力が低下して散発的な攻撃になった5月でも、空母『バンカー・ヒル』は体当たりされ、私の親友も含めて400名が戦死しています。もつと多数で同時突入を試みていたら被害と発狂者は続出し、沖縄上陸作戦も危うかったでしょう」と太鼓判を押す。



特攻攻撃を受け炎上する空母バンカー・ヒル

確かに「この大戦で出会った一番恐ろしい兵器は特攻だった」と述べたのは、ハルゼー提督だ。また終戦直後に日本へ派遣された戦略爆撃調査団の報告も、「より多くの特攻機が集中攻撃してきたら、本土進攻作戦の変更もあり得た」と記している。確かに対艦ミサイルが出現し、そして無人機が兵器として猛威を振るう今も、自爆テロというのは最強の兵器である。

(3) 大西さんの苦悩

ヒューズ弁護士は、「戦地で必死に特攻と戦った我々の方が、後世の評論家よりも彼らの精神を評価しています。基本的に死を恐れない体当たり攻撃には、今の米国民も腰を抜かしますから」と声を重ねる。彼の断言は、十数年後の9・11事件で実証された。確かに死を恐れないものは無敵だが、問題は、それを部下に強制するか否かである。

ただ大西も含め航空機運用の先駆者たちは、自分が育て上げたパイロットたちを無意味な戦法で落命させるのには抵抗する一方、非常に大きな効果があるなら身命を賭しても悔いない潔さも持っているようだ。昭和9年、佐世保航空隊司令だった大西は講演会で、当時、防空に責任を持つ陸軍が始めた防空演習について

「敵機を本土上空へ侵入させないことが先決だ」と述べて陸軍を激怒させた。これは「帝国海軍が健在な限り、日本は安泰」という思想であり、「不幸にして侵入された場合の対処を訓練して何が悪い」という反論は正しいと思われるが、大西の郷里の丹波新聞に、その講演の要旨が載せられている。

「敵が爆弾を搭載して来襲する場合の往復飛行能力を考えると、そうやたらに攻撃をかけてくることは難しい」とした上で、「但し、飛行機を鉄砲玉と同様に使う『片道攻撃』をされたら話は違ってくるが、そんなことをするバカはいまい」と述べている。だが大西は「片道攻撃」をまったく否定したわけではなく「攻撃の効果が戦争の対局を左右するような場合、例えば港湾に居る艦隊を攻撃するようなときに限り行われるべきもの」と結んでいる。

帰国後、筆者は、横浜鶴見の曹洞宗大本山総持寺の大西さんの墓へ「青い目の特攻理解者」出現について報告に向かった。そこには故淑恵夫人の強い希望で建てられた海鷲観音もあるが、もう戦没者の親や兄弟も多くが他界されたからであろうか、石原裕次郎の墓は参拝者で溢れているのに、こちらには花も線香のかけ

らも見られない。

ただ親友だった筆者の父と大西さんの墓石には共通点が見られる。大西さんの墓には正面に堂々と本名だけが記されている。筆者の父の墓石も、本人の希望で戒名は側面に彫り、正面に本名を彫っている。坊さんには申し訳ないが。

ところが総持寺の墓地には、大西さんの近くに似たような墓石がある。大西や徳田は、柏原中学の第9回生（明治43年卒）

であるが、第3回生に芦田均元総理が居る。その墓石も正面に本名だけが彫られている。いずれも墓を探す者には有難い。

本稿は、月刊誌「丸」の令和5年1月号から3月号に連載した「我が父の友、大西瀧治郎」を基に書き改めたものである。「丸」のご厚意に感謝する。



総持寺に眠る大西瀧治郎の墓



創立時の学校本部は、国登録有形文化財「柏陵記念館」として今も後輩の生徒を見守る。

2 中学生時代の太西

(1) 田舎だが全国版の柏原中学校

大西や筆者の父、徳田富二が学んだ柏原中学校（兵庫県氷上郡柏原町）と当時の教育事情に触れておこう。各府県に公立中学校は1校のみ設置という中学校令が明治24年に改められるや、兵庫県でも播磨の姫路中を追って同28年に摂津の神戸中、但馬の豊岡中の2校が、さらに同32年には丹波の柏原中、播磨の龍野中、淡路の洲本中の3校が開校する。2万石の小名、織田藩の陣屋がある小さな城下



創立時の兵庫県立柏原中学校正門

町だが、福知山線（当時は私鉄の阪鶴鉄道）の開通前なので第1回卒業生23名の大半は地元出身。郡外出身者は4名に過ぎない。

とはいえ明治32年に同線が全線開通するや、郡外出身の卒業生（即ち入学者も）は急増し、第8回生では37名中25名、大西たちの第9回生では36名中20名に達する。主力は神戸周辺からだが、東京や九

州の指宿、道東の根室からも来ている。すでに開校した県下の中学は10校に達しているが、田舎の柏原中は早くも「全国版」になったのだ。隣の多紀郡篠山町には旧藩校以来の伝統を誇る私立鳳鳴義塾中学校があり（同32年に県立鳳鳴中学となる）、これも全国版だ。好敵手・両校の切磋琢磨は今も続いている。

当時の初等教育は4年制尋常小学校と4年制高等小学校で行われ、比較的豊かな農村地帯なので徳田の記録では男子の2割弱、女子の1割弱が高等小学校へ進んでいる。しかし、続いて中学校、高等女学校へ進むとなれば、学力と経済力の壁はより厳しく、さらに1割弱に絞られる。

高等小学校2年を終えると、現代と同じく満12歳で中学校や女学校への受験が許可されるが、大西も徳田も高等小学校で3年学んでから進学している。当時は、家庭の経済状況が好転してから、あるいは親の気持ちが変わるのを待ってから進学を許される年長者も多く、「12歳で入学すると周囲とのハンディが大きいので避けた」と父の死後に同級の方々から教えられた。同世代の著名な方々の経歴を読むと、このような「受験留年」は都会地では稀だが、北陸・山陰などでは常態化している。現代の教育ママには理解で

きないだろう。

地元の期待を受けて開校したのに卒業生数が40名に達しないのは、入学試験と学費負担の厳しさによるものだが、もう一つ要因がある。授業のレベルが高いから学力が無いとついていけない。そして枝分かれした谷の奥から、場合によっては片道4時間、16キロの道を読書しながら通学する生徒には体力も必要であった。現在の中1生徒が耐えられるであろうか。そして衛生・医療環境も現在とは比較できないほど貧弱だったから、肺結核をはじめ赤痢、流感、チフスなど様々な細菌性、伝染性の病魔に侵され、退学、あるいは死亡する生徒も少なくなかった。また日露戦争前後の日本経済は不安定で、経済的理由での退学も相次いだ。

その結果、毎春70人前後の生徒を入学させ、2クラス編成するものの、4年生になる頃には半数近くが退学し、1クラスに縮小されるのであった。大西も徳田も含め、卒業できた36名は幸運だったといえるが、卒業後も油断できない。9年後の大正8年卒業生名簿では6名が他界している。ただ、学力、体力、経済力で絞り込まれているためか、毎年の卒業生の4割ほどは高等教育を目指して進学する。

(2) 入校後の学業も厳しい

第4学年の組時間割					
土	金	木	水	火	月
化	修	博	我	障	シ
代	厂	R	体	記	化
M	国	国	广	代	我
作	代	地	シ	博	国
国	R	障	作	R	R
		系	創		体

学業の厳しさを証明するのは当時の教科書・ノートと時間割であろう。徳田が残した学年毎の生徒手帖には、おなじみの生徒心得に続き、重要な行動についての自由記録、小遣い帳、そして時間割が記されている。峠を越せば但馬の和田山や生野鉱山へ出てしまうほど遠隔の村から4時間もかけて登校した後は第6時限まで授業だ。土曜日午後も行われる。時間割を見て驚くのは英語だ。ここに揭示したのは4年生のものだが、どの学年でも週に7時間も授業がある。文部省の指示に忠実に従ったからだが、東京の学校に負けない、という意気が見える。Lがレクチャーで文法。Rがリーダー。Mとあるのは副読本の題名で、手に取って見ると中身は新制大学の教養部教科書に匹敵するほど高レベルだ。

「地」とあるのは、現代の地学ではな

く、地理である。敗戦後、GHQの指示で自然地理を除去した「人文地理」といういびつな教科が誕生したが、当時は自然地理と人文地理を合わせた本来の地理であり、教科の半分は今の地学に近い。そして高等小学校の地理が、身近な近畿地方の話題から全日本に及んでいくのに対して的に中学校の地理は、日本を手始めに全地球的な話題へ移っていく。不平等条約改正に向けて田舎の中学生であつても国際人に育成しようという意気込みがひしひしと伝わってくる。

時は、夏目漱石が中学教師としての体験をもとに描いた「坊ちゃん」の時代だが、学校側が生徒に提供する教育サービスも手厚いもので、様々な教育活動や自治活動も撮影して配布している。ここに掲げる写真もその一つだ。動植物、あるいは地理の屋外授業の一コマであり、教科担任教師だけでなくクラス担任も加わっている。最後列右端が大西と目される。

「坊ちゃん」に登場する教師と同様に、当時の中学教師は全国規模で移動するが、柏原中学校も立派な人材を全国から集めていた。例えば第2代校長の大江磯吉（おおえ ぎきち・元の名は磯吉）は、島崎藤村の「破戒」の主人公・丑松のモデルとされた人物である。独身で校長を務めながらコレラに倒れた母親の看病に

尽くし、自分もコレラに感染して1年半の在任で亡くなるが、自主性を尊ぶ教育方針は後に残った。後に首相を務める第3回生の芦田均は、絶えず母校の校友会誌に寄稿する「文筆家OB」であったが、度々大江校長を偲ぶ文を寄せ、「人格高尚、校長としてあれだけの人は少ないと思ふ」とたたえている。

(3) 刎頸の友

当時の寮歌によく引用される「久遠



屋外教育中の写真。最後列右端が大西

てみよう。ノートから、大西や学友たちの行動を見

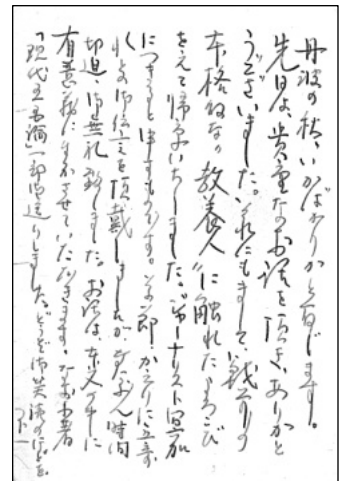


「丑松」のモデルと目された大江磯吉第2代校長

このノートの誕生は、昭和30年、旧海軍関係者を中心とする故大西瀧治郎海軍中将伝刊行会による非売品「大西瀧治郎」の刊行がきっかけである。自決以後も家族ぐるみで交誼を続けた旧友として徳田もこれに寄稿するよう早くから淑恵夫人に乞われていたが、日本が晴れて独立した同27年以降、開発途上国へのプラント輸出や欧米からの技術導入で海外へ出ずっぱりの徳田は、機上でもノートに書き続けた親友の想い出を期日までに送れなかった。まだFAXも無い時代だったのだ。

しかし12年後の同42年、大西の伝記を書くため著述家の草柳太蔵氏が丹波の徳田を訪れた際にこのノートは活躍し、名著「特攻の思想―大西瀧治郎伝（文芸春秋社、同47年）―に「真珠湾奇襲は米国人を団結させ、戦略的には大失敗だった」と戦時中に大西が徳田たち級友に語った秘話が記され、広く拡散された。ここに掲げたのは、草柳氏および淑恵夫人からの出版協力への礼状だが、取材源を省いて同書に描かれた大西のヤンチャぶりは徳田の提供によるものと判る。そして終戦間際の8月8日に徳田が送った便りを大西が受け取り、最後まで持っていたと同夫人は記されている。よくぞ届いたものだ。

このノートは、大西だけでなく、周囲



草柳太蔵氏からの礼状

大西淑恵
東京府中野区東中野五丁目十八番
（主人宛）
御便り（主人宛）手許にございま
した主人のカバンより出ました最近ま
でもつていたのでございましょう

徳田様より二十年八月八日、日付の
御便り（主人宛）手許にございま
した主人のカバンより出ました最近ま
でもつていたのでございましょう

徳田との交流を示す淑恵
夫人からの礼状の一節

の様々なエピソードを記している。これ
によると、第8回生があまりにも大人し
く、5年生になっても下級生の風紀取締
まりに熱心でないので、大西たちの第9
回生は4年生の頃から校内の風紀取締ま
りを代行したという。第8回生は、士官
学校卒業後、東京帝大工科大学土木工学
科へ派遣され、もっぱらスコップとモッ
コで築城や飛行場整備を図る工兵隊ヘブ
ルドーザーを導入し、終戦前には陸軍燃
料廠長官を務めた秋山徳三郎陸軍中将な
ど多士済々であるが、おっとりした長男

タイプのクラス。一方、第9回生の方は、
しつかりした次男タイプのクラスだった
と徳田の他界後に同級生から筆者は伺っ
ている。そのせいか、「やりすぎ」もあつ
たようだ。

一学年下に文学少年が居た。40歳過ぎ
に小学校校長に就任する俊才であるが、
「詩集を読みふけるなどお前は軟弱だ！」
と大西たちに叱責され、リルケの詩集も
取り上げられて校門前の溪流に放り込ま
れる始末である。質実剛健の校風も、こ
こまでくると野蛮であるが、反省した徳
田は、新たに買って弁償したという。

昔も今も中学生の規律違反といえど喫
煙と飲酒である。ところが4年生から
「上級生自身が違反してるのに……」と
苦情が出た。そこで5年生は学年大会を
開き「これでは後輩たちに示しがつかな
い。違反者を制裁しよう」と決議する。
怪しい生徒も含めて数名が「俺は吸って
ない」と宣言した後、思いもよらぬ大西
が進み出て「俺は吸った。迷惑かけて悪
かった。皆で俺を殴れ」と叫ぶ。一人が
進み出て殴ると鼻血が出た。鼻血は大西
と徳田の共通の症状で、二人が組むこと
になっている柔道の際も困ったという。
そこで徳田は腰の手拭で顔を拭いてか
ら軽く殴った。それに続く者はなく自然
解散となった。「ほかに怪しいのが居

るのに指摘せず、いかにも大西らしかつ
た」と徳田は記している。

徳田の自宅は、学校から5キロばかり
離れており、当然、徒歩通学の区域にあ
る。ここから加古川本流（この地域は海
抜95メートルという本州中央分水界では
最低の鞍部なので、江戸時代以来、瀬戸
内海に面した高砂との間を高瀬舟が就航
し、山間部と大阪との交易で地域に富を
もたらした）に沿って8キロほど遡ると
大西の自宅がある芦田村（現在は青垣町）
に達する。ここは通学可能ギリギリの区
域で、親の負担を案じて徒歩通学する生
徒もいれば、大西のように寄宿舎へ入る
生徒もいる。

寄宿舎へ入った1年生は、石油ランプ
のホヤ磨きなど雑用を仰せつかつて大変
だが、往復6時間も通学に費やす必要は
なく、現代の部活に見られるような上級
生の私用に追われることはなく、勉学に
充てることができたし、舎監や上級生も
奨励した。同38年の校友会誌は、前学年
度の統計を用いて、入居した「舎生」78
名（全体の3割弱）と通学生194名と
の学業を比較しているが、寄宿舎組の方
が好成績である。

毎月の賄料出費（炊事夫2名、ボーイ
1名の賃金や薪炭費は含まれない。公費
負担だった可能性もある）の報告も掲載

されているが、一人当たりの負担は、ほぼ3〜4円だ。企業物価指数の比較で見ると、明治34年当時の1円は今の1500円程度に相当するといふから食費実費は今の1万円少々だったことになるが、これでは安すぎる。一方、明治時代の小学校教員初任給が月額8〜9円だったから、これを現在の20万円に当てはめると当時の1円が今の2万円に相当し、食費実費は6〜8万円となり、これは高すぎる。具体的な献立を見ると、「同38年9月24日(朝)黒豆・漬物、(昼)牛肉・甘藷・漬物、(夕)ぼら刺身・漬物、9月25日(朝)ボラ汁・漬物、(昼)南瓜・漬物、(夕)しいら・漬物」とまづまづの内容である。

寄宿舎生活の大西は、帰宅が待ち遠しい土曜日なのに自宅へ帰らず、親しい徳田家で度々ホームステイしている。他にも二、三人は泊つたらしい。校内では「風紀取締り」に当る大西も、よく世話になる徳田の母には卒業後も頭が上がり、母の方も死ぬまで「瀧治郎が…」と呼び捨てであった。

戦後の校史には、この第9回生にとって不名誉な事件が伏せず堂々と記されるようになった。「大江校長の後を継いだ第3代校長の情操教育推進により、女学校の多くは取り入れていたが中学校で

はまだ少なかった音楽教育(当時の表現では唱歌教育)が明治38年導入され、東京音楽学校を出たばかりの犬童球溪(本名は信蔵)教諭が招へいされる。ところが『小学校や女学校でやるような唱歌教育を、学ぶべき科目の多い中学校で実施するとは何ごとだ!』と反発する生徒たちのボイコットで授業が行えず、失意の犬童教諭は、翌春、新潟高女へ去っていく。だが同40年に彼が作詞し、ジョン・オードウエイの原曲に載せた「旅愁」はヒットする。どうも柏原滞在中に作られたものらしい。質実剛健と称して無教養かつ野蛮な校風が恥ずかしい」という自嘲と反省である。

学校のカリキュラムが改正されると、それが実施されるのは一般に1年生であり、既成のカリキュラムで学んでいる高学年には適応されない。「騒いだのは第9回生!」とは校史にも明記されないが、該当するのは明らかに彼らである。入学直後の1年坊主が大騒動を引き起こすとは考えにくい、その後の彼らの団結や行動を見ると有り得ないことではない。

だが大西たちの名誉のために書き添える、教員の異動記録を見る限り、自分の教育理念と合わない学校を1年か2年で立ち去る事例は数多い。それも負け犬として寂しく去るのではなく、自分を買っ

てくれる新任地へ胸を張って向かっている。学校は増える一方で、資格のある教師には当時は売り手市場だ。犬童教諭自身も新潟高女で2年勤務すると郷里の九州へ転出している。

そして犬童教諭をスカウトした平沢第3代校長が姫路中学校長として11月に転出したのも一因かもしれない。まだ唱歌教育への理解者は少ないのだ。筆者自身にも似たような体験がある。朝の8時から夕方5時まで講義が詰まっている多忙な大学へ入学したのに体育授業があるのだ。「教員養成大学や体育大学ならともかく、なぜ?これも米国の押しつけ?」と反発した。第9回生たちにも似たような反発があったのかもしれない。

ただ器楽演奏の方は、同好会的にドン行われている。前述の校友会誌38号は、「寄宿舎開舎5周年記念に楽器購入のため、寄宿舎倶楽部委員が4月に上阪。大太鼓、小太鼓、堅笛、クラリネット



友人(大西と思われる)を描いたクロッキー

トが5月に搬入され、11名の鼓笛隊が編成可能となり、毎日、1時間余の練習が開始された。既存の風琴(アコーディオン)については、大童教諭の指導で練習するものとす」と記している。また6月には「蚩狩りが雨で中止となったので茶話会を開催。大童先生もご出席」と記し、「先生は、『ホトトギス』なる唱歌を歌われたり。何ぞ其の美なる。何ぞ流暢なる。実に窓下に杜鵑(ホトトギス)を聞くの威あらしめき」と褒め称えている。「日露戦争時代の軍国主義的な風潮で生徒が大童教諭を追い出した」という伝承とは大違いである。

なお、この大童球溪は、音楽家にして詩人であり、前述の「旅愁」だけでなく、ウィリアム・ヘイス作曲の「故郷の廃家」の「直訳でない訳詞」も見事に行った。麻の如くに乱れつる・世をば鎮めし織田公の・威烈残りて山水の・姿うるはし柏原：」で始まる柏原中学校校歌の作曲を依頼された際、郷里に近い熊本高女に在職していたが、喜んで応じている。

3 思想の相違を超えて続いた友情

(1) 失意の徳田を叱咤激励

兵学校へ進み(第40期、明治45年卒)として順調に歩み出した大西に対し、徳田の方は悲惨だった。一時は福知山線の北半分の駅舎建設さえ手掛けた建設業の

大叔父が日露戦争後の経済変動で破産し、連帯保証人の祖父から進学断念を請われた徳田は、神戸の英国商館へ就職する。横浜や神戸でなく丹波の中学生をよくぞ採用したものと驚くが、これも週7時間の英語教育の成果であろう。

大西からは「人生全て塞翁が馬」と激励が続くが、ここで叩き込まれたキングズ・イングリッシュとマナーは、後に8年も続くニューヨーク勤務の際、また戦時中、印度の抑留所で英国官憲と渡り合う際、またとない武器になった。

この進学断念は、自分たちの子弟が高等教育はおろか中学校入試にも合格できない債権者たちへの遠慮、すなわち日本文化独特の忖度によるものと知った徳田は、英国人弁護士への支援も受けて債権者と交渉し、1年遅れで大阪高商へ進学する。また、成人後は生家を出ていく二男の徳田に早くから祖父が贈与しておいた資産まで債権者が差し押さえたのは違法であると知った徳田は、弱気の祖父を説得して訴訟を起こし、神戸地裁での一番では勝訴する。この時期の大西からの激励や徳田が祖父に送った書状を読むと、「日本独特の忖度精神でなく、近代国家らしく法規で権利を主張しよう」という若人の主張がみなぎっている。

だが二人の思想を分断したのは、美濃

部達吉東京帝大教授らが唱えた天皇機関説であった。大正初期においては、これは憲法学の主流であり、一部の貴族院議員や青年将校が「これはケシカラン。不敬だ」と、美濃部と同じ東京帝大教授の上杉愼吉らが唱える天皇主権論(憲法学者の間では少数論)を振りかざすのは満州事変以降である。ところが大西は、大正時代から「天皇主権論」もしくは「大西独自の日本主義」に陶醉し、徳田に送つ



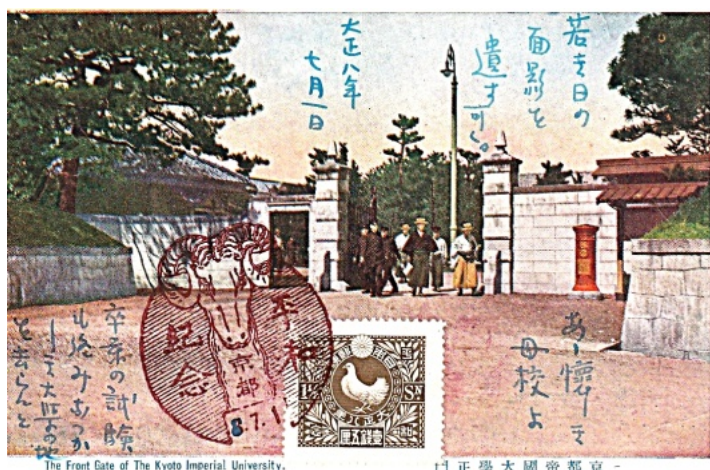
中学4年から兵学校へ進んだ大西が正月休暇で帰省し旧友たちと記念撮影。大西の向って右後ろが徳田

た書簡もその主張で満ちている。一方、一高や三高などのナンバースクール以外には門を閉ざしていた帝国大学が、学生の死亡や退学で生じたわずかの欠員を補うため募集する「専科」の数名の枠に幸運にも合格して大阪高商から京都帝大法学部に進学した徳田は、憲法学の佐々木惣一教授の弟子となったから大西に同意するはずがない。後に美濃部教授追放運動が高まると、東京帝大法学部は二つに割れるが、京都帝大法学部は（憲法学や刑法、民法などの専門を超越して）教授全員が天皇機関説を護るのだから。

大正七年夏、せっかくの上陸休暇を帰省に充てず京都・岡崎の徳田の下宿を訪れた大西中尉は、カンカン照りの京大校内を見学した後（写真・当時の京大正門）、徹夜で論戦する。最後の言葉は、「君の思想は危険だねえ」であった。同八年夏に卒業した徳田は、三菱合資会社に採用された後（同社は、まもなく商事と銀行に分割）、直ちに年末、ニューヨーク支店へ派遣されるが、容赦なく「天皇機関説はケシカラン」の葉書が大西から送られてくる。二人とも憲法学者になったらよかったのかも知れない。

(2) 東京で交流再開

新卒社員なのに一等船客として徳田は渡米する。隣室は米国陸軍大佐一家だ。



京大正門

で、教育関係者や無名の芸術家（三浦環など）が訪米すると日本人会がアテンドや入場券の販売に協力するのが実情だった。

郷里の父母への手紙には「国際的に活躍する女性には欧米にはゴマンと居るのに、日本では稀だからチャホヤされて」と厳しい井上秀評が記されている。一方、東京では関東在住者の手で柏原中学校同窓会が催されるが、卒業生でもない井上代議士が（同中学校が開校する以前の世代なので篠山の鳳鳴義塾を卒業）来場して演説するので大西大尉が立ち上がり「これは入船山（柏原中学校の裏山）の想い出を共有する者たちの会合なのに……」と難詰する。正論を吐くので煙たがられるという二人の性格は、中学卒業後、十年過ぎても変わらないのであった。

欧米諸国に負けないという新興国・日本の気負いが感じられる。だがニューヨーク日本人会では新兵扱いだ。おまけに法学部政治学科卒で学会誌も購読しているというので、郷里の大先輩・井上秀日本女子大学教授（後に校長）と夫君の、これまた郷里では徳田家の親戚にあたる井上雄二代議士が国際婦人会議出席で訪米となると米国の政治学者へのアテンドで奔走させられる。当時は大使館も手薄

大正末期に徳田が結婚すると霞ヶ浦航空隊副司令の大西は新婚の二人を官舎へ招待して歓待する。ハイカラな海軍だからカードでも楽しむのかと思ったら、同僚が麻雀セットを借りに来る。そこで大西は十数冊のノートを見せ「高等数学を勉強し、確率論を学んだ。上手く行きそうなら海軍辞めて相場師になるつもりだ」とうそをつく。以前から「貴様は将棋さえやらないから面白くない」と文句を言う大西だからギャンブラーとは想像してい

たが、相場師願望と正式に聞いて徳田は驚いた。

昭和3年3月に大西も結婚するが、その前に多忙だったはずの大西が淑恵夫人を伴い、第一種正装で田園調布の徳田家を表敬した写真が残されている。事前の通知があったのか、丹波在住の徳田の母（当時60歳）も同席している。大西は後日、中学時代に世話になった徳田の母を自分が指揮する特務艦へ手を曳いて案内し、乗組員は彼の実母だと思ったと徳田は記す。

ところが、その夏の夕方、大西は、予告もせずに徳田家を淑恵夫人と共に急襲する。今のような冷蔵庫もなく、急な準備で大変だったが、何とか四人は食膳に向う。通常は静かな大西も酒が入ると自分だけを聞き手に大言壮語を始める。徳田の自由主義的な思想を叱り自己流の日本主義を説き黒田節を唸る。当時の田園調布駅周辺にはタクシーもないから終電までに送り出す必要があるが、上機嫌で中々腰を上げない。三人で後押しして、やっと目蒲線に押し込んだ。大西も嬉しかったのだろう。

秋になると大西は、淑恵夫人の四姉妹と長姉の夫君も帯同して再訪する。迎える側も盛装しているから「不意打ち」ではないようだが、残された写真ではきさ

くな大西は最前列で寝転んでいる。額の包帯は、飛行機乗りに付き物の怪我によるものらしい。

その後、大西は海軍航空本部参謀、徳田は商社機械部の航空機輸入主任として公的にも接触する機会が多くなるが、大西は常に私服で来社した。ところがある日突如、制服で来社し理由は秘したまま便宜供与の提供を請う。「三菱商事の臨時社員にしてほしい」と。徳田も理由は



昭和3年、結婚前に徳田家を表敬訪問した大西

尋ねない。希望の場所はハワイ。ハワイに支店はないので、大学同期生で銀行に入り早くもハワイ支店長を務めている親友を紹介した。その結果、大西は臨時雇いの漁船員となつて米太平洋艦隊の演習を観察するが、どう見ても、あの精悍な顔つきでは漁師には見えなかったという。これは徳田が戦後に知ったことである。

(3) 真珠湾奇襲は大失敗

昭和16年12月8日、日英開戦により任



徳田家を再訪した大西

地のシンガポールで英国官憲に拘束された徳田は、同地の在留邦人と共にインドへ送られた後、外交官交換船・龍田丸に便乗を許されて翌年9月に帰国する。東京高等工業へ進んだ大槻喬東工大教授、東京帝大理科大学へ進んだ福井有三海軍艦政本部造兵監督官等の在京第9回生数名が銀座で歓迎の小宴を設けた。海軍航空本部総務部長として多忙な大西少将も駆けつけ、「俺は真珠湾奇襲に反対して作戦から外された」「あれは大失敗だった」と述べて級友を驚かせた後、「航空決戦の時代なのに艦隊決戦主義の海軍は頑迷固陋。だから今回の海戦もあの始末なのだ」と嘆く。だが帰国したばかりの徳田には、それがミッドウエー海戦を指すとは理解できずジャワでの海戦と記している。

これは日本のジャワ島攻略陸海軍部隊と、それを阻止するオランダ・米英豪の連合軍艦隊との数回にわたる会戦である。「月月火水……」の猛訓練にもかかわらず艦砲射撃は外れ、自慢の酸素魚雷も次々と自爆して（初戦では敵旗艦「デ・ロイテル」を見事に撃沈したが）日本艦隊は手こづつた。最後はジャワ島西部のバタビアで部隊揚陸中の輸送船団に米重巡「ヒューストン」に突入され、発射した我が魚雷で輸送船が何隻か沈み、最高指

揮官の今村均陸軍中將も泳いで上陸する醜態であった。軍を追うようにシンガポールやジャワへ着任した民間人にも知られてしまったから、帰国途中で寄港したシンガポールで徳田も耳にしていた可能性がある。これと混同したのだろう。

終戦直後の9月、県知事も参列して大西の村葬が郷里の芦田村で営まれた。胃潰瘍で帰省・療養中の徳田も車で迎えられ、次のような短い弔辞を述べた。「君ならば多分やるだろうと想像した自刃、実に天晴と思う。対米戦争で果たした君の役割は、五十年、百年後の史実が君を位置づけるだろうが、まれな経験と知能を駆使して最善の努力を尽くしたことを疑わない。安らかに瞑目せよ」。だが徳田が「トイレットペーパー」と軽蔑していた巻物状の弔辞は読まなかったので、公式の弔辞は残されていない。

超満員の列車に乗り、遺骨を抱いて帰省した傷心の淑恵夫人は徳田家で一泊され、太西の遺書も見せられた。ポツダム条約受諾を決めた最後の会議の後、列席者が全て退出しても「何か策は残されていないか」と模索する大西だけは、頭を机から上げなかったことを夫人は関係者から聞かされていた。それを知った徳田は「太西こそ本当のダイハードだ。いわゆる勝負師ではない」と記している。九

月なので栗や松茸の土産がない。未だ青い柿をもぐ父の後ろ姿に、一年坊主の筆者は敗戦を実感したのだった。

（終り）



村葬後の身内だけの写真。住職の右が淑恵夫人。その2列後が徳田夫妻。神戸の自宅が全焼した徳田は喪服が無く、白スーツで参加した

特攻開始80年特別寄稿

菅原道大と大西瀧治郎の特攻指揮にみる
苦悩とけじめ

元防衛大学校教授 横山久幸

はじめに

本稿のテーマは日本人にとって機微な問題であり、やや無謀のように感じる読者もあると思う。こうしたテーマを思いついたのは、筆者が防衛大学校退官後に学生に特別講義をする機会があり、そのとき「人物論」の一環として「特攻に対する指揮官としての責任の取り方」について議論させたところ、その結論は予想に反し菅原と大西への共感がほぼ同数であったことへの驚きからであった。こうしたテーマで防大生に討論をさせたのは、特攻について、そのほとんどが特攻隊員の心情やそれを支える人々を題材としたもので、もう一方の当事者である特攻を命じた者、すなわち特攻を指揮した者の立場やその心情からは、これまでほとんど語られることがなかった。筆者の経験から部下を守ることも上に立つ者に課せられた大きな責務であるとの認識からすれば、敗戦濃厚ななかで、どのような想いで隊員に特攻を命じていたのか？死を前提とした命令を発しながらどのような統率をしようとしていたのか？そして、

敗戦に至った時に特攻を命じたことに対するけじめ（責任）をどのように果たそうとしていたのか？などが常々気になっていたからである。

当時、陸軍航空総監部次長であった河邊虎四郎は、昭和二十二年八月二十三日に連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）へ提出した「最高統帥部の航空特攻の取扱に関する陳述書」のなかで、航空特攻の施策に関し、次のように述べている。

註1

昭和十九年末頃特攻部隊を軍令に依って編成すべきや否やに就いて陸軍内部で論議があつた時阿南（惟幾、以下括弧内筆者）航空総監と次長であった私とは強制命令を以て編成すべきでないという強い考えを持ち参謀本部第一部長宮崎（周一）中将与此の問題に関し懇談した。其の結果同部長は私の意見に共鳴し命令により特攻を編成する参謀本部の腹案を撤回した。

そして、「大規模の特攻を胸算しつても最高命令を以て特攻隊を編成し空中勤務者を強制して特攻隊に入れる措置は一切採られなかった」と述べている。その理由として、河邊は第一に、特攻があくまでも「各操縦者自らの判断に依つて個々

に実施すべきものであつて一般の戦法のように命令を以て実行を強制すべきものでない」こと、第二に、「多数の特攻志願者があつて其の中から特攻要員を選定すれば事足る状況で強制の必要がなかった」ことを挙げている。河邊の陳述は、特攻隊が決して「最高命令」をもつて編成された訳でなかったとしているが、実施部隊が出撃命令を出したことは、陸海軍に若干の違いがあつても特攻による戦死者を二階級特進と認定する措置を採つたことなどから明らかであろう。

現地指揮官として沖縄特攻作戦を指揮した第六航空軍司令官の菅原道大は特攻作戦を「統率なし」といい、一方、第一航空艦隊司令長官として最初に神風特別攻撃隊を編成した大西瀧治郎は「統率の外道」と評した。両者はともに航空畑であり、航空戦力の特性と搭乗員養成の困難さを十分に理解しており、飛行機による「体当たり攻撃」が航空作戦にあつては決してならない戦法であること承知していた。しかも、特攻隊員が志願であつたとしても、部下に死を賭す行為を命じることは指揮官としてあるべき姿でないことを自覚していたはずである。まさに特攻作戦における統率は苦渋の連続であつたろう。それでも敗戦に伴う二人の身の

処し方が極めて対照的であったことはよく知られている。菅原は、軍司令官としての敗戦処理を行った後に特攻隊員の供養と慰霊にその生涯を捧げた。一方、敗戦時に軍令部次長であった大西は、その翌日に自決している。戦後も生き延びた菅原に対して、特攻隊員の遺族はもちろんのこと菅原の身内からも厳しい目が向けられている。註²

そこで本稿では、菅原と大西の航空戦力に対する認識とそれぞれの指揮統率の信念を明らかにした上で、敗戦に直面して、なぜ指揮官としての身の処し方に違いが生じたかについて、両者の特攻作戦に対する統率のあり方から探ってみたい。このため本稿は、敗戦における両者の責任の取り方の是非を論じるものでないことをあらかじめお断りしておく。

なお、本稿を執筆するにあたり、菅原に関しては、自身の日記をはじめ戦後に記した回想などが多く残っており、一次史料や菅原の心境などに依拠した分析が可能であった。一方、大西に関しては自身が残したものはもちろん関連する史料が極めて少なく、戦後に出版された書籍を参考にした。このため両者の比較分析に関して偏りがあることを承知されたい。

1 陸海軍における統率の概念

陸海軍において「統率」をどのように認識していたのかを見てみたい。まず、陸軍において統率を明確に規定したものはなく、昭和三年の「統帥綱領」では

「統帥の本旨」について「常に戦力を充実に、巧にこれを敵軍に指向して実勢力就中無形的威力を最高度に発揚する」とあるが、「統率」については、同書の用語の解説で統帥との関連において次のように説明している註³。「憲法上（「明治憲法」）に於ける統帥及び勅諭中の統率なる語は同一義に使用せられ、共に統帥大権を示すこと明らかなり」として、ともに天皇の統帥大権に基づく行為であることを明示している。そして「統帥とは通常大軍を指揮運用するの意に用いられること多く、技術的範囲に属し、統率とは御委任の範囲内に於ける統帥権を示し部下軍隊に対する統御、経理、衛生等の全般に亘り権限の範囲を有しその意義統制に比し広汎なり」「軍隊指揮官が戦術上の原則を实地に適用し、その企図する所を部下軍隊を以て実行貫徹する」としてしている。すなわち統率とは任務を遂行するために委任された統帥権の範囲内において「部下軍隊に対する」権限を行使し一途の方向に向かわせることである。この統帥権の権限内ということが敗

戦を受容する際の菅原と大西の身の処し方に大きく影響することになる。

次に、海軍における統率は、昭和十二年の海軍大学校における「統率学講義」の教範によると、「統帥は普通国軍若しくは大部隊を指揮運用する場合に用ひらる」として「統御とは部下をして服従の実を挙げしむる」こと、「統率とは部下を統御し自己の意思の如く運用する」とあり註⁴、陸海軍ともほぼ同様の認識であったことがわかる。

また、将帥の必須の資性として、「統帥参考」では「堅確強烈なる意思及其実行力を第一として至誠高邁の品性、全責任を担当するの勇氣、熟慮ある大胆、先見洞察の機眼、人を見るの明識、他人より優越しありとの自信、非凡なる戰略的識見」などを挙げている。また、「統率学講義」では統率上の努力として、「垂範躬行、熱意及公平、命令適確厳正、賞罰就中罰則の適用を信明に」を挙げている註⁵。

このような統率者としての資質は、どのような部隊であっても、またその大小に関わりなく求められるものであり、指揮官としてのあるべき姿を示したものである。多くが今日でも通用するものである。しかし、陸海軍の統率の概念には、

作戦の「実行貫徹」を命じる指揮官の部下に対する責任について明らかにされていない。このため部下との関係性については個人の資質に負うところが大きく、統率の実態に少なからず影響することになる。

2 特攻指揮官としての統率

(1) 菅原の統率の特徴

菅原は六航軍司令官としての特攻作戦の指揮を「統率なし」と戦後に語っているが、そもそも菅原は統率をどのように捉えていたのか。菅原は昭和二〇年八月十二日、終戦の三日前に六航軍参謀長及び直轄部隊等会同において「現示具現の為現況に即応して部隊長は如何に処すべきか」と題した訓話を行っている。この訓話は、徹底抗戦を説いた陸軍大臣及び航空総軍司令官の訓示を受けて註6、統率修養等の経験が浅い尉官級の隊長に対して自己の経験から統率のあるべき姿を語ったものである註7。

このなかで、「統率の要は『部下を覽るに』在る部下から『ウチの隊長は』と云ふ信頼を得ねばならぬ。乃ち隊長らしい隊長でなければならぬ」と説いて、指揮官の心がけとして「らしくせよ」と求めている。この「らしくせよ」は「自己反省の徳憑」でもあるとして自己規制の

在り方を示したものである。

次に、統率の要道を説示するとして、「部下に対しては涙と汗」を流せと説いている。菅原によれば、人間は体内には重要な三つの液体、すなわち血と涙と汗を持っている。血を流すのは一生に一度、国家の緩急を告ぐる場合であって決して私的や個人の為であってはならないが、「汗は何時如何なる場所で誰れもが如何に多く出しても差支ないものである」。そして涙だけは人類の独占だから「他人の為にこそ時に応じて流すべきで（中略）自分の為には流してならぬもの」である。すなわち「此の涙を有効に汗を最大限に使用することが統率即ち部下に対する隊長としての最大関心事であらねばならぬ」ということであつた。「涙を有効に」とは「骨肉の至情を以て部下に接せよ」ということであり、「汗を最大限に流かせ」といふことは労を惜まず率先垂範に、陣頭指揮に、進んで現地進出に最大の努力を払へといふことであつた。

菅原がこうした訓話を行った理由は、当時の陸軍の欠陥が統率力の弱化、とりわけ中隊長が部隊の真情を把握していないことにあるとみていたからであつた。「統率の第一歩は先ず『汗を流す現情把握に在り』といふ」ものであつた。菅原

は、この訓示以前の部隊長会同でも三現主義、すなわち現場進出、現状把握、現地指導を推奨していたが註8、菅原の統率は、徹底した現場進出で部隊の真情を把握し、部下と接することによって信頼関係を築き、そうした汗を流して始めて部隊の指導ができるという考えであつた。こうした考えは特攻作戦の統率に限ったことではなく、菅原が指揮官として常に心掛けていたことであろう。この史料の表題の横に長男に宛てて「縦ひ軍職に在らずとも後路の参考たるへし 二〇・八・一六」と自筆で記してある。軍人でなくなる長男に人生訓として渡したものであろう。

こうした菅原の統率に対する姿勢の一方で、戦後の回想では特攻作戦をして「統率なし」とし、「特攻作戦の指揮に任じたる軍司令官としての回想」のなかで「統率の特異性」を次のように説明している註9。戦後二〇数年平静に当時のことを思い出して、「普通の觀念の軍司令官らしい統率と言ふべきものがなかつたと云ふ意味で」用いたものであるとしている。菅原は軍司令官として特攻作戦が「全部お仕着せで、特攻要員選出に裁量の余地なく、約旬日間の隷属で血の通はぬままの器械的出撃である。作戦と云

ふのに働かない、出撃命令の出し放しである。作戦指導には（中略）容喙の余地がない」。しかも「統率の重点は軍紀風紀の厳正であり士気の振作である（中略）ところが軍の主体をなす特攻要員は使命に燃え意気軒昂、士氣正に旺盛で、この方面の施策を要しない」と感じていた。それゆえ「統率上最も苦悩したのは上意下達、下情上通の途絶である即ち上下の精神的繋がりのないことであつた」という。こうした状況は、米軍による九州爆撃によつて部隊の巡視がままならず「軍司令官として最も所期する部下の心の把握が不能である、況や特攻部隊に於ておや」であり、特攻部隊は最初こそ隊長の申告を受ける余裕があつたが、戦局の進展に伴つて「配当基地に入つて早きは兩三日、遅くも旬日を出でずして出撃と云うわけで顔も名も知る由なしで況んや相互情誼の触れ合いなど求むべくもない。然し（中略）士氣の面では些の心配もなかつた」という。それでも菅原は軍司令官の名も知らぬまま出撃するのでは「あまりにも残酷である。せめて出撃の首途を見届け祝福してやりたいと」見送りは極力励行したと回想している。

こうした特攻部隊は、菅原にとつて「真情把握てふ診断が出来て居らぬから

処方箋が書けず葉が盛れないのである。即ち真の統率が出来ない」状況であつた*10。特に、特攻隊員に対しては、「顔も知らず名も知らぬ人の命令で出撃するということは何としても寂しさに堪え難いことであつたらう」との想いは註11、菅原の目指す統率が出来なかつたことを言わんとしたものであらう。それゆえ「心中常に不安なのである、（中略）屢々健康を害し睡眠剤の服用を常習として居た」と日記に記すほどであつた。

（2）大西の統率の特徴

一方、大西は統率をどのように認識していたのであらうか。大西の考えを示しているのが、佐世保海軍航空隊司令であつた時に具申した「帝国海軍航空界の現状に鑑み教育訓練の計画実施上特に考慮しつつある事項並びに所見」であらう註12。このなかで現状に対する考察として「上級指揮官及幕僚の海軍航空の実情実力に對する認識不十分にして、其の發する命令に權威尠し」と題した項で、航空用兵に關し「必要に應じ、仮令相當の危険を伴うも、之を敢行せんとする場合、其の命令の遂行に附随し、部下の生命を犠牲に供する公算幾何ありやらを明に認識し、其の結果に對し全責を任ずる覚悟あるを要す」。そして安全に留意するあま

り消極的に陥ることを戒め、「危険率と研究訓練上の要求とを何の程度にて折合わしむる」かに準拠がないことから「航空用兵の指揮者は此の点に關し確固たる信念を有すること絶對にして、此の信念は航空部隊の統率上重要な要素の一なり」といつている。これは航空における教育訓練の実施計画について述べたものであるが、実戦においては一層「部下の生命を犠牲に供する公算」が大きいことを念頭に、任務遂行に關して指揮官には「全責に任ずる覚悟」が求めていることを強調したものであらう。

部下であつた源田実は大西の性格を「思慮は周密且深刻」と評しているが、「全責に任ずる覚悟」を求める大西の統率はこうした性格と相まって訓練で確かな成果を収めている。野村直邦は空母「加賀」の艦長として昭和八年二月に着任している。この時の副長が大西である。野村は自身が潜水艦畑であつたことから、空母として最も重要な航空機搭乗員の教育訓練を大西に任せていた。当時「加賀」は大型発着甲板を有し、「鳳翔」とともに航空戦隊の主力を成していた。野村は大西を追憶し、この時に艦隊における航空訓練として重視された項目が「第一は、夜間に於ける飛行機の離着陸訓練、第二

は、洋上を航行する敵艦隊に対する、黎明攻撃の実施」であったが、「これ等の訓練目標をめぐる、連合艦隊の訓練が日夜くり展げられた（中略）時に悪天候を冒して訓練、演習を強行すること事も度々であったが、（「加賀」は）一ヶ年の訓練期間を通じ殉職者というものを一人も出した事なく、従って唯一回の葬儀を行うことなく、艦隊訓練の全期を終わったというので当時評判であった」。このことは「当時副長たりし故大西に対する部下の信望と同時に、同氏の指導よろしきを得たことに帰すべきもの」であると語っていた註13。

また、大西の統率の特徴に現場進出がある。現場進出は菅原も強調したことであったが、菅原のそれは任務遂行の「処方箋」を描くために部隊の状況を把握し、訓示などを通じて意図の徹底を図るといったことを意図したものであった。一方、大西の現場進出は、部下とともに戦うという陣頭指揮を心掛けたものであった。それゆえ「部下が心服し、部下以外の若き航空戦士の多くも彼を敬愛し、今尚景仰措かない所以」であったという註14。

作戦は事変の推移に伴って重慶から成都、蘭州等長距離奥地を攻撃目標とし、しかも中国軍機の必死の反撃によって被害が一層深刻となっていた。こうした状況のなかでの大西の着任であったが、幕僚であった福元秀盛は「二連空の上下は、忽ちにして強力な電気に打たれたような感激を覚え、新なる士気に振り立った」と回想している。この回想は大西の指揮に對する期待からであろうが、大西の陣頭指揮は搭乗員としての経験に裏打ちされており、部下の信頼を得るのに十分であった、大西は出撃に際し「最先頭の指揮官機よりは、より度々後方三角点に占位して、一般に最下級の搭乗員が操縦する飛行機に同乗」することを常としていた。大西は「常に一番危険で可愛想なのは、後方両角の飛行機に乗った三等航空兵だよ、喰い下がられたら最後防ぐ手がないのだから」といつていた。福元は「司令官は部下に号令する前に先づ其の部下と共にあり部下と共に死地に飛び込まれた。そして部下を庇護し援護された」とその統率ぶりを評していた註15。

平と最初の特攻隊を編成した航空隊の飛行長であった中島正の共著『神風特別攻撃隊の記録』のなかで大西が猪口に語ったこととして記されている。菅原の「統帥なし」のように大西自身がそうしたことを記した史料は管見する限り見当たらないことから、おそらくこの書がこの言葉の初出であろう。このなかで大西がこれまで再三「体当り攻撃」の申し出を受けていたが、フィリピンに着任して初めて特攻の決心がついたこと、そして大西は「こんなことをせねばならないというのは、日本の作戦指導がいかにまずいか、ということを示しているんだよ」といった後に、「なあ、こりゃあね。統率の外道だよ」といったと記している註16。猪口はかつて人事局課員の頃に連合艦隊参謀から「真珠湾の特別攻撃隊」と同様のシドニー湾への作戦を聞いて疑問に思っていたが、捷一号作戦で水上部隊の全力をあげたマニラ湾突入に対し、協力すべき基地航空部隊として手段がない以上、特攻が「何かしら許されそうな気もする」と思ったことを回想している。猪口は大西がこれまでの海軍の作戦指導が拙いがゆえに特攻作戦を行わざるを得ないというような状況に陥った意味において「統率の外道」といったように記しているが、

大西自身のこれまでの統率のあり方からすれば、当然「外道」以外のなにものでもないことは容易に推測がつく。

大西が最も危険な編隊後方三角点に位置する飛行機にしばしば同乗して出撃し、陣頭指揮にあたったことはすでに述べたが、大西は部下を持つようになった佐官の頃からよく口にも、筆にもしたことが「おれもゆく、わかとんばら（若殿輩）」のあとにおいてであったという註17。当時の航空の訓練は極めて厳しく「部下の生命を犠牲に供する公算」が大きいことを大西が認識していたことは先に述べたが、航空作戦にあっても陣頭指揮を心掛けようとする大西にあつて「死」は常に背中合わせであったといえよう。それゆえ大西にとって任務遂行の結果として部下が、あるいは自身が戦死することがあつても、「死」を前提とした「体当り」攻撃を行使することは統率として許されないことであつたらう。それゆえ大西は「統率の外道」という想いが強かったのではないかと思われる。なお、大西がフィリピンに着任する前に特攻作戦の採用を決心していたことについては後述する。

3 航空戦力に対する菅原と大西の認識と特攻

菅原も大西とともに航空の将校として、まさに陸海軍それぞれの「航空の育ての

親」ともいふべき存在でありながら、特攻作戦の指揮を執ることになるが、そもそも航空戦力をどのように認識していたのかを見てみたい。

(1) 陸軍航空と菅原

菅原は、陸軍士官学校第二期であり、歩兵として明治四十二年十二月に少尉に任官している。その後陸軍省副官や歩兵連隊の大隊長を経て、航空兵科が初めて誕生する大正十四年に志願して航空に転じ少佐となつてゐる。航空兵となつたものの、すでに少佐であつたことから、菅原は操縦の教育を受けることはなかった。このため航空部隊の統率に関して歩兵としての感覚が残つてゐるようにも思えるが、航空運用について陸軍作戦に捉われない空軍的用法という当時としては独特の見解を持つてゐた註18。

菅原は、昭和十三年七月から第三飛行団長として中国での武漢作戦、それに続く中支作戦を指揮し、その経験から、昭和十四（1939）年七月に板垣征四郎陸軍大臣に対して「航空を率いて感あり」と題した意見を具申している註19。そのなかで冒頭「陸軍は航空の温床に適せず之を温床化せんか為には当路者は先づ根本觀念に於て陸軍的伝統を放棄せざるべからず」、そうでなければ「如何に育成に努力するも陸軍航空は永久に栄養不良

児たるの域を脱する能はさるへし」と訴えている。その原因が「万事を伝統の陸軍式を以て律せんとする所に胚胎す」、一方「之に反し海空作戦の本質は一脈相通と云いわんよりは寧ろ全面的に近似するものあり」と述べてゐる。菅原がこのように航空作戦と海軍作戦に親和性を感じたのは、海軍が行つた渡洋爆撃に関して、朝野を挙げて絶賛してゐることをあはれ出しながらであらう。そして、菅原はわざわざ陸海空軍をそれぞれ「軍鶏」「鷹」「鷲」に例えて、鷹は雛鷹を育てるには自分の雛を育てるままでよいが、軍鶏は鷲の育て方が判らず鷲の羽根をむしりと脚を太くすることばかり考えがちである。これでは鷲は鷲らしく育つはずがないといふようなことまでいつてゐる註20。

次に、空陸作戦の本質の差異について触れて「陸軍武力の主体は結局人なり」、しかし「航空は人機一体を叫ぶも（中略）主体は結局飛行機なり即ち機ありての航空にして人ありての航空にあらず」との認識を示している。菅原に言わせれば、この「極めて平凡なる本質の理解十分ならざる」ために戦力組成や航空施策にしばしば異論が起こる。こうした無理解が「弾丸を射盡せば（中略）突入すへし」といふ陸軍的教育上の精神主義を適用し

て「爆撃機なければ偵察機にて機関銃なくも機自体敵陣に突入すべきにあらずや」というようなことをいうことになる指摘している註21。

この意見書では、日中戦争によつて航空戦力発揮の基盤が飛行機にあることが実証されているにもかかわらず、陸軍的伝統をもつて航空を育成し、航空作戦に精神主義を適用しようとする陸軍上層部の無理解を指摘している。菅原は後述するように第六航空軍司令官として特攻作戦を指揮することになるが、どのような想いであつたのだろうか。

(2) 海軍航空と大西

大西は明治四十五年に海軍兵学校四〇期として水上艦艇の道を歩み出すが、大正四年に海軍航空術研究委員となり、第六期練習将校として飛行操縦術を学び、終生を海軍航空と運命をともにすることになる。大西の航空に対する想いは、元部下に書き送った「海軍航空は小生の生命にして、之が健全なる建設発展の爲には、小生個人の名誉等は何等問題に無之、又小生の信じて行わんとする所は、御聖旨に合致しありとの信念を有し、何物も恐れず候」という一節によく表れている註22。大西の提唱した航空威力研究会が昭和一〇年に発足したことは海軍航空の

発展において画期となつた出来事であり、大西は当時横須賀海軍航空隊副長兼教頭であつた。この研究会の活動は、昭和九年前後より飛行機で戦艦を沈め得るとの論が航空関係者の間で唱えられるようになり、航空の使用法も主力部隊の警戒・援護から、決戦前の敵空母先制攻撃、すなわち制空権獲得の思想へ固まりつつあつた時期にあたる。その成果は、大西が航空本部教育部長の時に「航空軍備に関する研究」と題する意見書として起草された註23。この意見書の第一は「国防全局より見て、大型機をもつて強大なる基地航空部隊を急速整備するを要す」というもので、航空主兵論について論じ、さらに空軍独立問題、航空省設置問題についても意見を付している。この航空主兵論は、「大和」建設反対に見られた戦艦廃止論を含め大西が強く主張して止まない航空軍備思想であつた。

この航空軍備の本質について大西はどのように認識していたのかを見てみたい。大西は昭和十二年に「支那事変に於ける我海軍航空部隊の活躍に就て」と題した講演を行っている註24。ここで大西は飛行機の数だけで航空軍備の量を知ることができないことを説明した上で、航空軍備の本質を知るには、第一に「適当に訓

練された飛行機乗りの数」、第二に「飛行機の製造能力」を見ることであり、この二つが航空軍備比較の主要な要素となると語っている。この「適当に訓練された飛行機乗り」に関し、海軍の搭乗員としてどのような任務にも就くことができるようになるまでには最低三年を要するとしていた。また、練習機程度を一人で飛ぶことができる程度であれば一ヶ月か二ヶ月で十分であるが、「練習機をよちよちでも兎に角一人で飛び得るならば飛行機乗りには相違ないがこんなものは幾らあつてもいざと云ふ時には殆ど役に立たない」ともいつている。最初の特攻作戦は十分に訓練された隊員であつたが、その後は「練習機をよちよち」と操縦する搭乗員による特攻作戦が主体となつたことを大西はどのように捉えていたのだろうか。また、飛行機の製造能力について、戦時になると撃墜される機数以上に酷使することによる消耗が上回り、その補充が間に合わないことを挙げている。しかもこの時大西は日本の航空機生産がいわゆる「工芸美術品」のようであるから、戦時に向けて「根本的に多量生産に適するよう様な計画設計をしなければいけない」といつている。

航空戦力に対する大西の認識は菅原の

それとほぼ同様であり、航空戦力発揮の基盤となるものが搭乗員と飛行機の数であり、しかも実戦に投入できる搭乗員の養成、すなわち質の確保には多くの時間を要することを十分に認識していた。大西はそれを承知で特攻を指揮したことになる。

4 第六航空軍司令官としての特攻作戦と統率

(1) 菅原の特攻に対する認識

前述した「航空を率いて感あり」に見られるように、菅原にとつては「航空は人機一体」であり、結局「機ありての航空」戦力であることから、特攻作戦に任ずることは、その信念に反するものであつたろう。六航空軍司令官に就任した直後の昭和十九年十二月三十一日の日記には「何れの部隊にても飛行機足らず、空中勤務者の練度不良、燃料少なし等のことに帰す」、翌年元旦には「国防の脆弱性実は大なり、敵の長期戦の呼号に対し冷汗三斗なり。(中略)本年の夏期最も危険なり」と記して、本土決戦に備えて危機感を露わにしている。

しかし、戦局がさらに悪化してくると、六航空軍は二十年三月二十日に海軍の連合艦隊司令長官の指揮下に入り、海軍航空とともに特攻作戦に踏み切ることになる。

菅原は、二十二日の長官申告後の参謀総長に対する状況報告で「決死努力を誓うのみにて必勝の確信を言い得ざりしなり」と日記に記している註25。このことに關し、「如何にせむ団下の戦力關係を正當に判断すれば最劣の戦法に満足せざるべからざる次第」で、上司の判断を誤らせないよう正直な報告を行い「決死努力を誓ふのみにて必勝確信を言い得ざりし」であつたと戦後に回想している註26。それでも特攻作戦を指揮したことに關し、菅原は、特攻という決死敢闘の行為が危局に処する独断的敢闘行為として開戦以來枚挙にいとまがないものの、「急迫せる戦局打開のためのこの散発する敢闘的行為を組織化し遂に一戦法として採用するに至つたことに問題があるのであつて毀誉褒貶もおのづから生じる」と語つている註27。その反面この特攻を戦法として認めて採用しようとする氣運が「実に急迫する戦局の要請に應ずる自然の結果に外ならないが、その濫觴は比島会戦中即ち昭和十九年十月二十五日海軍第一航空艦隊司令長官大西海軍中將の英断に依つて指令実施せられた」としている。この特攻作戦を採用するに至つた背景には、燃料の節約による教育訓練時間の短縮、飛行機生産能力低下に伴う旧式機の利用、

有能航空戦士の激減を挙げ、「あるものはおんぼろの飛行機とよちよちの飛行士だけであるから、それでも戦はねばならぬとなれば解答は簡單明瞭である、即ち体当り戦法である」ともいつている。

菅原は、特攻という敢闘的行為を戦法として組織的に用いたことが問題であつたとしながらも、当時の航空部隊の状況から「体当り戦法」しかなかったとしている。しかし、菅原は第三飛行団長時代の陸軍大臣への意見具申において航空は「機アリテノ航空」として、陸軍的な精神主義を批判し、「飛行機と人」が航空戦力の基盤であることを十分に認識していたはずである。菅原は特攻について語らないのではなく語れないといつてゐるが、菅原にとつて特攻作戦の指揮は迫り詰められた結果の行為であり、まさに自ら切り開いた陸軍航空を自らの手で葬り去る思いであり、陸軍航空の終焉を意味するものであつたのではないだろうか。

(2) 特攻作戦における統率

菅原が特攻作戦に關して「統率なし」とした認識についてはすでに述べたが、實際どのような指揮統率を行ったのか見てみたい。菅原は「ヨチヨチの特攻隊であるから距離の短縮即戦力増大」、すなわち未熟な搭乗員の飛行距離を短縮する

ため離島に前進基地を設けようとした。このため第一次攻撃集団を二十年四月一日に徳之島に向かわせようとするが、整備不良のため出発が三日となった。ところが二日夕方に徳之島飛行場は米軍の攻撃を受け滑走路が被弾してしまっていた。徳之島基地は知覧に電報を発したものの、すでに一八機が発進した後で、しかも対空無線も通じず、徳之島に到着した一四機のうち七機が大破する有様であった。しかも沖縄の地上戦も中・北飛行場の確保・奪回がならず、すでに東海岸までも制圧されたことから、菅原は四月四日の日記に全般情勢判断として、「昨年以來我は準備不十分（特攻作戦能力において準備不足・能力不足のこと）にて、常に敵に戦闘を強いられつつ、同様の失敗を重ねたり（中略）極めて悲観的なりと雖も此れ率直な処なり」とし、この責任について、これまでの自分の職務（航空総監兼本部長、教導航空軍司令官）が作戦準備に関りがあったことから「誠に不相済儀也」と記している註28。その一方で第一次航空総攻撃が六日に決したことです。

「正に乾坤一擲の大決戦を遂行せんとす。斯くて意漸く収まる」とも記している。そしてその夜は眠れなかったことから「先ず神経衰弱の第一歩かと悲観す」と

結んでいる。こうした菅原の様子は内心如何に動揺していたかを示すものであるが、これを戦況不利な状況にあつて指揮官としてあまりも弱すぎると見るか、指揮官としての当然の重責と苦悩と見るか難しいところである。第三二軍航空参謀として沖縄戦を戦い、その作戦経過報告を牛島満軍司令官に厳命された通信参謀の神直道少佐は、報告後に六航軍参謀となるが、菅原の指揮官としての態度を「自信、迫力、指導力を欠く」と評している註29。

四月六日の第一次総攻撃に際して、菅原は自身の統率方針である三現主義を実践して特攻隊の発進基地となる知覧、万世、都城を訪れている。この時の特攻隊員の様子について、菅原は第一次総攻撃ということでいづれの隊員も士氣旺盛であったが、「恰も義士打入りの様相に彷彿たり」、また「異様な服装」の者があつたことについて、「死出の一刻前敢えて咎める気にはあらず微笑みを以て送った」と語っている註30。そしてこの時の訓示は次のようであつた註31。

今回の挙に参した諸子の行動は、崇高なる軍人精神の発露であつて、肉軀に死して靈に生き、現在に死して未来に生き、個人に死して国家に生

きるものである、我等もあとに継ぐであろう、安んじて征け

このような訓示はその後何回となく繰り返しているが、菅原は出撃前のこのような訓示について「必死を決意せる隊員に今更激励の要なく語れば涙先立つ有様なので爾後はただ左の三語即ち、元氣で征け、成功を祈る、最後まで諦めるな、とだけに止めた。その代わり一人一人と交はす注目には時間をかけた。互い見かわす眼眸に無限の感謝感激を窺める数刻こそ最も感激ではあるが心中苦痛に堪えがたきものであつた」と回想している。

菅原が敗戦を受けて大西のような決断をしなかったことに關し、特攻隊員に対する訓示のなかの「我等もあとに継ぐ」といったことを引き合いに出すことが多い。上述の訓示は、「特攻作戦の指揮に任じたる軍司令官の回想」から引用したものであるが、「第六航空軍司令官天号作戦に關する回答」では、「我等も又一億国民が諸子に続く」ともなっている註32。いづれの回想も「我等」であること、しかも後者の回想では「二億国民」となっていることから、菅原は特攻を命じた者の統率の責任として「あとに継ぐ」ことを念頭に置いていた訳ではないといえる。このことに関しては軍司令官の出撃に關

連して後述する。

なお、総攻撃の結果は、援護にあたつた飛行一〇二戦隊で三分の一、特攻隊で五分の一引き返す結果となり、四月六日の日記には「極めて不成績と云うべし、之れ予が総監（航空総監）として編成し、軍司令官（教導航空軍）として教育に任せし部隊なり。其の罪総て我に在り」と記している註³³。この日記の記述に関し、「皆夫々精一杯やつての結果だ、と諦めるより外なく（中略）総べてを整備の不備に在りと断じ精神的影響などとは考えなかった」と回想している註³⁴。整備については、数日前に技術団の派遣によって改善されているにもかかわらず、整備不良とする認識が強かつたようである。菅原は「時日の経過に従い志願の減少を来し」ていたことを自覚していたようであるが、「特攻要員免除と云えば名与失墜当人を殺すことになる」と思っていたこと、特攻といつても「鉢当りせよ」と命令するのではなく「一般の場合と同様攻撃すべしと令せられる」との思いから、隊員を疑うことを避けたのであろう註³⁵。

物量投下など沖縄戦への支援がままならないなか、六月十七日に隊長会同と兵棋演習において訓示を行っている。ここで菅原は自身の統率方針である「三現主義」「二偏則」「一問題」について述べている。「三現主義」は現地進出、現状把握、現場処理であることはすでに述べたが、当時陸軍大臣の東条英機も高唱した陣頭指揮の具現化であつた。また、「二偏則」とは、「統率の常道たる物より人、罰は軽きに失し賞は重きに失するも可なりとするのを、この急迫な危局に於ては逆説已むなしと認める」ということであつた。この「二偏則」は極めて厳しい要請であつたが、日記の解説には「皇軍の存亡、全軍特攻、そして球部隊（第三二軍）の玉砕を目前にし、翻つて隷下部隊の飛行機事故の頻発、軍記問題等もあり、軍司令官としては身の切られる思いからの要請と受け取られた」とある註³⁶。こうした要請はおそらくこれまでの菅原の「物より人」とする統率からかけ離れていたからであらう。そして最後の「一問題」は菅原が最も重要視としたことで、「各部隊長何れの時機にその死機を求めんとするやを強く脳裏に印象深刻せしめ、その覚悟を新たにせしめんとした」のであつた註³⁷。これは各指揮官に、職務に応じて特攻実行の時機方法を選択しておくよう決意を促したもので、「率先して特攻の範を示すべきか」「全隊の特攻を区署して後裕々隊長として最後の

止めを刺すべきか」について各部隊長の判断に待つべきであつて、軍司令官としてはこれまでのように手綱を締めないとしていた。この訓示は菅原の自身の口述であつたという。それでは菅原は指揮官特攻の時期をどのように定めていたのか。

「軍としての基礎戦力壊滅直後とし概ね十分の八時期と定めていた」という註³⁸。

八月中旬の航空総攻撃に際しての司令官特攻は、九七式重爆をもつて二十五日決行として飛行第六〇戦隊に準備を内命していた註³⁹。

5 第一航空艦隊司令長官としての特攻作戦と統率

(1) 大西の特攻攻撃の決意

海軍中央部は、昭和十九年九月頃には「体当り攻撃」の意図を有していたときとされている註⁴⁰。大西は、第一航空艦隊司令長官として赴任する直前に及川古志郎軍令部総長、伊藤整一次長、中沢佑第一部長と、じ後の作戦、特に特攻作戦開始時期について十分協議していたとされる。中沢は、この四者会談の際に大西が彼等の航空戦力の現状「とくにわが航空機搭乗員の術力について詳しく語つた」後で、敵の電波兵器の活用や空中待機による待ち伏せ攻撃などによって攻撃目標に到達することが極めて困難であり、「いたず

らに犠牲が多く有効な攻撃ができない状況である。この際第一線将士の殉国犠牲的至誠にうったえて、必死必殺の体当り攻撃を敢行するより良策はない。これが

大義に徹するところと考えるので、本件について大本營の諒解を求めたい」と申し出たと回想している。また、軍需省兵器総局第二局長であった多田力三は、大西に「比島へ行ったら特攻をやるうと考えているが君はどう思うか」と聞かれ、賛成しないとする。「たとえ特攻の成果が十分に挙げがらなかったとしても、この戦争で若者達が国のためにこれだけのことをやったということの子孫に残すことは有意義だと思う」と語ったことを回想している。そして大西は十七日にフィリピンのニコルス飛行場に着き、翌十八日には前任者の寺岡謹平と特攻作戦について懇談し「必死必中の体当り戦法以外には戦局を打開し、国を救う方法はない」という結論に達していたとされる。そして大西は、第二〇一海軍航空隊に対し「現戦局に鑑み艦上戦闘機二十六機（現有兵力）をもつて体当り攻撃隊を編成す」との命令を発した。こうしてそれまでは個々に実施されることがあった特別攻撃は、十月二十日以降軍令によつて組織的に行われることとなった。さらにこの日

にフィリピンに増強された第二航空艦隊司令長官の福留繁と大西の協議によつて、二十六日から二航艦も体当り攻撃に踏み切るようになった註41。

大西は、特攻が「統率の外道」であることを自覚しながら、あえて艦隊命令をもつて十中十死の体当り攻撃を命じたが、そこには菅原のような迷いすら感じられない。これをどのように解するか難しいところであるが、大西が航空戦力の特性を知悉しているがゆえに、もはや海軍の航空戦力の現状、特に「わが航空機搭乗員の術力」をもつてしては、米航空戦力に対抗することができないことを十分に承知していたことは確かであろう。それでも戦うことをあきらめないとすれば、特攻は「いたずらに犠牲が多く有効な攻撃ができない状況」から脱する手段であったのであろうか。大西とともに特攻作戦を指揮した福留は「大西は、日本精神の最後の発露が特攻であり、特攻によつて祖国の難を救い得ると確信していた」と回想している註42。

(2) 特攻作戦における統率

大西が一航艦隊司令長官として着任した時、アメリカ軍がまさにレイテ島上陸を開始する直前であったが、これを迎え撃つ一航艦隊の戦力は僅かに三〇機でし

かなかった。大西は味方の水上艦隊の出撃を支援するため「敵空母の六、七隻の甲板をやつつけて少くとも七日乃至十日間は飛行不能にせねばならぬ」ということから、一航艦隊先任幕僚の猪口力平や第二〇一副長、第二六航空戦隊参謀などを集め「どうしても体当りでなくてはならぬと思ふ」と話している。これを聞いた猪口は「結局最後の手としてはどうしても体当り攻撃を命ぜねばならぬと思つて居たが（中略）命ずるに其の人と其の時を得たるならば征く者の意気込は挙がり戦果は大いに挙げりここに全軍の士気を揚げるに至る」と感じたことを二〇年四月に行つた講話で述べている註43。

戦局がまさに追い詰められた状況にあつて、「最後の手」としてさまざまな特攻作戦が進言されるなかで註44、「どうしても体当り攻撃を命ぜねばならぬ」とは思つてはいても、実際に命ずるとなると、指揮官の立場として如何に難しい判断であるかを猪口は語っている。「最後の手」としての体当り攻撃を命ずる指揮官は相応の人物である必要があり、猪口はまさに大西をもつて人を得たりと思つたのであり、同席した他の者も同様であつたろう。それだけ海軍航空のなかにあつて大西は多くの者から信頼され、また期待も

されていたということであろう。

大西は、一〇月二〇日朝から待機していた特攻隊員二四名に対して訓示を行っている。それは、この日本の危急を救い得る者は大臣でも大将でも総長でも「自分の如き長官でもないそれは諸子の如き純真にして気力に満ちた若き人々のみである随つて自分は一億国民に代つて皆にお願いする成功を祈る」、そしては「体当りしたが無駄ではなかつたかどうか気にかかつて知り度いことであろう（中略）自分（大西）はこれを見届け必ず上聞に達するようにするからそこは安心して行つて呉れ、しつかり頼む」というものであった。この若者に対する期待は台湾に移つてからも同様であつて、「日本を救う者は三十才以下二十五才以下の若き人々で此の人々の現はす純真なる特攻精神とその実行こそ日本を救う原動力である」ともいつた註45。

猪口は、大西の若者に期待する心境を「純真なる精神が現はれ而も若さから来る満ち満ちた気力ここに日本を救うべき原動力があるに違いない」と読んでいた註46。また、伝記『大西瀧治郎』では「若き心の琴線をゆさぶらずには措かないであろうところの一語一句」と評している註47。訓示から読み取れることは、

少なくとも大西が若者に対して絶大な期待感をもつて語りかけていたことである。

また、特攻作戦における大西の統率の特徴は、必中必殺をもつてする必勝の揺るぎない信念を特攻隊員に語り続けていることである。大西は、十九年十二月七日銀河特攻隊「颯風隊」の命名式の訓示で「諸子は深く天祐神助を確信し、必成を期して勇往邁進せよ、私は指揮官として将又諸子の戦友を代表して神にかけて諸子の成功を祈る」と語りかけている。また台湾の各航空基地を視察した際に二十年三月八日に行つた長文の訓示では、「純然たる武力戦による、海の上で勝つ見込は殆んど無い」としながら、特攻作戦が相手に出血を強要して米国民の厭戦気分を醸成する「長期持久戦に依る思想戦に於て勝たんとする」戦い方である。「日本人全部が特攻精神に徹した時に、神は始めて勝利を授けるのであつて（中略）国民残らず此の覚悟で頑張るならば必ず勝つ。少くとも決して敗れることはない」として必勝の信念を語り、「今や飛行機や兵器は（中略）国民全部女子子供迄が勝つて貰ふ為に泣きながら作つた金に代えられない貴重なものである（中略）之を最後に預けられて、皆の代表として其の威力を発揮するのであるから、

其の責任は実に重大である」と特攻隊員を鼓舞した註48。

「必ず勝つんだ、一億同胞火の玉となつて戦えば必ず勝つ」というのが大西の口癖だつたという註49。大西は必勝の信念だけではなく、特攻作戦を「長期持久戦に依る思想戦」と位置付けていた。こうした作戦思想をフィリピンに着任する以前から持っていたのか、あるいは特攻作戦を継続するなかで意味付けていったか、定かでない。しかし、大西の統率は、特攻作戦の可能性を説くことによつて「少くとも決して敗れることはない」という期待を多くの若者に抱かせるものであつたといえよう。

6 敗戦における菅原と大西のけじめ

八月九日深夜に開かれた御前会議においてポツダム宣言を受諾するという原則では一致したが、これに付すべき条件について紛糾し、陸海軍は連合国の回答次第として継戦意志を捨てることはなかった。十二日に連合国の回答が行われたが、その日の午後の閣議は条件の再照会について紛糾し、十三日の最高戦争指導会議構成員会議、午後の閣議においても意見の一致を見なかった。そして十四日の御前会議においてポツダム宣言の受諾が決定し、夜十一時に詔書が發布された註50。

(1) 敗戦における菅原の統率とけじめ

八月九日の御前会議の結果について、菅原は上京させていた参謀から十二日に帰来報告として聞き、日記には「即時国体不変の一条件を以て降伏をご聖断あらせらたりと。嗚呼万事休す」と記している。そして「既に作戦に死を期し、又全面降伏に際しての覚悟も予めきめ居たるも、余り突然に過早なる此の決を見、正に戸惑ひの姿なり。徐ろに意を決せん」とす、特に軍司令官として完全に任務を終了してのこととすべし。恰も乃木將軍の明治大帝の御葬送の日なるが如く、今後に於ける感情の動きもあるべく、不取敢記す」とある註⁵¹。

菅原は、敗戦を意識したとき「恰も乃木將軍の明治大帝の御葬送の日」に対する心境になったと記している。この意識は、統率の根源が統帥大権にあることから、敗戦によって「国民として皇祖皇宗に對し十分の申し訳の立つ」戦いが出来なかったことへの自責の念からであろう。そこには「我等も継ぐ」とした特攻隊員を送り出した指揮官としてのけじめが感じられない。

それでも翌十三日に航空総軍から「和平流言に惑わず規定方針通り作戦続行」との電報を受けると、気を取り直し「若し国体変革已むなしとせば宜しく全国民

挙げて玉碎すべきなり、飽迄頑張るべきなり(中略)各方面の攻撃活発化、特に沖繩作戦の強化」を命じていた。和平交渉が続いていることを知らせる米軍のビラがB-29をもつて十三日から東京にばら撒いていたが、菅原は、十五日に参謀長から「昨日敵の投下したりという宣伝ビラ」を見せられ「万事休す」と日記に記している。そして参謀長から「本日一二〇〇天皇陛下のラジオ放送あり」との報告を受けて、内閣の更迭などの話がなかったことから、ラジオ放送が「無条件に近き降伏の放送なることを予想し得、誠に悲痛に堪えず」とも記している。そして一三〇〇に司令部の將校に訓示する処置を講じている註⁵²。

玉音放送は明瞭でなく、この時に米艦隊の北進などの情報もあつて対処に迷っていた様子が日記に記してあるが、「停戦命令なき限り対敵行動を止めず」と決心したとある。しかし、一三〇〇の訓示では、「承詔必謹、敗戦の責任を自覺しての謹慎、高等司令部職員としての事務処理の平静嚴肅」の三つを指示したとある。この訓示は「対敵行動を止めず」との決心と齟齬があるように思われるが、このことに關し、日記には「停戦命令ある迄は飽く迄対敵行為を為すべしとの命令を出したるが、扨て正午聖勅を拝した

るは全国民にして、特攻隊員も一人の漏れなきなり、斯くては停戦命令なしと雖も今更特攻を命ずるは、理に於て然りとするも情に於て然るや、との問題あり」と記している。菅原の考えは、命令がないことをもつて対敵行動をとることは「反抗の方便論」であつて、「正しく詔書を解し大御心を体せば、命令なくとも停戦の処置を独断なすべきが真の独断にあらざるか」というものであつた。そして一六〇〇に「邀撃の外は総て一時中止を命ず」ことになった註⁵³。

菅原は、もちろん軍の行動が大本營の発する大陸命に基づく航空総軍司令官の命令によるべきであつて、天皇の放送は国民として承諸必謹であつても軍行動の基準とならうことを承知していた。しかし、大元帥としての統帥者としての天皇の発動が同時になされたはずであり、放送に間違いない限り伝達の遅延によるだけで、「その趣旨を奉戴し緊急なる大綱即ち当然次に來るべき武装解除に對する正当な準備行動を処することはまさに容認せらるべきこと」との判断であつたと回想している註⁵⁴。この時点で武装解除まで意識したかどうかは疑問であるが、少なくとも十二日の幕僚報告の際のそれと同様の判断であろう。すなわち指揮統率が統帥大権に由来し、状況不明の場合

には上司の意図を体して行動する「独断」にあたるものと解したとみることができ。もちろんこの期に及んで特攻命令は任務としての意味をなさなければかりか、若者を無為に死に追いやることになるとの想いはあったであろう。しかし特攻作戦指揮官として部下に対する「けじめ」ということをどのように意識していたのだろうか。

菅原は、十五日の夕方に阿南の自決を聞き、日記には「『アアしてやられた』との念湧く。陸相よくやって下さったとの感激の念も湧く。然しまた、何も一少し戦後処理の緒を就けられざりしや」と記している。また、沖繩特攻作戦をとくに戦った海軍航空の宇垣纏第五航空艦隊司令長官の沖繩突入も聞いている。宇垣に関しては「又しても『シテヤラレタ』との感深し」註55といひながらも、「今更如何にも軍司令官としての処置上平静を失せりと云わざるべからず、全軍『と』号、然り決戦にて勇敢に戦ふなれば文句はなきも、かかる状態にての司令官の決行は、予は思い及ばざりし処なり、宇垣中將の力にて率ゐて行きたるならんか」と記している。菅原はこうした「けじめ」のあり方に関し、「予は只命を惜しめりと考えらるる事を苦痛とす。愈々最後迄

任務を完遂して悠々自決せば、それを以て御奉公尽くしたりと云い得んか」とし、さらに戦争犯罪人となることに關して「然して之が為に單に死を急ぐは、決して男子の取るべき態度にあらず。任務完遂こそ、平戦時を問はず吾人の金科玉条なれ」と記し、さらに自決の期として「九州を去る時」など五つ挙げていた註56。

(2) 敗戦における大西のけじめ

大西は敗戦が決定するまで軍令部次長として徹底抗戦を主張し続けている。八月十三日午後に陸軍省軍事課長、參謀本部第二課長、軍令部第一課長が申し合せて和平派の説得を試み、大西も海軍大佐であった高松宮に懇願するが、その際高松宮から「必勝の作戰計画を策定すべし」と言われ、「要するに軍は殿下の信任を失ひあり戦勝の確算なき限り陛下の御決意を翻す能わず」と伝えられた註57。それでも大西の徹底抗戦論は御前會議において和平が決するまで揺らぐことはなかった。海軍次官であった多田武雄は、戦局がもはや絶望的であったにもかかわらず、「大西はなんとしてでも勝つんだ」と言い張り、海相の米内光政に終戦前日の十四日に最後の工作を試みた。「一時間の余に互って論争の末、大西はつい

に米内の和平論に屈し、わかりました、抗戦を断念いたしますと、頭を下げた」と回想している註58。

大西が徹底抗戦を主張した作戰上の根拠については「戰略上の機密だから言えぬ」と誰にも語らなかつたという註59。特攻隊員を鼓舞した「長期持久戦ニ依ル思想戦」や精神論を説いた訳ではないと思われるが、これほど主張した大西の心境は定かではない。それでもポツダム宣言の受諾が決したとき、元部下であつた福元に送つた私信の一説にはある「小生の信じて行わんとする所は、御聖旨に合致しありとの信念」に従つて、潔く敗戦を受け入れようとしたのであろう。

それでは大西にとつて敗戦はどのような意味をもつていたのであろうか。大西の心境を大西の死生觀から見てみたい。

人間はどんな危険に遭遇しても、その人がこの世に存在する必要がある間は決して死ぬことはない。必要のある人は神が殺さないのだ。だから、自分の要不要は危険にその身をさらしてみれば、いちばんよくわかる。存在価値がなくなれば、生きようとかがいたとて必ず死ぬのだ。だから、おれはやネー、死ぬとか生きるとか少しも気にしない。

これが大西の終生変わることはない死生観であつたという註60。伝記『大西瀧治郎』では「もって生まれた度胸のよさに加えて、飛行機乗りとして幾度か生死紙一枚の危機に身をさらし、一層大悟したのでもあろう」と評している*61。大西はまた、「死も生も考えないことにしている。それはまた、いつでも死ねる覚悟でもある」といつていた。大西は、徹底抗戦が受け入れられなかった時、天皇の意思に従つて敗戦を受け入れた。それは同時に「存在価値がなくなれば、生きようともがいたとて必ず死ぬのだ」という大西の死生観に通じるものあつたのである。

大西は「特攻の英霊に曰す」で始まる遺書を残している。そこには「最後の勝利を信じつつ肉弾として散花せり、然れども其の信念は遂に達成し得ざるに到れり、吾死を以て旧部下と其の遺族に謝せんとす」とある註62。「其の信念」とは大西自身の信念であり、特攻隊員との約束であつたのではないだろうか。それゆえに率先垂範は叶わなかったものの、遅まきながら特攻隊員と運命をともにする心境だつたのではなかったのか。なお、伝記には、大西が「諸君だけ殺しはせぬおれも必ず後からゆく。唯、おれは指揮官だから最後でなければ死なない」といっ

て「青年達に大きな期待を投げかけ、そして青年達と共に死を誓つた」とあるが註63、こうした言葉は猪口の講話には見当たらない。

おわりに

敗戦における指揮官としての身の処し方は、菅原が指揮下部隊の戦後処理を進めることに重きを置き、大西は「すがすがし 暴風のあとに 月清し」の想いで自決した註64。確かに菅原にとつて軍司令官として未曾有の敗戦処理を如何に円滑に行うかが重大な責務であつたことは違いないであろう。しかし、こうした行動の違いが生じた背景は、二人の特攻作戦に対する認識とそれによつて生じる統率の違いにあつたといえる。

特攻作戦が問題とされるのは、菅原のいったように組織的に実施されたことであり、しかも最初の神風特別攻撃隊のように作戦目的を「敵空母の発着艦機能の一時的麻痺」としたのではなく、「体当たり攻撃」自体にその重点を置いたことであろう。まさに大西のいう「統率の外道」であつた。しかも菅原も大西も航空戦力発揮の基盤が飛行機と搭乗員であつて、これらを失うことを前提とした作戦や戦法は、航空戦力の崩壊を意味し、いわば「戦術の外道」と認識していたことは想像に難くない。特攻作戦の指揮は、

まさに二人にとつて自身の航空に対する信念に反するものであつたといえる。

こうしたなかで菅原の統率は、あくまでの特攻作戦を命じられた軍司令官として、自身の統率のあり方に従つて忠実に遂行することに努めたといえる。菅原日記によれば、菅原が司令官特攻機の準備を秘命したのは七月末のことであり、その実施は八月二十五日であつた註65。敗戦が九月以降となれば訓示の一問題に従つて、おそらく軍司令官特攻を行つていたであろう。敗戦にあたつて、菅原は「国民として皇祖玄宗に対し十分の申し訳の立つ」戦いができなかったと述べたように、まさに指揮官としての責務に忠実であつたといえる。防大生が菅原に共感したのも、敗戦処理を担おうとした指揮官の姿に対してであつたろう。とはいえ命令に殉じた特攻隊員に対するけじめという点において、菅原は大西のように部下とともにあるという意識があつたかどうか、両立し得ない命題ではあるが統率として疑問が残るところである。

一方、大西は特攻作戦が「統率の外道」であることを認識しつつも、あくまでも自身の発意によつて始めた作戦という意識があり、その遂行と成否に責任を感じていたのではないだろうか。軍令部次長のときに特攻作戦の成果が低下してきた

ことに關して、技術部に対して調査を命じ、突入角度によるとの報告を受けて安心していた。特攻作戦に対する意識に加えて、航空指揮官として佐官のころからもっていた「おれもゆく、わかとんばら」という部下とともに作戦遂行を担おうとした率先垂範の統率、そしてその死生観からすれば、大西の自決は当然の帰結であった。すなわち菅原と大西の統率の最大の違いは「部下とともに」という部下をかいばい共感する心にあつたといえる。

最後に、本稿は『軍事史学』第五七巻第一号(2021年6月)に掲載された論文を加筆・修正したものである。

註1 河邊虎四郎「最高統帥部の航空特攻の取扱に関する陳述書」(防衛研究所所蔵)。
註2 深堀道義『特攻の真実』(原書房、2001年)。
註3 偕行社『統帥綱領・統帥参考』(産業図書株式会社、1962年)542頁及び605頁、戦史叢書102巻『陸海軍年表』372頁。なお、原文

の引用に際しては、読み易さを考慮して片仮名を平仮名に改めた。以下同じ。
註4 「統率学講義 上巻」昭和12年4月、海軍大学校教官大西大佐(防衛研究所所蔵)。

註5 大西大佐「統率学講義 上巻」(海軍大学校、防衛研究所所蔵)。

註6 陸軍大臣訓示とは、陸軍がポツダム宣言の受諾も連合国の回答次第として「継戦意志を捨てず、士気の低下を恐れ、聖戦完遂を高唱」したものを指しと思われる。(『戦史叢書 陸軍航空の軍備と(運用)大東亜戦争終戦まで』九四巻、朝雲新聞社、年)。

註7 「第6航空軍司令官菅原道大中将訓話」(「現示具現の為現況に即応して

部隊長は如何に処すべきか」)(「防衛研究所所蔵」)。

註8 「第6航空軍司令官菅原道大中将訓話」

註9 「特攻作戦の指揮に任じたる軍司令官としての回想」(防衛研究所所蔵)。

註10 「第6航空軍司令官菅原道大中将訓話」。

註11 「特攻作戦の指揮に任じたる軍司令官としての回想」。

註12 故大西瀧治郎海軍中将伝刊行会『大西瀧治郎』(故大西瀧治郎海軍中将伝刊行会、1957年)41、49頁。

註13 『大西瀧治郎』121、122頁。

註14 『大西瀧治郎』55頁。

註15 『大西瀧治郎』56、59頁。

註16 猪口力平、中島正『神風特別攻撃隊の記録』(雪華社、1963年)94頁。

註17 『大西瀧治郎』59頁。

註18 拙稿「南方戦線における航空作戦指導・マレー進攻航空作戦にみる陸軍航空の空軍への脱皮」(「防衛研究所『平成14年度戦争史研究国際フォーラム報告書』平成十五年三月)参照。

註19 「航空ヲ率テ感アリ」(「菅原道大中将の陸軍航空に関する所見集」、防衛研究所所蔵)。

註20 拙稿「南方戦線における航空作戦指導・マレー進攻航空作戦にみる陸軍航空の空軍への脱皮」(「防衛研究所『平成14年度戦争史研究国際フォーラム報告書』平成十五年三月)、187頁及び「航空を率いて感あり」。

註21 「航空を率いて感あり」。

註22 『大西瀧治郎』4頁。

註23 海軍航空本部「昭和十二年七月航空軍備に関する研究」(防衛研究所所蔵)。

註24 「支那事変に於ける我海軍航空部隊の活躍に就て」(防衛研究所所蔵)。
註25 「菅原將軍の日記22」(偕行社)7年10月号、18頁。

註26 「第六航空軍司令官天号作戰に関する回答」(防衛研究所所蔵)。

註27 「特攻作戰の指揮に任じたる軍司令官としての回想」。

註28 「菅原將軍の日記23」『偕行社』7年11月号19頁及び「第六航空軍司令官天号作戰に関する回答」。

註29 「第六航空軍司令官天号作戰に関する回答」。

註30 「第六航空軍司令官天号作戰に関する回答」。

註31 「特攻作戰の指揮に任じたる軍司令官としての回想」。

註32 「第六航空軍司令官天号作戰に関する回答」。

註33 「菅原將軍の日記23」20頁。

註34 「第六航空軍司令官天号作戰に関する回答」。

註35 「特攻作戰の指揮に任じたる軍司令官としての回想」。

註36 「菅原將軍の日記26」『偕行社』8年2月号16頁。

註37 「第六航空軍司令官天号作戰に関する回答」。

註38 「第六航空軍司令官天号作戰に関する回答」。

註39 「菅原將軍の日記26」16頁及び「菅原將軍の日記27」『偕行社』8年3月号23頁。

註40 太田特務少尉考案の体当り機(マル大兵機)を使用する第721航空隊が9月末に編成されている(『日本海軍航空史用兵編』487頁)。

註41 『日本海軍航空史 用兵篇』487頁。492頁。なお、第一、第二両航空艦隊の攻撃法が一致したことによって、その機能を十分に發揮するため「連合基地航空部隊」編成している。

註42 『大西瀧治郎』68頁。69頁。

註43 猪口力平「昭二〇・四 神風特別攻撃隊に関する講話」(防衛研究所所蔵)。

註44 航空特攻は十九年六月に館山航空隊司令の岡村元春の具申が行われるが、同じ頃特殊潜航艇訓練員の黒木博司などが主唱して人間魚雷を上申している。

『大西瀧治郎』83頁。84頁。

註45 「神風特別攻撃隊に関する講話」。

註46 「神風特別攻撃隊に関する講話」。

註47 『大西瀧治郎』91頁。

註48 『大西瀧治郎』92頁。99頁。

註49 『大西瀧治郎』93頁。

註50 防衛研修所戦史室『大本営海軍部・聯合艦隊(7)戦争最終期』戦史叢書93巻(朝雲新聞社1976年)468頁。475頁及び『大本営陸軍部(10)昭和二十年八月まで』82巻(朝雲新聞社、1975年)474頁。501頁。

註51 「菅原將軍の日記27」23頁。

註52 「菅原將軍の日記27」24頁。25頁。日記には「日本の皆様」と題したビラが貼つてある。

註53 「菅原將軍の日記27」25頁。

註54 「特攻作戰の指揮に任じたる軍司令官としての回想」。

註55 「菅原將軍の日記28」『偕行社』8年4月号11頁。

註56 「菅原將軍の日記27」25頁。

註57 『大本営海軍部・聯合艦隊(7)戦争最終期』474頁。

註58 『大西瀧治郎』144頁。

註59 『大西瀧治郎』141頁。

註60 『大西瀧治郎』196頁。197頁。

註61 『大西瀧治郎』197頁。

註62 『大西瀧治郎』104頁。

註63 『大西瀧治郎』103頁。

註64 『大西瀧治郎』145頁。本書では、この句は十四日夜に夫人に遺した辞世の一句とされている。

註65 「菅原將軍の日記27」『偕行社』8年3月号23頁。

第73回特攻平和観音年次法要

日 時 令和 6 年 9 月 22 日 (日)

秋分の日 14 時 ~ 15 時 15 分

場 所 世田谷山観音寺・特攻観音堂

参列者 1 5 4 名

一 概 要

昨年の年次法要は、新型コロナウイルスの行動制限撤廃に伴い、例年通りの直会を行うよう計画しましたが、感染状況が変動していたため、直会を行わない開催とされました。そのため、今年こそは例年どおりと計画されましたが、いまだ終息と言えない状況だったため、昨年と同様、式典だけ実施し直会は見送られました。

式の開始に先立ち、305名10団体の方から寄せられたお布施を、岩崎理事長から太田恵淳住職にお渡ししました。

(1) 式次第

- | | | | |
|---|------------------|--------|----------------|
| 1 | 梵鐘点打 | | |
| 2 | 国歌吹奏 | トランペット | 堀田 和夫
町 ともみ |
| 3 | 願文・宮司神儀 (神仏習合) | | |
| | 願 文 | | |
| | 世田谷山観音寺 住職 太田 恵淳 | | |
| | 宮司神儀 | | |



入堂する太田住職と澤田宮司

- | | | |
|---|--------------|------------------------|
| 4 | 駒繫神社 祭文奏上 | 宮司 澤田 浩治 |
| 5 | 特攻隊戦没者慰霊顕彰会 | |
| 6 | 世田谷区長挨拶 | 理事長 岩崎 茂
保坂 展人 |
| 7 | 献 吟 | 吟 詠 竹内 一香
龍 笛 安藤 韻盟 |
| | 一誠流 | |
| | 奉納献奏及び慰霊献歌 | |
| | 甲飛喇叭隊 隊長 | 原 知崇 |
| | 「同期の桜」「海ゆかば」 | 全員合唱 |
| | トランペット | 堀田 和夫
町 ともみ |

- | | |
|----|------|
| 8 | 玉串奉奠 |
| 9 | 焼 香 |
| 10 | 池前祭 |

(2) 祭文

住職読経
宮司祭祀奏上

謹んで在天の御英霊に申し上げます。
今年は、レイテ海戦に於いて初めて特攻作戦が成功し80年の節目の年です。今年も、ここ世田谷山観音寺の特攻観音堂前で、この様にご遺族、御来賓をはじめ多くの方々がご集まりになり、第73回特攻平和観音年次法要が斎行出来ますことに感謝申し上げます。

御英霊の皆様が大東亜戦争に於いて、身命を賭して戦ってくださったお陰で、我が国は、その後繁栄し安寧の79年を過ごすことが出来ております。また、世界の130有余の国々が欧米の束縛から解き放され独立国家として繁栄してきており、我が国の国民は勿論のこと、多くの国々の方々が、皆様方に感謝の誠をささげております。

しかしながら、世界の多くの方々の願いとは異なり、世界は不安定化しつつあります。我が国周辺では北朝鮮が核開発に余念なく、度々に亘る弾道弾発射を行っており、中国は覇権主義的行動を一層進めております。欧州においては、

ロシアによるウクライナ侵攻が止む気配もなく、中東に於いてはハマスによるイスラエル攻撃に端を発した紛争が続けられています。

このような安全保障環境の変化に対応し、我が国の独立と安全を保つため、防衛関係の法体系を見直し、国家安全保障戦略を改訂し、抑止力を高めるため、防衛費を増額するとともに国家としての総合力の向上を目指すとしています。その際、最も大切なことは、「自分の国は自分たちで守る」との意識・覚悟です。皆様方は、80年前にこのことを身をもって果たされました。「国を守る気概と利他の精神」を教えてくださいました。

私達は、今ここに、御英霊が示されたこの様な精神と御遺志を忘れず、後世に語り継ぎ、我が国の伝統と文化の継承に努め、我が国の発展に寄与する様、尽力することをお誓いします。

在天の御英霊の皆様方、安らかに鎮まります様お願い申し上げます。

令和6年9月22日

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 岩崎 茂

(3) 世田谷区長ご挨拶

世田谷区長の保坂展人です。

「第七十三回特攻平和観音年次法要」

にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

昭和二十六年に睦賢和尚（ぼっけんおしょう）が、独力で建立（こんりゅう）された世田谷山観音寺に、若くして犠牲となった命と平和の尊さを祈る日が、今年も廻ってまいりました。

今年の夏は、猛烈な暑さや台風など、自然災害の脅威を感じる日々が続きました。この八月にかつての戦争を振り返るテレビ番組で戦場での経験を語る人々は、いずれも九十代後半から百歳を超えた高齢となりました。また多感な少年少女だった頃に、空襲の焼夷弾や機銃掃射で逃げまどい、あるいは疎開の経験がある方も八十代後半から九十代半ばとなりました。

人形七体が疎開先の中川村に寄贈されました。

娯楽の限られていた信州の山間（やまあい）の村で、住民に親しまれてきた人形浄瑠璃でしたが、テレビが入ってきた昭和三十七年頃に途絶えて、長らく歴史民俗資料館に保存されてきました。今から十二年前、「人形浄瑠璃を五十年ぶりに復活させよう」という気運が高まり、当時の曾我逸郎（そがい いるう）中川村村長をはじめ関係者が世田谷区役所を訪ねてくれました。

今年六月二十五日に、世田谷区立二子玉川小学校の小学生たちを前に、長野県中川村に伝わる人形浄瑠璃の「里帰り公演」がありました。戦争が激しくなった昭和二十年五月、当時の二子玉川国民学校の児童と、その付添い者八十一名が、中川村に疎開をしています。戦争が終わり子どもたちも十一月に帰りましたが、「疎開中にお世話になった」という御礼の気持ちとして、当時の保護者の方から

中川村の曾我村長は、「世田谷からの人形とだけ伝えられているのですが、いったい誰だったかを知りたいのですが」と質問され、私は咄嗟に故鈴木昌二（すずき しょうじ）元区議会議員に電話をかけました。彼は、二子玉川郷土史会会長で地元（じもと）の二子玉川小学校出身で、贈呈者を即座に調べてくれました。これを機会にして、二子玉川と中川村の交流が始まり、今年の六月は「里帰り公演」となりました。

この交流を通して、中川村に記念碑が建てられ、また、事の経過をまとめる記

念冊子も発行されています。今回の交流も疎開の経験のある高齢者となった卒業生と今の小学生たちが同じ場で公演を観ることができました。歴史を刻み、次世代に「疎開」と「戦争」を伝えるいい機会となりました。

この夏に私は、『爆弾になったひいじいちゃん』という絵本を手にしました。

「おばあちゃん、ぼくのひいじいちゃんて、どんな人？ 戦争にいったのよかごしまの ちらんって 場所から 特攻機にのって」の書き出しから始まるこの絵本には、戦争を知らない子どもたちへ いまの時代だからこそ、伝えたい思いが記されています。

「特攻隊は 十七歳から三十二歳九百四十八人がなくなつたわ 十七歳って高校二年生ぐらいよ えっ？ 何のために命をかけたの？ 人によって違うけど自分の大切な人や日本を守ろうと考えた人が多かったのよ」

そして絵本では、特攻隊員となった若者の残した言葉を紹介していきます。絵本の制作は、のぶみさん（斎藤信実）の

作によるもので、ホテル富屋食堂（ほたるかん）とみやしよくどう）の鳥濱拳太（とりはまけんた）さんが取材に協力されています。すでに、戦争を知らない世代が多数となる社会の中で、幼い子どもたちに歴史を語り継いでいくことの大切さを思います。

私もまた、戦後世代です。ただし、親や祖父母から戦争体験を聞き、特攻隊員の一人として生き延びた方の経験談を少なからぬ時間、聞き続けてきた世代です。すでに、私に昨日のここのように、当時の苛酷（かこく）な状況を語り聞かせてくれた先輩の多くが、旅立っています。こうして、世田谷観音に集い、慰霊のため静かに手を合わせる機会は、貴重なひとときだと感じます。私たちが、さらに若い世代にきちんと事実を伝えていくことが、平和な時代を長く享受している私たちの責務でもあります。

世田谷区でも、昭和六十年に平和都市宣言を行い、平成二十七年には戦後七十年を記念して、平和資料館を開館して戦争の悲惨さと戦時下の暮らし、平和の大切さを伝える努力を続けております。また、今日の世界情勢に照らして、戦後八

十年を迎えようとしている来年に向け、たゆまぬ努力を怠らない必要があります。

結びに、戦争の犠牲となられた方々への哀悼と、その後のわが国の復興を成し遂げた多くの先人達への感謝、そして永遠の平和を希求していく決意をお誓いして私の挨拶といたします。

令和六年九月二十二日

世田谷区長 保坂 展人



御挨拶をされる保坂世田谷区長

公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会 理事長 岩崎 茂 殿

第七十三回特攻平和観音年次法要の御施行に当り、
 遙かに大前を拝み奉ると共に
 謹んで御遺族関係者各位の御慰勝を御祈り申し上げます。

靖国神社 宮司 大塚 清夫

E60200762

宛先〒102-0074 東京千代田区飯田橋1-5-7 東京堂ビル2F

102-0074

東京都千代田区飯田橋1-5-7 東京堂ビル2F

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 岩崎 茂 様

〒102-0074
東京千代田区飯田橋1-5-7
九段会館テラス4階

一紙財団法人 日本遺族会

TEL (03) 3261-5521

日 月 年 午前 午後 なし

翌日以降の配達に御注意をされたい場合
の必要時刻関係事項が可成りです。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥

一紙財団法人 日本遺族会
会長 水落 敏 栄

第七十三回特攻平和観音年次法要のご奉行にあたり、
 平和の礎となられました尊い御霊に対し、
 我々が国の今日の平和と繁栄をもたらしたものは何で
 あつたのか、いま改めて思う時、世界に目を向けられ
 未だに紛争が絶えず、罪のない大切な命が失われ続
 けています。ご英霊の御魂は二度と私達と同じよう
 な遭難を免れず、時々の変化の中で苦しみや悲しみ
 も難を免れ、超えてゆかないという強い決意を持たせ、私
 ども戦没者の遺児の一人として、新に感じています。
 平和の尊さ、命の大切さを後世に語り継いでいかな
 ければなりません。命の大切さを後世に語り継いでい
 ければなりません。命の大切さを後世に語り継いでい
 水皆方には「平和を語り継ぐ者」として、今後とも永
 念結ぶに、ご参集の皆様方のご健康、ご多幸を心より祈

この度、第 7 3 回特攻平和観音
年次法要の開催にあたり、皆様方
のご尽力に敬意を表します。

国家に殉じた英霊が安らかに眠られ
ますことを、お祈り申し上げます。

小職も常に戦没者に想いを馳せ、
日々の公務に当たって参ります。

合掌



“ヒゲの隊長” こと
参議院議員

佐藤 まさひさ

岩手護國神社での「特攻勇士之像」建立報告

理事長 岩崎 茂

岩手護國神社の宮司への最初のご説明から約6年の時間が経過してしまいました。漸く「特攻勇士之像」が建立されました。岩手護國神社は盛岡八幡宮に隣接しており、通常、宮司は両神社を兼務されているとのこと。COVID-19の蔓延等があり、なかなか建立が捗らなかったものの、コロナ明けの令和五年初め以降、神社や奉賛会のご理解・ご協力の下、令和六年十月二十日、奉納式が厳粛に執り行われました。ここに皆様方にご報告申し上げます。

奉納式には、地元出身の元防衛庁長官の玉澤徳一郎様、地元の英霊にこたえる会、隊友会、郷友会、偕行会、自衛隊家族会、岩手駐屯地有志の方々、そして岩手県地本部長等々、多くのご参列を頂き、護国神社境内及び特攻勇士之像前で奉納に係る式典が執り行われました。

式典の最後に私が、神社及び神社奉賛会の皆様方に感謝を申し上げると共に、特攻隊戦没者慰霊顕彰会が「特攻勇士之像」を各地の護国神社に奉納する様になった経緯等をご説明申し上げるとともに、

今後の慰霊祭の斎行をお願い申し上げます。

今回の「特攻勇士之像」は、護国神社境内の既に建立されていた二つの郷土部隊の慰霊碑の中間に建てられました。一つは、「歩兵三十一連隊戦没将兵一同の霊」であり、もう一つは、「ビアク支隊戦没者顕彰碑」です。場所的には大変いい場所を選んで頂いたと感じています。

なお、護国神社の境内には「岩手県戦没者遺品館」がありますが、今回ご努力を頂いた会の方々は、特攻に関してよりわかり易くするため、また後世に語り継ぐため、「特攻に関するゾーン（仮称）」を館内に設けたいとの御意向をお持ちのこと。特攻像の土台の各面にはいろいろな説明が記載されているものの、特攻そのものが、「どうして行われたのか?」、「どのような成果があったのか?」等々はわかり難く、特攻に関する何らかの説明の看板や遺品等を展示したいとの御意向でした。今後は、この様なことも含め活動していきたいとの事でした。大変素晴らしいお考えであり、全国にもこの様な考え方を展開すべきと感じました。

今回の岩手護國神社への奉納で、約半分近くの護国神社への奉納が終了したものの、まだまだ道半ばです。今後も、特

攻隊戦没者慰霊顕彰会として、まだ未奉納の護国神社へご説明し、この事業を鋭意進めていく所存です。つきましては会員の方々、若しくは、機関紙「特攻」を愛読されておられる方々の益々のご理解、ご協力としてご支援をお願い申し上げます。



岩手県特攻勇士之像



二つの郷土部隊の慰霊碑の中間に建つ特攻像



歩兵三十一連隊戦没将兵一同之霊



ビアク支隊戦没者顕彰碑

特攻像の副碑



三重縣護國神社の「あゝ特攻」勇士之像慰霊祭に参列して

事務局長 石井光政

令和6年8月9日（金）、万灯みたま祭の準備が整い、多くの提灯が飾られている、三重縣護國神社境内の「あゝ特攻」勇士之像前で、英霊にこたえる会三重県本部（中森博文 会長）主催で、三重県出身特攻隊員139柱（陸軍33柱、海軍106柱）の慰霊祭が斎行されました。当日は、37度の猛暑に加え、前日（8月8日）の宮崎県沖の地震で、巨大地震注意報が発令中でしたが、約40名の方が参列され、14時半に開始、修祓から、祝詞奏上、玉串奉奠、と神事は厳かかつ済々と斎行され、神事終了後、中森会長が挨拶をされ、慰霊祭は終了しました。

慰霊祭後は参集殿で、参議院議員の佐藤正久氏による日本の安全保障に関連した講話が行われ、英霊が守ったこの日本を今後どのようにしなければならぬかを、熱く語られました。

参列した皆様の、暑さも吹き飛ばす、特攻隊で亡くなられた方々と日本への熱い想いがひしひしと感じられた一日でした。

三重縣護國神社と、英霊にこたえる会三重県本部と、三重県隊友会の皆様方に感謝申し上げます。

「万灯みたま祭」の会場



特攻像前に於ける神事



第26回十三塚原特別攻撃隊慰霊祭に参列して

編集長 金子 敬志

1 令和6年8月15日(木)に催行された第26回十三塚原特別攻撃隊慰霊祭に顕彰会を代表して参列しましたので報告します。

一 慰霊祭の状況

1 日時

令和6年8月15日(木) 11時～12時

2 場所

十三塚原特別攻撃隊感謝慰霊の碑前
(鹿児島空港前チエコ村内)

3 式次第

国歌斉唱

神事

拝礼

修祓の儀

降神並びに献饌の儀

祝詞奏上

玉串拝礼

撤饌並びに昇神の儀

鎮魂の鐘及び黙祷

献歌

戦友(とも)よ安らかに

遺書奉読

第3草薙隊 井上 信高二飛曹

大阪府 甲飛十三期



神事の様子

昭和20年4月28日第二国分基地出撃
沖縄で散華

奉納演武

薩摩の秘剣 野太刀示現流

献花

主催者挨拶

河内源一郎商店グループ代表

山元 正博氏

来賓挨拶

國分駐屯地司令代理他3名

遺族代表挨拶

中島 富士子氏



挨拶をされる山本正博氏

二 所見

今年は酷暑が続き、当日も同様でした。強い陽ざしがありましたが、参列者席にはテントが設置され陽ざしを遮ってくれ助かりました。司会者によると参列者は昨年より多くなったとの事でした。主催者の山元正博氏は、ご自分で正式な神事を執り行えるように、現在、京都において神官の資格を得るべく修行中との事で、慰霊に対する真摯な思いを感じました。又、地元の参列者が多い事から本慰霊祭は今後とも継続されるものと思えます。

第六十一楠公回天祭

評議員 宮本 雅史

岐阜県下呂市の飛騨信貴山山王坊境内の回天楠公社で九月八日、「第六十一楠公回天祭」が開かれた。

祭神は楠木正成を主祭神に、大東亜戦争末期、人間魚雷「回天」を考案した黒木博司大尉（当時二十二歳、没後少佐）と回天で出撃、散華した百六人の搭乗員、それに回天の整備員三十六人他の計百四十五人を慰霊、顕彰している。

慰霊祭には山内登・下呂市長や中島達也・下呂市議会議長、今井政嘉・岐阜県議ら六十三人が参列、せみ時雨のなか、修祓、祭詞奉上、玉串奉奠などが続き、最後に全国から寄せられた献詠が奉納された。

回天楠公社は、昭和三十九年一月、黒木少佐と交流の深かった皇国史観の主唱者である平泉澄氏が、自ら建設地を交渉するなどして創建し、黒木少佐と回天搭乗員を合祀。慰霊祭は昭和三十九年から毎年九月、開かれている。澄氏から始まった回天楠公祭は、これまで澄氏の長男、洸氏、孫の隆房氏と祭主が引き継がれてきたが、隆房氏が今年八月、急逝したため隆房氏の長男、澄氏のひ孫にあたる紀

房氏が祭主を務めた。

あいさつに立った紀房氏は「父、隆房が八月逝去しましたので私が祭主を務めました。平泉家にとって、楠公祭は重要なお祭りで、将来、人が集まることがないということになったとしても、平泉家の人間は一人でも楠公祭に行けと言いつづけています。死ぬまでお参りします」と力強く語った。

今年は、昭和十九年十一月、最初の回天特別攻撃隊「菊水隊」が山口県・大津島を出撃、ウルシー泊地やコッソル水道を攻撃して八十年になる。また、この年の十月には、回天作戦に先立ち、「神風特別攻撃隊」が編成され、フィリピン・マバラカット基地を出撃。これ以降、終戦まで陸・海軍にいくつもの特攻隊が編成され特攻攻撃を繰り返した。

各地で慰霊祭や追悼式典が行われているが、関係者の高齢化などで参列者も少なくなりつつあるなか、この日の慰霊祭には、沖縄県で遺骨収容を続けている沖縄県護国神社の関口幹久権禰宜が昨年に続き参列、関口氏と一緒に遺骨収容を行っている二十代の男女も参列した。関口氏は、「映画などで特攻隊が取り上げられると、遺骨収容や英霊への慰霊に関心を持つ若者が増えてくるようだ。これから

も慰霊祭への参加を広く呼び掛けていく」と話した。

慰霊祭の後、場所を近くの下呂交流会館マルチスタジオに移し、神社本庁の駒井一氏による「楠公と黒木少佐」と題した講演会が行われた。

来年は九月七日に行われる予定。



旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式に参加して

評議員 中村 敏弘

令和6年9月22日(日)、旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式が鹿屋市串良町平和記念公園内に所在する串良平和アリーナで厳粛に執り行われました。今回、この追悼式に参列する機会を得ましたので報告します。

日本海軍串良航空基地は、大東亜戦争の末期に教育航空隊として開隊され、約5千人の飛行予科練習生が、航空機の整備、搭乗、通信等の訓練を当初は行っていました。昭和19年4月に実戦部隊に編入されました。昭和20年3月1日からは、特別攻撃隊の基地となり、終戦までの半年間に、特攻隊員(363名)及び一般攻撃隊(210名)が出撃して散華されました。

1 追悼式の概要

追悼式当日は、残念ながら早朝から雨が予報されていたため、平和記念公園催物広場から隣接する串良平和アリーナへと場所が変更、屋内で実施されました。

海上自衛隊鹿屋航空基地に所在する航空機による追悼飛行は実施されなかったものの、追悼式の前後に行われた鹿屋航空基地所属隊員による戦没者に対する整

然とした黙祷は、追悼式をより荘厳で肅々とした雰囲気にしていました。



今年元特攻隊員で裏千家前家元の鵬雲斎千玄室大宗匠が出席された平和祈念献茶式(裏千家淡交会鹿児島支部主催)も兼ねていたことから、式辞等の前に大宗匠による「献茶の儀」が実施されまし

た。凜とした空気感の中での鵬雲斎千玄室大宗匠による献茶の儀は101歳とは思えないお点前であり、そのお気持ちがいかに英霊に伝わったと列席した誰もが感じたに違いない儀式でした。なお、この時に使用された茶碗は、大宗匠(第14期海軍飛行専修予備学生)と同期であり、特攻で散華された森丘哲四郎少尉が愛用された茶碗でありました(通常は鹿屋航空基地史料館収蔵)。



その後、鹿屋市長の式辞、第1航空群司令による追悼のことば、遺族代表（相田博司氏）の慰霊のことば（遺族代表の方のご了承を得て、最後に掲載）、代表献花、遺書朗読、同期の桜斉唱、平和へのメッセージ朗読と続き、終了しました。

平和へのメッセージ朗読は、募集で選ばれた女子高校生による「言葉の重みを考える」と題したメッセージでした。戦時中、出征が決まった男性に赤紙が届いた際、家族から「おめでとうございます」という言葉を口にしたことに対する信じがたい光景と違和感、その上で現代に生きる自分たちはSNS等で容易に自分の意見や考えを主張できるが一方的にぶつけてはいけない、言葉の重みが大切であり、日頃から時々の状況に応じた言葉の使い方が出来ているかを振り返り、相手を思いやることのできる行動を心掛けたいと締めくくっていました。若い世代が考える平和な世の中にするための行動、決意に満ちた素晴らしい内容でした。

2 徳島白菊特攻隊慰霊碑建立除幕式

追悼式開催前に、平和記念公園慰霊塔前広場横において、「徳島白菊特攻隊慰霊碑建立除幕式」が実施され、特攻隊戦没者慰霊顕彰会の代表として参列して参りました。なお、鵬雲斎千玄室大宗匠も

同特攻隊の一員であつたことから、建立に尽力された相田博司氏が大宗匠へ相談され、慰霊碑の碑文に大宗匠の言葉も刻まれた慰霊碑となっています。

慰霊碑建立の目的は、徳島白菊特攻隊の英霊56名を鎮魂の思いをもって慰霊するとともに未来永久の平和を祈念するだけでなく、ひとつの記憶の伝承、という目的もあるとの説明を受けました。遺族の方々含め、こどもや孫が、いつか「ご先祖様に特攻隊員が居た」という事に思い至った時に、その歴史事実を確認できるものを残しておきたかったとのことであり、その思いを深く受け止め、顕彰会としても記憶の伝承が継続出来るように尽力しなければならなないと感じました。

なお、本当に不思議なことではあつたのですが、この除幕式の際に大宗匠がお着きになられたと同時に雨がやみ、厚い雨雲の一点に穴を開けたように晴れ間を覗き見ることができました。きつと上空で待機していた白菊隊



の英霊達は、大宗匠が開けたところから串良に帰還する事ができたのではないかとご遺族は思われたようです。



3 その他

これまで鹿屋市は、市内に多く残る戦跡の保存と維持、平和ガイドの育成、更には次の世代を担う子供達への平和教育

の推進等に取り組んできています。来年は戦後80年という大きな節目を迎えるにあたり、さらに戦争体験を語る映像の製作や創作造演劇の作成、特別企画展などを計画しており、特攻隊戦没者慰霊顕彰会としても協力できることがあれば積極的に支援していくことが大切であると感じました。

また、鹿屋市長の式辞でも言及されましたが、引き続き散華された隊員の慰霊に努め、恒久平和を祈念することが私たちの責務であることを確認するとともに、英霊に安心してもらえようなど日本を築き守り続けていくことの大切さを最認識した追悼式でもありました。

【慰霊のことば】遺族代表 相田博司氏

本日の平和祈念献茶式、ならびに旧海軍航空隊串良基地戦没者追悼式が挙行されるにあたり、遺族を代表しまして慰霊の言葉を申し上げます。毎年この地に立ちますと、英霊となられた皆様の息吹を感じます。79年前、この地に確かに皆様はおられました。そして、ここは皆様にとって、祖国最後の地となりました。

かつて、串良は特攻最前線基地として、各地から多くの若者たちが集められ、日をあけず南方の空に飛び立っていきまし。その時皆様は、後ろに消えゆく桜島、

開聞岳を果たしてどのようなお気持ちで見えられたのでしょうか。そして、特攻隊員363名をはじめとして、573名の多くの若者が散華されました。特攻という余りにも峻烈な運命を前に、皆様はどのように向き合い、どのように自らを奮い立たせて、お覚悟を決められたのか。その想像をも超える壮絶な心情に思いを馳せますと、万感が胸を締め付けてまいります。皆様は、祖国の安寧と家族の無事を願い、日本の未来を後に託し、自らの命を捧げるお覚悟を決められました。その崇高な精神は、私などには到底至る事などできない、遥かなる高みに居られたのであります。皆様はその時、

まさに『神』へと昇華されていたのだと思います。私の叔父、荒木圭亮もそのなかの一人であります。音楽を愛し、朗らかな性格で、周りにいる人たちを自然と楽しませる青年でありました。圭亮の居るところ、いつも多くの友人が集まり、妹たちからは愛され、慕われ、自慢の兄でありました。そんな圭亮は、父親の跡を継ぐべく建築設計士を志して、勉学に励んでおりましたが、大東亜戦争という国難の時、大学で行われた海軍の徴兵勸奨に応じ、愛する家族の為に学業を捨て、自らの夢を諦め、厳しい訓練のな

かに身を投じたのであります。この訓練は、生きる為の訓練ではなく、死ぬ為の訓練でありました。そして、「家族の為に死ねる」と言い残し、この串良の地から最初で最後の出撃に、漆黒の夜空に飛び立ったのであります。圭亮はじめ皆様、自らの尊い命を賭して守ろうとされた日本は、復員された方々が粉骨砕身、祖国の再興に邁進され、見事、奇跡と言われた復興を果たすことができました。

そして我が国は、先の大戦以降およそ80年にもわたり、戦争のない平和な国として繁栄してまいりました。皆様が見事に守り抜いた美しい国、日本。今日の平和と繁栄は、皆様の尊い犠牲の礎のうえにある事を、いかに時が過ぎようとも、私たちは決して忘れません。戦争はその勝敗にかかわらず、全ての人々に数多くの悲劇、苦しく辛い物語を残します。

長男をサイパン、そして次男圭亮までも特攻で失い、母親は来る日も来る日も、庭の片隅にしゃがみこんで泣き続けていました。跡継ぎを失った父親も人生の希望を失い、絶望のなかで、「もはや何の意味がある」と言って、設計事務所を閉めて仕事を止めてしまいました。私は、祖父の笑顔を見た記憶がありません。無口で、喜怒哀楽もなく、ただ静

かに座っていた記憶しかありません。本当は饒舌でよく冗談を言う人だったと後に知りました。戦争は、二人の若き命を奪っただけでなく、両親の魂までも奪っていったのです。二度とこのような悲劇が繰り返されないよう、皆様が願った永遠なる平和を守り続け、皆様の遺徳を伝え続ける事を、遺族の使命として全ての英霊の御霊にお誓い申し上げます。

本日の追悼式にあわせて、叔父が所属しておりました徳島白菊特攻隊、若き英霊56名の慰霊碑を建立致しました。徳島白菊隊は、串良基地から出撃した最後の特攻隊でもあります。徳島白菊隊の皆様、今こそ、ここ串良にご帰還頂き、再び愛する祖国の大地を踏みしめてください。そして、この碑の周りに集い、苦難を共にした戦友同士、大いに飲み、失った青春、果たせなかった夢を大いに語り合ってください。圭亮叔父さん、私は叔父さんを誇りに思っています。叔父さんの甥である事を感謝しています。しかし、本音で申せば、叔父さんに会いたかったです。時には厳しく叱られたことでしょう。叔父さんはいつも私の心のなかに居ます。最後になりましたが、茶道裏千家淡交会の皆様、そして「献茶の儀」を執り行っ

てくださいました千玄室大宗匠に、深く御礼申し上げます。また昭和44年以来絶える事なく、この追悼式を開催して下さっている鹿屋市長はじめ鹿屋・串良の皆様、並びに、日夜、日本の安全と平和をお守り頂いている自衛隊員の皆様に心より御礼申し上げます。本日も参列の皆様の一層のご健勝とご多幸を祈念申し上げます。慰霊の言葉とさせていただきます。



白菊特攻隊慰霊碑建立に尽力された相田夫妻と筆者

茨城県特攻戦没者慰霊祭に参列して

評議員 原島淳子

令和6年10月13日(日)、茨城県護國神社「あゝ特攻勇士之像」前において斎行された令和6年度茨城県特攻戦没者慰霊祭に、当顕彰会を代表して参列させていただきました。

慰霊祭は、ご遺族・来賓・現役自衛官・議員等参列する中、式次第に沿い粛々と



茨城県護國神社

進められました。

君が代・海ゆかばの奉楽に続き、開式の辞・修祓・降神の儀・献饌・祝詞奏上と行われ、御年76歳の中村氏によるラッパ奉納(海軍喇叭譜 命を捨てて・陸軍喇叭譜 海ゆかば・前へ)の後玉串拝礼・撤饌と続き、昇神の儀で閉会となりました。

祭事後、主催者・招待者からの挨拶がありました。主催者である茨城県特攻戦没者慰霊顕彰奉賛会幡谷定俊会長のご挨拶は、「自分の命を自ら断った人の想いを忘れてはいけない。最初の特攻より80年経つが、1年経つごとに風化していく。尊い命を捨てて国を守ろうとした人達の想いを風化させてはいけない。毎年きちんと顕彰していきたい。」と言う心のこもったものでした。

昭和19年10月。特攻隊が飛び立つてから今年で80年の節目の年です。

国を家族を愛する人を守るため、海に陸に空にと征った方達がいた事を忘れてはならないと改めて思った一日でした。

茨城県護國神社は、偕楽園の近くにあります。偕楽園にいらした時には是非護國神社に参拝して下さい。そして慰霊碑

にも手をあわせていただければと思います。

最後にこの句を捧げます。

最後まで

笑って征くと言ひし人

彼らの想い 我ら忘れん



開式を待つ参列者

多田野語録
師資相承

会 員 多田野 弘

師資相承とは、師から弟子へと道を次代に伝えていくこと、広辞林にある。

分野を問わずあらゆる学問・道・文化・伝統は、子弟の相承によつて伝えられてきた。人類の歴史は子弟相承の歴史といつても過言はない。そうだとすれば、私の生涯の中で師と仰いだ次の3哲人から、大きな影響を受けたことを述べねばならない。ソクラテス・トルストイ・ドラッカーである。

第一はソクラテスである。なぜ、彼を師に選んだのか。平たくいえば、死に対する考え方が私と同じく潔いからだ。彼は西暦紀元前450年頃、「魂を養い、徳を高めよ」と、アテネ市中を説いて回っていた。若者たちは彼の言動に共鳴して各所にその集いが生まれ、見る見るうちに国中に拡がっていった。それを妬む宗教関係者らに、若者を惑わす悪人だと告訴され、裁判で死刑の判決を受けた。

彼を慕う弟子達はもとより、国中の若者の多くが彼の脱出を望んだ。獄舎の役人や幹部にも手をまわし、国外へ航海の船も確保できた旨を彼に告げた。しかし彼は、弟子たちの行為を謝したが、法律

に従うことが道であると、脱出の案を退けた後、毒を仰いで獄死した。このわが身の安全を捨てた、潔い行動が私と共通している。

ソクラテスの死に様は、かつて私が3年余の戦場で、国を想う悠久の大義に命を捧げようとしたことと少しも違わない。そのような崇高な意義を持つ死は、自分を最大限に活かす、生死一如の心境になつていた。以来、私の心は一点の曇りなく澄みわたり、不思議にも弾雨の中を平気で動き回れるようになった。おそらく彼も、私と同様に何の蟠りもない平静な気持ちで、毒を仰いだに違いない。彼を師と仰ぐもう一つの点は、アテネ市中を「魂を養い徳を高めよ」と説いていた頃、日本は縄文時代であつた。誰もが堅穴住居に住み、食べることに日々の殆どを費やしていた。「魂とか、徳」に言及している哲人は一人もいなかった。ギリシャの精神文化が世界の国々より先んじていたことである。

第二の師にトルストイを挙げたのは、彼の書「人生の道」が私に貴重な示唆を与えてくれたからだ。日米戦争が敗色に転じた昭和19年1月、私はニューギニアのラバウル基地にいた。彼我の生産力の差が戦力の差に表れ、日増しに大きく

なつていった。死が遠いことではないのを、一兵卒の私にも感じられた。

連日の戦闘で疲れて眠っていた深夜、「びくびくせずに、潔く死ぬ」という声が心の奥から聞こえてきた。かねてから、一命を捨てるのが、同時に自分を最大限に活かす道だと思つていたので、躊躇なく死を受け容れることができた。しかしこれは、心で決めたのではなく、魂の仕業に違いないと直観した。以来、私には魂があるではなく、私自身が魂の存在であると信じるようになった。同時にそれは、私の価値観を一変させ、戦後の生涯を素晴らしいものに導いてくれたのである。

この生死一如の心境を、さらに確実なものにしてくれたのがトルストイである。彼の書「人生の道」に、「魂とは、肉体に宿り、心と身体を統御・支配する」とあつた。大いに意を強くした私は、魂の従者として生きようと決心することができた。価値観の変化は、運命についての考えも変えた。

運命は、その受け取り方処し方によつて、どのようにでも変えられるもの、自分がつくっていくものだと思ふようになった。私の生涯に与えられた運命は数奇を極めたが、その都度、プラスにつく

り変えていった。身の回りに起きるすべての出来事には意味がある。自分に必要だから与えられたのだと受け取るようになり、いかなる非条理な運命もプラスに変えていった。ソクラテス・トルストイの両先哲を、師と仰ぐことになった所以である。

第三は、P・F・ドラッカーの経営哲学である。その本質は、「企業経営の目的は、社会に貢献する」にある。それが企業の存在理由となり、繁栄が約束されるのである。もし、利益の追求を目的とするならば、その企業に関わる顧客、従業員、取引先のすべては、利益追求の手段にされてしまう。そのような企業に繁栄はあり得ない。つまり、利益は企業の社会的貢献度に比例して与えられる、経営の結果なのである。

私は彼の説くこの経営哲学に、目から鱗の落ちる思いがした。恥ずかしながら、それまで、経営の目的など考えたこともなかった。しかし、この考えで経営するならば、もし企業を潰すことになっても悔いはないとさえ思った。大いなる自信を得た私は、次々と社内の改革に取り組んだ。

改革の第一は、出勤簿・タイムレコーダの廃止である。廃止後驚くことに、そ

れまで続いていた2%程の遅刻が皆無となったのである。人間は管理したり、また管理されてはならない存在であることを知った。続いて、工場従業員の日給制を月給制にした。大阪の松下電器「現、パナソニック」に次いでいた。続いて全員に、いままで週6日間作業しているが、それを5日間に縮められるなら、週休2日は夢ではないと説明した。全員が真剣に作業の無駄発見に取り組んだ後、「やれそうだ」という合図で一斉にスタートした。5日後に見事に完成していた。週休2日制は、全員の主体的・創造的な活動で無理なく導入できた。四国ではトップだった。また社員のこの働きは、業績の進展に現れた。現に、製品の6割強を輸出で占め、トップが米国という世界的企業になっている。

3哲人を師と仰ぎ学んだことによって、期せずして思いもよらぬ業績と人生がつけられた。宇宙の意志・神・天に満腔の感謝を捧げたい。

多田野語録
さらに前進

会 員 多田野 弘

さらに前進とは、何歳になっても修養を続けていくことが大事だ、という教えである。私が今までの生涯で大切にしてい

きたことを述べてみたい。それは「信頼」である。信頼関係が私の前進への土台をつくったといっても過言ではない。

信頼は、誰もが望んでいる人間関係であるが、その信頼関係はどうしたらつくれるかを分かっている人は少ない。それを分からなくしているのは、信頼が目に見えない心と心をつ結び付けることによるからである。しかも、私達は理性で物事を考え、五官でキャッチできないものは、認めようとしないことにもある。信頼とは、掴まえ所のない心と心を、どうすれば結び付けられるかである。

例えば、相手の前で「私はあなたを信じます」といくら叫んでも、信頼を生むには何の役にも立たない。また、いくら条理を尽くした言葉や熱意を披歴しても、どんなに詳細な制約書面を取り交わしても、信頼をつくり出すことはできない。そこで、人を信じるとはどういうことか、私の考えを四つの定義に表してみた。

(1) 無私の定義・信じた相手からいかなる報いがあるかと、受け容れる腹が決まったとき。

言いかえると、自分の身を相手に委ねてしまうことである。

(2) 往復の定義・信頼はこちらが信じた大きさだけ、相手からも信じても

らえる。

(3) 即応の定義…人間は信じられたら、それに応えずにおれない。

(4) 心眼の定義…目に見えない心を信じて、相手ができれば、相手の心が見えてくる。

このように、信頼は言うは易いが、真の意味が分かると、非常に恐ろしいことが分かる。なぜなら、信じた相手から、たとえどんなに傷つけられようと、不条理な結果を強いられようと、甘んじて受ける覚悟が必要だからだ。信じた相手の前には、無防備であること、つまり、自分の運命を相手に委ねてしまわない限り、強力な信頼関係は生まれない。こうした命懸けの行為だからこそ、信じるという奇跡が生まれるのである。

しかしながら、私達は生まれつき防衛本能を持っており、常に傷つきまい、失うまいと意識で自分を守っている。この自衛意識が、実は信頼の大きな妨げになっていることに気づかねばならない。したがって、自己防衛に心を惹かれていた間は、信頼が生まれることはない。つまり、こちらが捨て身になることによって、相手を尊重する気になり、信頼するにいたるのである。信じることは愛すること、許すことであり、愛のないところに信頼

は生まれない。

そうは言うものの、自分を少しも守ろうとせず、自分の運命を相手に委ねてしまふ消極的な態度では、この競争社会で生き残れるのかと不安になるだろう。私は、全く反対である。捨て身になり、無抵抗、無防備になれるのは、余程の信念を持った強い人でなければできないことである。だからこそ、信頼関係が私達に予想できない大きな力を生みだしてくれるのではないか。頭で考えている限り、信頼関係は生まれることはない。理性を超えた考えであってこそ、理屈では説明できない奇跡が生まれるのである。

私がこんにちにあるのは、戦後の行動が捨て身になっていったことが、他からの信頼と協力を生んだのである。かつて、南の戦場で3年余、捨て身の戦法で毎日を通じたことが大いに役立っている。逆境が私を強くし、多くの人を信頼したことが前進への上台になっている。逆境が人間をつくるというのは本当だ。間もなく104歳、さらに前進していきたい

多田野語録 貫くもの

会員 多田野 弘

題の「貫くものを」とは、なにかを始めてから終わるまで、やり遂げることを

いう。まもなく104歳になる私の生涯に、そういうものがあるとするとしたら「独立自尊」であろう。自分の人生は自分でつくっていくという心構えであり、これまでの語録に片鱗を述べている。今回のテーマ「貫くもの」は、一人息子へのメッセージとして記したい。

先日、君から、7月で70歳になったと知らされた。「おめでとう、誕生日をしなければならぬなあ」と話した。祝いの品を物色したが、どうもこれといったものがない。今回の「貫くもの」というテーマを見て、立派に成長した君に贈りたい言葉を綴ってみようと、今これを書いていく。

一人息子の君には、幼い時から私の後継者として、特別の思いを持って見守ってきた。そうはいうものの、君が香川大学附属小学校に入ったのを知ったのは入学後だいぶ後だった。その頃、私は零細な企業（我が社の前身）を建ち上げたばかりで、仕事以外は頭に入らなく、一途に突き進んでいた。

君が小学校を終えるころ、地元の屋島中学の校長が来訪され、君の転入を強く希望された。もし実現すれば、全校生とその家族の強大な刺激になるという。気が迫がこもる校長の熱意に、私は心を動か

された。もつとのびのびとした環境で勉強させたいと君を転校させた。その後、校長と会うたびに、貴重な教えを得た。学校教育ではできない躰という全人教育は、家庭教育によってのみ可能だという。

そのわけは、子は親の背を見て育つということから、家庭こそが躰の道場であるという。同時にそれは、背を見せる父親の私にとって、修養の道場になることを示唆した。かつて海軍で学んだリーダーシップの根源が、率先垂範、指揮官先頭であるのを思い出した。

転入を機会に、君に一つだけ注文した。「好きな学科の数学は、同学年中最一番になれ」と励ました。学年の終わりに見た成績は、数学の1位はもちろん、他の学科もすべて良くなっていた。私の重点主義がよかったのだろう。中学を終えるころ、高松商業高校の教頭から、大学受験専攻科をつくって、他校の大学入学率に劣らぬ実績を必ず示すと、溢れる熱意を込めて披露された。当時の校長が高潔な人格者であることも併せて、高商校入学へと導かれた。

三年後、大学受験を前にして、担任の教諭から「合格は間違いないと思うが、万が一ということがある。私大も受けておいてはどうか」と勧められたがどうすべきだろうか、と相談された。私は即座

に、「もし不合格で浪人することになっても、その苦しみは君の一生のプラス体験になる。浪人を恐れるな、一橋大学一本で行け」と答えた。私の重点主義が功を奏したのだろうか、浪人せずに済んだ。

君が大学在学中、記憶に残ることが二つある。一つは、ニュージールランドを自転車旅行したので費用を頼むという。私はその素晴らしいプランに進んで応じた。見事、自転車で異国一周の一人旅をやり切った。「かわいい子には旅させよ」を実現できて嬉しかった。もう一つは、就職の問題があった。商社に行きたいが、どこが良いかを問うてきた。私は我が社と関係ない所なら、好むところへ行けと答えた。

しばらくして、君が希望した商社「丸紅」の人事部長から突然電話があった。「息子さんが入社希望しているが、どういうおつもりですか」という。私は「何の意図も持っていない、同時入社の社員同様、厳しく鍛えてくれ」とのみ頼んでいた。

入社後、最初の1、2年は海外支店での見習い勤務がある。希望を申し出よといわれたが、どの国がいいかという。もし私なら、大国を避け、発展中の開発途上国を選ぶだろうとだけ答えておいた。後で聞くと、皆が嫌っている、アフリカ

のナイジェリアに決まったという。赴任後、君が劣悪な環境に耐えられるだろうか気になっていた。私も戦時中、赤道直下の居住条件が似たラバウル基地で過ごした経験が、戦後の生き甲斐になっていた。君にも同じ道を歩まれんことを願った。

その後、たまたま商用で欧州へ出張した途次、ロンドンからの直行便で、久しぶりに君と首都ラゴスで会えた。メインストリートを歩く人が皆裸足なのを見て、君が劣悪な環境に住むのを知ったが、元気な顔を見て安堵した。この環境に耐えた経験は、君の一生にプラスの効果をもたらすだろうと確信した。皆笑うだろうが、近くにいと気づかないであろう親子の愛が、いかに大きくて深く、言葉にならないのを改めて感じた。

このような経験を通して、君は何事も自分の判断・責任のもとに実践する独立自尊の精神を学び、成長してくれた。私の夢であった、製品の65%を輸出する世界的企業に仕立て上げた実績は見事である。我が子を褒めそやすのは面映ゆいが、胸を張って自慢できる息子だ。私が10年間貫いた独立自尊を引き継ぎこれからも君の人生を豊かに歩んでくれることを切に願っている。

森丘哲四郎少尉



「第1七生隊の出撃・不時着から第5七生隊再出撃・散華に至る間の森丘少尉を想う」

理事 福江 弘明

1. 「第5七生隊員として散華した森丘少尉」

昨年は、これまでの「身近なる特攻史」シリーズの一環として、私の郷里（長崎

県大村市）で唯一の航空特攻戦没者である海軍飛行予備学生第13期・晦日進少尉を調査し、当会報（147号）に投稿した。彼は鹿屋基地に進出する前に元山航空隊（現在の北朝鮮内に配備）に所属していたため、現地での訓練ぶり等を理解する上で当会が発行している『森丘哲四郎 手記』（以下、『手記』）（注1）を活用。その手記の中で、特攻出撃まで

の心情等を克明に綴った森丘少尉は、晦日少尉が指揮官として率いた第5七生隊の列機の搭乗員でもあり、共に昭和20年4月29日に沖縄本島東方にて散華したことを知った。

以下は、鹿屋航空基地史料館内で掲示されている森丘少尉の経歴概要である。

・作戦方面…菊水4号作戦
・布告番号…109
・出撃部隊…神風特別攻撃隊第5七生隊
・出撃日時…20・04・29 14・17
・階級…少尉
・戦死日…20・04・29
・搭乗機、機数…爆戦 4
・生年月日…大正11・4・21
・年齢…23歳
・出身期別…予備学14期
・所属部隊…第721海軍航空隊附
・出身県…富山県
・戦死場所…沖縄北端東方

『手記』を読み、気にかかった事がひとつ。森丘少尉は、最初の特攻出撃（昭和20年4月6日）において「エンジン不調で奄美大島に不時着 帰還」（注2）

との記述があるが、『手記』自体は4月3日を最後に、不時着から第5七生隊出撃までの間の本人による記録は一切ない。

この疑問から、前回調査の縁もあり、森

丘少尉は不時着以降、いかなる経緯で鹿屋基地に帰還し第5七生隊として再出撃するに至ったか、その間の苦悩はいかばかりであつたかについて、強い関心を抱くことになった。

そうした中、海軍第14期予備学生遺族会会長・茂木尚氏から、前回私が投稿した記事への所感と関係資料を提供いただいたこともきつかけの一つとなり、本テーマに取り組むこととした。

ここでは、森丘少尉が第1七生隊として出撃後から、第5七生隊での散華までの間（昭和20年4月6日～4月29日）を対象に、関係する文献・資料及びご親族等への聞き取りを基に調査した結果をとりまとめるとともに、個人的な所見を述べる。

2 「第1七生隊員として鹿屋基地出撃から奄美大島の不時着まで」（昭和20年4月6日）

この項では、まず昭和20年4月6日の沖縄方面における航空作戦の全般、並びに第1七生隊が鹿屋基地から出撃した際の状況を、それぞれ関係する文献を基に確かめた。次に、米軍艦船への攻撃に向かう森丘少尉が搭乗する機体の不具合により、奄美大島に不時着した事に関連する記述を、文献及びデジタル・データか

ら検索。

ここまでの成果を踏まえて、森丘少尉が不時着を敢行するにあたり、如何なる心境と判断があつたのかを推察するとともに、その間の機体操作についても航空自衛隊の現役戦闘機操縦者に机上での模擬を試みてもらい、その結果を付した。

概況 (1) 4月6日における沖縄方面の作戦

七生隊と命名された各飛行部隊による航空特攻は、「菊水作戦」の一環で実施されている。この菊水作戦については、『戦史叢書第017巻「沖縄方面海軍作戦」及び『大東亜戦争戦史叢書第17冊付録』の内容を抜粋、要約して当会の会報第147号18頁に記載したほか、『特別攻撃隊全史』（62～75頁）にも記述されている。

第1七生隊に関わる出撃については、『第721空爆戦隊戦闘詳報第3号』（昭和20年4月6日菊水1號作戦）（注3）にその詳細が記されている。このうち、「第2経過」の「1. 経過概要」（注4）には、「1339～1610ノ間ニ46機発進 通信状況ニ依レバ 概ネ1655ヨリ1830ノ間ニ敵部隊発見1615ヨリ1746ノ間ニ沖縄周辺敵艦船群ニ対シ突入ニ成功セルモノノ如

シ（1600発動機不調ノ為1機帰投）」とある。また「2. 自隊ノ戦闘経過」（注5）では、表をもつて編隊毎の経過が示されている。

(2) 第1七生隊・森丘少尉の出撃状況
前項における第1七生隊の行動経過の中で、森丘少尉の出撃状況に特化して細部を調べるにあたっては、『第721空爆戦隊戦闘詳報第3号』と『海軍 第14期遺族会資料』を照合した。その結果を次に列挙する。

ア 文献記録等から森丘少尉について明らかにした点

(ア) 4月6日に11区隊の所属として鹿屋基地を1540に発進。第1七生隊は4つの区隊から構成。通常、1個区隊は4機編制。（注6）

(イ) 搭乗機は、25番（250kg）爆装、機銃弾100発装備、燃料満載

（注7）

(ウ) 第1七生隊の未帰還者名簿には森丘少尉の記名はない。（注8）

(エ) 前項の附属編制表中にある森丘少尉に関する記事欄には、「帰投」の記載（注9）があり、当該戦闘詳報の作成日である4月16日までに森丘少尉の存命が確認されている可能性がある。

イ その他関連事項

(ア) 11区隊の2番機が1600に帰投している(注10)が、岡部平一少尉が鈴木弘少尉のどちらかであるはずだが、関係の文献には、岡部機との記述(注11)がある。なお、岡部及び鈴木両少尉は発動機不調で帰投し、4月12日第27生隊の第3区隊として共に出撃、戦死している。

(イ) 第17生隊で最後の出撃となった13区隊の4機のうち、片岡良吉少尉は機体トラブルのため発進中止となったが、代わりに大村空の谷尾計雄上飛曹が出撃、未帰還者(注12)となった

ている。

(3) 奄美大島における森丘機による不時着の経緯

『手記』の中で森丘少尉の姪にあたる名和まどか氏が「奄美大島伊須湾の阿木名海岸砂浜に機体を大破させること無く不時着。」(注13)と述べている。本年4月旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式の前日に、直接ご本人にお会いした。不時着場所をお聞きした際に、機体自体は海軍基地の隊員と思われる集団がトラックに載せて回収したとの話もうかがった。



【阿木名と古仁屋の位置関係を示す地図】

森丘少尉の不時着については、幾つかの文献等に関連する記事を見ることが出来る。中でも『奄美郷土研究会報』には、「(阿木名)：日本の特攻機2機、浜と山に不時着。：(注14)との記述からは、不時着場所として阿木名海岸の浜辺が特定できるが、日付が不明。

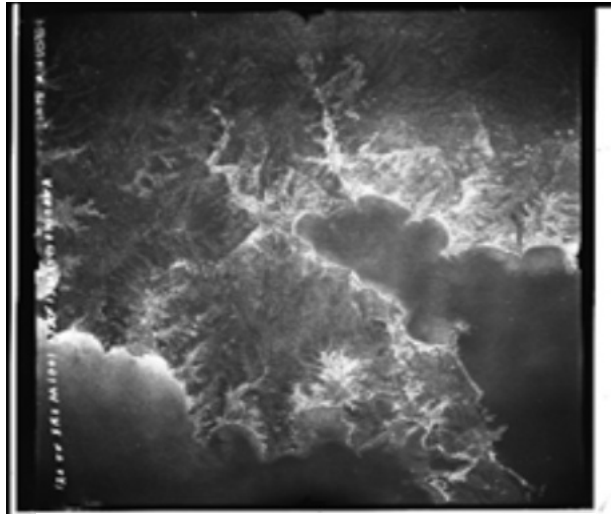
一方、奄美大島の埋蔵文化財センターに問い合わせたところ、『大島防備隊戦



現在の在の大島郡瀬戸内町・阿木海岸

時日誌』(注15)の中に該当すると思われる情報があるとの紹介を得ることができた。次がその内容である。「6日宝島見張所1545発 大島防司令宛 味方戦闘機本島東岸二不時着ス 無電」(注16)。この海軍の記録からは日付が6日であり、森丘少尉の機体である可能性が極めて高いが、先述の鹿屋基地発進時刻との不整合から確定するまでには至らなかった。

また不時着後の状況に関しては「島の



昭和 2 2 年米軍による空中写真

ため格好の平地も見当たらなかったため、多少のけがをしたが、生命に別条はなかった。… けがも駆け付けた住民や駐屯の部隊の手厚い看護で、大したこともなくすんだ。しばらくの休憩をして平静にもどった彼は、もう一度再起を期して鹿屋基地へもどることになった」(注17)の記述からは、森丘少尉は軽傷で歩行可能であったと推察できる。当時、阿木名には陸軍曉部隊、第2740部隊、海軍防備隊、海軍航空隊基地阿木名派遣隊が配備(注18)されており、また不時着した阿木名海岸から南西約3.5^{km}に海軍航

空隊古仁屋基地があったことから、こうした部隊等が救助・機体回収を行ったのではないだろうか。

(4) 不時着に際しての森丘少尉の判断と手順等に関する推察

これまで文献等より得た諸情報と、森丘少尉が搭乗した零戦21型の性能諸元から次の仮定を立ててみた。

ア 状況…奄美大島海峡上空においてエンジン不調等の不具合発生(特攻機の中継基地及び不時着場として使用されていた徳之島及び喜界島への飛行が困難な程の状況)

イ 時期…4月6日1500~1800の間(鹿屋基地の発進時間と奄美大島までの距離から換算)

ウ 装備…250 kg爆弾、なお燃料は離陸時満載であり、残燃料は充分

エ 不時着場所…緩く湾曲する長さ数百メートルの砂浜

オ その他…不時着後の操縦者は軽傷の模様

これらの仮定のもと、緊急着陸を余儀なくされるほどのわずかな時間の中で森丘少尉が如何なる判断の下に、どのような緊急着陸の手順をとろうとしたのかについて、よりイメージを鮮明にするため、航空自衛隊所属の現役戦闘機操縦者に模

擬、検証を試みてもらった。検証にあたっては、当方から、現在の阿木名海岸の写真数枚、阿木名海岸上空を撮影したYoutu Tube動画、零戦21型の基本的な性能諸元を併せて提供した。

■零戦21型の性能諸元(ネット情報から引用)

・全幅 12.0 m
・全長 9.05 m
・全高 3.53 m
・自重 1,754 kg
・最大速度 533 km/h (高度4,700 m)

・上昇力 6,000 mまで7分27秒
・上昇限度 10,300 m
・エンジン出力 940馬力

(零12型エンジン)
・航続距離 3,335 km (増槽装備時)・乗員 1名・武装 20mm機関砲、7.7mm機銃2挺・爆装 250 kg爆弾1発

検証の結果は、次のとおりである。ただし、あくまでも文献等からの限られたデータを基に、現代の戦闘機操縦者による航空知識と飛行技術の観点からの見解を時系列で列挙したものである。

なお、今回個人的に協力を得た現役の航空自衛隊戦闘機操縦者は、自らを森丘少尉の身に置き換え、思考・行動を1人

称で表現することで臨場感を出すことに注力している。その全文については文末(34～36頁)に掲載。

①…離陸後1時間ほど経過した頃、発動機が不調。燃料系統の不具合だろうか。シリンダー温度が低めを指す。カウルフラップを調整し、燃料コック及び自動混合気調整装置のレバー、それぞれの位置を確認。速度が保てず、高度を維持できない。

②…編隊が乱れる。この機体では任務が遂行できない。不時着を決意。指揮官機に手信号で編隊離脱を告げる。

③…眼下は奄美大島か。海上の不時着は危険だ。数百米長の砂浜があれば望ましい。奄美大島南部の入江上空を高度千米で通過中、右手に見える湾の奥に広がる砂浜を認めた。左降下旋回で四分の三旋転すれば進入できるはずだ。

④…砂地に主脚がとられれば機体は転覆する。フラップは通常どおり使用し、操縦席に閉じ込められないよう風防は開けたままにしておこう。

⑤…しまった。二十五番(250kg)爆弾を抱えていた。左降下旋回から右バンクを切り返し、下方に船がないことを確認。針路東でいったん旋回を止め、無理を承知でスロットルレバーを開き上昇

姿勢をとる。その刹那、爆弾を投下器から分離し、すかさず左急旋回で離脱。

⑥…西日に向かって着陸態勢に入る。砂浜に岩場は隠れていないか、人はいないか。横転しないだろうか。やれることだけのことはやった。あとは運に身を任せよう。

⑦…機体の接地を感じるや否や、思いのほか強い衝撃を感じ、照準器に額を打ち付けた。額からの出血を除けば、けがはない。プロペラは無残に折れ曲がっているが、火の手が上がっていない。初めてにしては、上出来の不時着だろう。

3.「奄美大島から佐世保を経由して鹿屋基地へ帰還、再出撃」(4月6日～29日)

(1)不時着以降の奄美大島に滞在

不時着した以降の行動については、『手記』の中で、名和氏は「…歩いて山越えし、古仁屋海軍基地へたどり着き」(注19)と述べている。当時、古仁屋には陸軍の奄美大島要塞司令部をはじめ戦闘及び兵站・後方の各種部隊が配置されており、海軍では古仁屋の須手仁屋派遣隊が展開(注20)していた。おそらく森丘少尉はすでに壊滅的な被害を受けていた古仁屋水上基地関連施設(防



現在の古仁屋水上基地跡

空壕、バラック)に身を寄せていたのではないだろうか。当時の古仁屋地区及び須手の航空基地の被災状況について次の記述がある。「瀬戸内は(昭和20年)3月10日に敵の大空襲を受けたのである。部落民の狼狽振りは言語に絶する思いがあった。それこそ初めて敵の大編隊に依る空襲を身近に体験したのであるから。目標は須手の飛行場と停泊中の船舶であつたようだ。唯一回の空襲で飛行場は殆ど全滅、停泊中の船舶は悉く撃沈されたのである。それから須手の飛行場に飛行機

の影を見ることが無かった」(注21)。

さらに「古仁屋に着いてみると、航空隊は空襲で全焼し、隊の司令部は防空壕の中に、引越していた。そして、不時着した飛行機の搭乗員や、負傷した将兵が沢山いた」(注22)と、先に水上偵察機で徳之島に不時着し、古仁屋に移動してきていた神園望氏による記載もあり、この「不時着した飛行機の搭乗員」のうちの一人が森丘少尉であったとも考えられる。

(2) 帰還のための佐世保へ移動

森丘少尉は不時着後、1週間ほど、奄美大島(古仁屋地区・須手)に滞在したことになるが、不時着時の怪我の治療・回復のほか、連日の空襲により移動手段の確保が困難であったと思われる。また佐世保への移動手段については、今回調査した関係の文献から、「本土とのあいだの便船を乗りつぎ、12日に佐世保港に上陸」、「たまたま避泊していた潜水艦に便乗して佐世保に帰投」と諸説があることがわかった。

こうした中、沖縄戦に造詣が深い菊池保夫氏から関連情報の提供を受けた上で、現地での文献調査を行った結果、森丘少尉は4月12日深夜に海軍水上機に同乗して古仁屋から同機の任務先である佐世保

に帰投したと考える。その理由としては、まず先述の神園氏が戦後寄稿した戦争体験記の中の次なる文があげられる。「毎日、空襲の激しい古仁屋に、約1週間いた。そのうち、水上機が佐世保に飛び立つ、という

零式水上偵察機 (ネット上から引用)



ので、便乗させてもらう事にした。私は、先に特攻出撃途中不時着した、森丘哲四郎少尉(予備学生出身)と同一乗し、二人の部下は他の水上機に便乗した。午前三時頃空襲の激しい合間をみて、水上機は古仁屋を離水した。しばらくして、鹿児島島の南端、坊の岬にさしかかった。すでに、ここにも敵哨戒機が飛びまわっていた。「本土決戦間近し。」の感が、ひしひしとして、皆只無言だった。敵哨戒機から逃れようと

水上機は、海面すれすれに超低空を飛行、敵機の目をかすめながら、やつとの思いで、佐世保航空隊に着水した。」(注23)

次に、当時、古仁屋には951空派遣隊が展開しており、同隊の隊長であった荒川中尉が「奄美大島の絶好の艦隊泊地を狙って敵が上陸するのは時間の問題であるとして、敵潜のため船を使えず、もっぱら零式水偵で毎夜の如く佐世保から機銃、弾薬、手榴弾、擲弾筒等を補給していた。その水偵の帰り便を利用して、不時着搭乗員等を佐世保に送還していた。」(注24)と回想している。さらには、昭和館に所蔵されている『とんぼ』(注25)からも、佐世保から古仁屋へ定期的に零式水偵で空中輸送を実施していたことがわかる。

なお、当時、機種が異なる水上機が運用されていた中で、神園大尉及び森丘少尉が搭乗した水上機がほぼ零式水偵と断定できるもう一つの理由としては、同機が3人乗りであることがあげられる。

(3) 佐世保から鹿屋へ帰還、再出撃

先述の神園氏の戦争体験記によると、森丘少尉が神園大尉と共に佐世保に到着したのは12日の早朝頃と考えられる。それ以降の鹿屋基地までの移動にかかる記述として、「15日出水基地に帰投し、待

機中だった。その途次、行きつけの阿久根温泉、栄屋旅館に立ち寄った」(注26)、「出水基地へ着いたのは、15日のことだった。途中、出水空時代に行きつけのクラブに使用していた阿久根温泉の栄屋旅館に一泊した。翌日、出水空へ向かったのである。」(注27)、「今でも森丘さんのことは忘れられず、ついこの間のことのように覚えていたのでございます。最後にお見えになったのは4月14、15日だと思います。(中略)その日の夕方、突然駅から電話がございまして、森丘さんが泊りに来られるという知らせがありました。お着きになったのは9時頃と思います。(中略)午頃(*ママ記載)阿久根駅をご出発されたのでございますが、駅までお供をし、発車した汽車の後を追って走り、及ばなくなるや力の限り手を振ってお見送りしたのでございます。」(注28)がある。これらの記述から、森丘少尉は4月14日に阿久根の栄旅館に一泊し、翌15日の昼頃に阿久根駅から出水基地に向かい、同基地にて17日まで滞在して同日、鹿屋基地に帰還したものと推察。他方、12日及び13日の両日については、関係の文献・記録を見出すことができなかった。神園氏は戦争体験記の中で、佐世保を出発後、鹿屋基地に到着するまで

の間の事を次のように記述している。「佐世保から鹿屋への、飛行機便はなかった。やむなく、汽車で鹿児島に向かった。当時は、国内も至る所空襲が厳しくなり、汽車もなかなか時間通り運行出来ず、出水に午後十時頃着いた。出水で駅員に頼み込んで、貨物列車に便乗させて貰い、夜十二時頃、草道駅(川内)に着き、駅近くの自宅に立ち寄った」(注29)。こうした状況からすると、森丘少尉も神園大尉と同様、鉄道移動に頼らざるを得なかったものと思われる。

鹿屋基地に森丘少尉が帰還した以降、第5七生隊として再び出撃するまでの森丘少尉に関する行動等を関しては、唯一、先述の神園氏の戦争体験談では、「古仁屋から一緒に帰った、森丘少尉は、4月28日(*ママ記載)、「今度こそ立派に突入します。」と云って、にっこり嬉しそうに笑い乍ら、見送る私達に手を振り、特攻機に乗って飛び立った。」(注30)とある。

森丘少尉が第5七生隊として散華された際の状況等は、冒頭において鹿屋基地史料館のプロファイルに示したとおりであるほか、会報147号の18頁に記述した「4・沖縄方面において散華された4月29日の戦況等」の中で詳しく記述した

つもりである。その中で爆戦6機のうち、第2区隊(3機編隊)の1機が森丘少尉である。ちなみに、他の2機は指揮官・晦日進(予備学生13期)、僚機・北村徳太郎(14期)である。

4・「調査研究の総括と共に特攻80年の節目に想うこと」

今年度の調査研究については、昨年度の調査を実施した私の郷里で唯一の航空特攻戦没者である晦日進少尉の僚機であった森丘哲四郎少尉を対象とさせていた。森丘少尉は本文において紹介した手記を後世に残していることで広く知られているが、私はあえて彼の手記が全くない「第1七生隊として昭和20年4月6日出撃から、奄美大島に不時着、佐世保・出水を経由して鹿屋基地に帰還後、4月29日第5七生隊として再び出撃・散華するまでの3週間強」の期間に焦点を当てて調査活動を実施した。

昨年末から開始した参考文献の検索等に当たっては、森丘少尉のご親族である名和まどか様、海軍第14期遺族会会長・茂木尚様、沖縄戦を中心とする戦史研究家・菊池保夫様、鹿屋航空基地史料館・奄美市立奄美博物館・奄美市立図書館・瀬戸内町埋蔵文化センター・瀬戸内町立図書館郷土館の関係職員・学芸員の方々

から多くの貴重な情報を提供していただき、あらためて深謝申し上げます。

今回の調査活動において新たな事実にとり着くことはなかったが、森丘少尉の手記なき3週間に関連する文章が載る文献等を、あらためて検索・拝読しながら調査結果をとりまとめることができたと自負している。結びにあたり調査活動を通じて、特に強く印象に残った事に若干の所感を付させていただく。

(1) 不時着時の心理と操縦を読み解くことによる顕彰

第1七生隊として出撃後、奄美大島上空でエンジン不調に陥り、阿木名海岸に不時着するまでの間について、既存のデータを基に航空自衛隊所属の戦闘機操縦者によって森丘少尉の心理描写（本稿の「追記」に、全文を掲載）を行ってもらえたことは得難い成果であった。これにより、ご親族はもとより旧軍関係者をはじめ多くの方に上空における搭乗員の切迫した心理状態、戦闘機の緊急操作等に関する臨場感、さらには森丘少尉の息遣いさえ感じていただける良き顕彰になるのではないだろうか。大正11年生れの森丘少尉は存命なら来年4月で満103歳を迎えられるが、ご本人もきつとこの試みを喜んで受け入れていただけるはずで

ある。今後、当時の気象及び地形の状況を気象庁・国土地理院の詳細なデータを取り合わせることで、ドローン器材やコンピュータ・グラフィックを駆使した映像化も期待できるだろう。

(2) 「手記」なき時期の心情を推し量ることによる慰霊

森丘少尉の手記は、昭和17年4月23日（東京農業大学実習時代）から昭和20年4月3日（元山航空隊）までの、まさに青春時代の日々を様々な視点で書き綴られている。それら全ての内容が実物の写しと活字の両形式で掲載されているのが、当会が平成27年12月に発行した『森丘哲四郎 手記』である（実物のノートは、鹿屋基地史料館に遺族により寄贈）。

元山航空隊において天候不良により第1七生隊の出撃を待つ身のもどかしさを記した4月3日付の手記以降、彼は紙による記録を残していない。先述のとおり、あれほど長きにわたり日誌・日記として書き続けたにもかかわらずである。この点について、姪である名和まどか氏に問うてみたところ、「哲四郎叔父は、「逝く」と覚悟した時点で無心の境地に身を置いたことで書き物を一切残さなかったのでしょう」と応えられた。

それだけに森丘少尉の実妹の名和まさ

多氏は「…兄は、不運にも奄美大島に不時着、天皇誕生日の4月29日午後11時18分に再度出撃玉砕致しました。再度出撃迄の20日間余りの兄の心情を思う時、どんなに苦しく辛く長い日々だったことと未だに切なく思いやられます。…」（注31）と戦後語っておられ、同氏の娘にあたる名和まどか氏も「不時着時後の伯父の気持ちや思うと日記に残した文面以上に心が揺れ動いたのではと涙が溢れます」（注32）と述べている。また鹿屋基地への帰還途中に泊した栄屋旅館の岩崎治子氏にあつては、「お話をしているもどことなくお淋しそうでございました。そのうち、再びお部屋をお伺いしましたら、お部屋の隅でじいっと何か考え込んでおられました、それはいかにもさびしそうでした。私はなんとお話をすればよいかと思ひあぐみ、気話まる思いでそのお姿を見ていたのでございます。」（注33）と語ったとされている。

こうした悲哀の情が伝わる一方で、本文で紹介したとおり先に奄美大島の古仁屋から零式水偵に森丘少尉と一緒に同乗して鹿屋基地に到着していた神園大尉は、第5七生隊として出撃する森丘少尉が、「…にっこり嬉しそうに笑い乍ら、見送る私達に手を振り、特攻機に乗って飛び

立った。」(注34)と書き残している。この時の森丘少尉の心の内をどのように理解すればいいのであろうか。玉砕をもって逝くとの決心したことで人生を達観、無我の境地に至ってなお両親、兄弟、友人、周囲の関係者に「笑み」を浮かべ応え得るものなのだろうか。森丘少尉だけではない、特攻隊員だけでもない、国難・国家存亡に際しての人の死生観を真に理解することは、今現在、生命を賭す難儀に直面するものでない私にとって困難を極めるが、何度も「手記」を読み返すことによって次第に理解を深めていけるのではないかとも思う。

(3) 史実を追究する中でも、個人の確信は不変の事実

これまで特定の特攻の隊員並びに同所属部隊等に関する個々の事象を調査研究するにあたっては、戦争・戦闘の実態・実情を多くの方々に知っていただくために、旧軍の「戦闘詳報」「戦時日誌」「機密電報綴」等に記載されている情報・データの検索を優先してきた。今回の調査において活用した『海軍特別攻撃隊戦闘記録―航空隊編―』には次の記述がある。「戦闘詳報は作戦指揮の重要資料として作成されるものであり、その正確さは何よりも重視されていた。したがって、

基本的には文字どおり一次資料として扱うことができる。しかし、原則的にあくまでも日本側だけみた記録であるということとを考慮する必要がある。つまり、味方の作戦計画、兵力、味方の損害や戦闘経過などは事実にも最も近いと考えられることができる。しかし、相手に与えた損害や、相手側の行動などについては、日本側の戦闘詳報からは事実を引き出すことは難しいのである。これらは当然ながら米国の戦闘詳報あるいは公刊戦史と照合することによって、初めて事実が再現され、戦闘詳報自体の真の価値が引き出されることを忘れてはならないだろう。」(注35)と。今回の森丘少尉の行動経過は米軍との交戦を伴うものではなく、日本軍内で完結していることから、史実の一次資料として大いに有効であることになる。ただし、戦闘詳報の裏付けが明確であるのは森丘少尉が鹿屋基地から4月6日に第17生隊の一員として出撃した際の状況と後日同基地に帰投したことだけである。奄美大島不時着以降、同島から零式水偵に同乗して佐世保、出水を経由して鹿屋基地に帰還したことは証言によるものとなる。

員を含む森丘少尉の関係者の方々による記録を照合、参照する等して、可能性の比較的高いストーリーとしてまとめたつもりである。調査活動を進めていく中で、奄美大島から佐世保へ帰投する件については、証言者や文献によって、不時着地が徳之島であり、また帰投には潜水艦、民間船舶の乗り継ぎという内容もあったのは、すでに本文で紹介したとおりである。

ただし、私はこうした証言や証言に基づき記述内容を誤りであると指摘することなど毛頭考えない。大戦末期及び戦後直後の混沌とした時代にあつて当時の世情を知る先人の発言は当時においてある意味正しく、あるいは、やむを得ないものとも考える。次の記述は、森丘少尉が所属していた元山航空隊の生き残りの方が戦後主体となつて編纂された図書からの抜粋である。

「しかし、何分にも50年の歳月である。詳しい資料はなく照合しようもないのと、頼りの個人の記憶も不確かさは被うべくもない。同じ事柄についても、日時や内容、関係する人物など百人百様の記憶としかいようなない情況。しかも50年の長きにわたり、独り胸中に温めていた記憶だけに(老いて益々頑固に…)とはいわ

ないが…) 容易に変更を許さぬほどの“確信”に化している。議論すれば自分が正しいと一步も譲らぬようなことが縷々である。考え様によつては、個人の確信こそが、その人にとつての真実ともいえるので、編集方針としては少々の食い違いがあつてもこだわらないということにした。その代わり原稿は執筆者を記していくということにした。」(注36)

今回、私はこうした証言内容の実態と取り扱いに十分配慮しつつも、あくまでもご遺族に80年が経過した今日、これまでなかなか見えづらい部分があつた個所をわずかも可視化して、ある程度結論づけることで、森丘少尉をよりいっそう身近に感じていただけたらと、その事を念じた調査研究でもあつたことはご理解をいただきたい。

このたびは、ご親族等の胸の内に残る特攻隊員であつた森丘哲四郎少尉の記憶を何よりも大切に考え、なおかつ特攻80年の節目に新味のある調査研究ができないものかと試行錯誤した上での本稿のとりまとめとなつた。本年4月に名和まどか様に鹿屋市内でお会いして黒糖焼酎と一緒に嗜みながらのインタビューは貴重な機会であつた。あの日、まどか様から

母上であり森丘少尉の実妹の名和まさ多様が同少尉の慰霊のための各地を巡られたこと等を拝聴したことで、この調査研究の本格的活動が始まつたのである。この結果をまどか様にお知らせし、名和まさ多様の墓前にて報告していただくことが待ち遠しい。

と同時に、現代に生きる我々世代が果たすべき責務のひとつに、特攻隊顕彰の記録を後世に末永く継承することがある。本文中で紹介した森丘少尉のご遺族が発行されている『神風特別攻撃隊 森丘少尉』の「あとがき」の最後の文章には、「あなたの生涯は短かつたが、この本を読む多くの人によつて永く生きること喜びます」(注37)と結ばれている。

この本自体は、部数が限られ所蔵先もいずれ定かではなくなるだろう。今後はデジタル化によるデータベース化を図るとともに、生成AIの活用によつて国の存亡に身を賭した森丘哲四郎少尉の短き人生を、デジタル空間において、いつでもよみがえらせ、永きにわたり語り続けられることを大いに期待したい。

「追記」

本文「2(4)不時着の際の森丘少尉の判断と手順に関する推察」の項を記述

するにあたって、航空自衛隊の相澤直樹1等空佐(当時、防府北基地第12飛行教育団 航空学生教育群司令)に協力を得たことは本文内において紹介したとおりである。ここには、相澤1空佐が森丘少尉に成り代わり、七生隊の一員に指名された以降、不時着するまでの間の心理描写全文を掲載する。なお、相澤1空佐は、私が提供した関連資料のほか、ネット情報、並びに多くの坂井三郎氏の手記や神立尚紀著「決定版 零戦 最後の証言」等を参照した上で、操縦及び緊急事態対処についての自己の経験に基づき次を記述している。

『特攻任務の搭乗割に自分の名前を見たときは「遂にこの時が来たか」と冷静に受けとめた。正攻法の爆撃や雷撃では戦果を得難くなり、特攻が開始され、そこでは一定の戦果が得られている。

鹿屋からは3月11日に梓特別攻撃隊の銀河が長駆ウルシー泊地まで進出し、空母ランドルフ大破の戦果を得た。3月18日からの九州沖航空戦においても、撃沈空母5、戦艦2、巡洋艦3、不詳艦1の戦果を得たようだ。

4月1日、連合国軍の沖縄上陸をもつて陸海軍全機の特攻化が示された。4月

6日発動の菊水一号作戦に特攻機搭乗員として参加することになった。編入した第七二一海軍航空隊「神雷部隊」の岡村基春司令からは「我が部隊では投下器に爆弾は固縛しない。突入前に爆弾を離し、貫通によって効果を大きくする。敵艦直前で離せ。遠くでも離せ。敵戦闘機に捕まったら爆弾を捨てて空戦をしろ。死ぬことが目的ではない。戦果を上げるために何回でも行ってもらおう」と指導されている。任務に集中し、戦果を得ることが自分の務めだ。

第一七七生隊隊長、宮武大尉から各区隊に命令が下達され、いよいよ出撃だ。我々の戦果の積み重ねのみが、敵の九州上陸を、本州侵攻を断念させることができる。今生に未練はあるが、人生の意味とは長短ではなく、どう生きたかだ。

整備員から搭乗機を引き継ぐ。ここから先は、自分の出番だ。機体は、発動機は、万全だろうか。任務さえ完遂できるのなら、多少の不具合は克服せねばならぬ。見送り、見送られる双方が平常心を装うのは、任務を前に交わす目礼時の礼儀である。離陸も平常心だったが、最後の離陸、最後の風景と心に留めた。しかし、離陸後まもなく、僚機の岡部及び鈴木両少尉は発動機不調により帰投した。

その後は、対空警戒を厳としつつも、暫し巡航速度で指揮官機との編隊を組む。敵と交わるまでの穏やかなるひととき、操縦桿を握る11区隊指揮官・小林哲夫少尉の心情は、我に同じか。離陸後1時間になろうとする頃、発動機が不調を訴え始めた。

ここまで順調だったことを考えると、燃料系統の不具合か。発動機関連の計器の値は正常範囲ながら、シリンドラー温度が低めを指している。カウルフラップを閉にして対処しつつ、燃料コックの位置、自動混合気調整装置のレバーの位置を確認する。操作を誤ったわけではなさそうだ。しかし速度が保てず、高度も維持できない。編隊が乱れる。この機体では任務が遂行できない。申し訳ない気持ちを押して不時着を決意し、手信号で指揮官・小林少尉の了解を得て編隊を離脱する。

海上の不時着は危険が多い。着水に失敗すれば負傷し、溺れる可能性が高まる。漂流して救助を待つ間に、フカに襲われた事例も聞く。右下は奄美大島か。数百米長の砂浜があれば、不時着に望ましい。奄美大島南部の深い入り江の上空を高度千米で通過していると、名も知らぬ湾の奥に広がる砂浜を認めた。切り立った山

の南斜面の裾に広がる砂浜は、島の東側から海上を進入する経路の延長にある。山地との水平距離も問題なさそうだ。左降下姿勢で四分の三回転すれば進入できる。

砂地に主脚がとられれば機体は転覆する。脚は下げずフラップは通常どおり使用し、座席を下げて操縦席に閉じ込められないよう風防は開けておこう。しまつた、二十五番(250^キ)爆弾を抱えていた。このままでは不時着できない。左降下旋回から右バンクを切り返し、下方に船がないことを確認した。

爆弾を投棄したら着水時に爆発するかも知れず、この高度では機体に破片に当たる可能性がある。針路東でいったん旋回を止め、無理を承知でスロットルレバーを開き上昇姿勢をとる。その刹那、敵艦を屠るはずだった爆弾を放り投げるように投下器から分離し、すかさず左急旋回で離脱する。岡村司令の爆弾を固縛しない方針に救われた我が身、次は不時着を成功させ必ずや再出撃して見せる。

西日に向かって着陸態勢を整える。砂浜に岩場は隠れていないだろうか。人はいないだろうか。横転しないだろうか。不安は尽きないが、やれるだけのことはやった。あとは運に身を任せよう。機体

の接地を感じるやいなや、思いのほか強い衝撃で照準器に額を打ちつけた。肩バンドをきつく締めることを忘れていた。ただし額からの出血を除けば、けがはない。プロペラは無残に折れ曲がっているが、火の手が上がることもなく、初めてにしては上出来の不時着だろう。

零戦の不意な出現に、島民が駆け寄ってくるのが見える。先頭を走ってくるのは小学生たちだろうか。彼らを敵から守るために、戦果を挙げんと戦友は攻撃途上にある。必ずや我も続く。』

「参考資料一覧」

- 注1…『海軍特別攻撃隊第5七生隊 森丘哲四郎 手記』（公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会 平成27年）
- 注2…前掲注1 XIV頁
- 注3…『海軍特別攻撃隊戦闘記録・航空隊編・』（アテネ書房編集部 2001年）237頁
- 注4…前掲注3 257頁
- 注5…前掲注3 258及び259頁
- 注6…『元山海軍航空隊 特別攻撃隊「七生隊」の編成と出撃の状況』（海軍第十四期遺族会 茂木尚）3頁
- 注7…前掲注3 256頁
- 注8…前掲注3 266頁

注9…前掲注3 272頁

注10…前掲注3 258頁「其ノ他」の欄内

注11…『若き特攻隊員と太平洋戦争』（森岡清美 2011年）153頁

注12…前掲注3 273頁

注13…前掲注1 V頁

注14…『奄美郷土研究会報 第28号』（奄美郷土研究会名瀬 昭和63年）30頁

注15…『昭和20年4月1日（昭和20年4月30日）大島防備隊戦時日誌』

注16…前掲注15 「3. 令達報告等 電報」の4月6日の記録」1729頁

注17…「再びは還らざる出撃をなす」（篠崎哲也 1995年『丸』6月号）245頁

注18…『わが町の戦中戦後を語る（思い出の体験記録集）』（瀬戸内町中央公民館 1989年）13頁

注19…前掲注1 V頁

注20…前掲注18 「海軍航空隊古仁屋基地での回想」荒川一郎 142頁

注21…前掲注18 「戦争の思い出」三谷武円 74頁

注22…『“あゝ痛恨”戦争体験の記録』（社団法人 鹿児島県医師会 1978年）404頁

注23…前掲注22 「私の沖縄戦」神園望

404、405頁

注24…前掲注20 143頁

注25…『とんぼ』（乙飛予科練十期生生存者の記録 十期雄飛会 昭和58年）笹岡義重 194頁

注26…『太平洋戦争に死す』（蝦名賢造 西田書店 1983年）177頁

注27…前掲注17 245頁

注28…『神風特別攻撃隊七生隊 森丘少尉』（森丘正唯 伊東秀雄 昭和42年）202、204頁

注29…前掲注22 405頁

注30…前掲注22 406頁

注31…『元山空の集い』（元山海軍航空隊史編集委員会 平成6年）83頁

注32…前掲注1 V頁

注33…前掲注28 203頁

注34…前掲注22 13頁

注35…前掲注3 13頁

注35…前掲注31 186頁

注37…前掲注28 249頁

抑止力の戦史的観察

熊本偕行会会長

中垣秀夫

1 全般

空挺同志会の松尾辰蔵・熊本県支部長から「今年も義烈空挺隊慰霊祭の慰霊の詞をお願いします」と頼まれた。そこで「今年は何を書こうか」と考えつつ、「例年と同じように、①義烈空挺隊の壮絶なる突入は内外に大きな衝撃を与え、②米軍は我が軍の忠烈の凄まじさに畏怖の念を強くし本土決戦回避に傾いた、③我が国民は大いに士気が高まり、一億総玉砕の決意を新たにした……等は外せない。一方、空挺と特攻の違いにも言及すべきかな」との思いを巡らせていた。そこへ護国神社の坂本泰彦宮司から電話があり、「特攻隊員として亡くなられた方々は美談として語り継がれるだけで、現在の我が国の防衛に役に立っていないのだろうか」と訊かれた。私は「確かに大東亜戦争の勝ち負けだけに着目すれば、大死のように見えるかもしれないが、特攻隊員の国家への熱い忠誠心は今日の自衛隊員が宣誓で誓うところの『事に臨んでは身の危険を顧みず……』の生きた模範であり、具体的にイメージアップ（思い浮かべること）が出来る映像です。そして更に重要なことは、特攻隊員の決死の覚悟と壮烈な死は我が国の抑止力となっ

て現在も機能しています」と応えた。その事例として後述するノモンハン事件の説明をした。そして電話を切った後、以下のことを考えた。

戦前戦中、人口に膾炙した詩句がある。「天（てん）勾踐（こうせん）を空（むな）しゅうすること莫（な）かれ」時に范蠡（はんらい）無きにしも非ず」つまり「天は句踐を見捨てない、時がくれば范蠡のような忠臣が出て助けてくれる」という意味である。これは南北朝時代に書かれた40巻からなる『太平記』の第4巻に出てくる児島高德（こじまたかのり）作の詩句と言われている。後醍醐天皇が企てた鎌倉幕府討伐のための計画が未然に暴露し、天皇は京都近郊の山中に逃れたが、翌年捕らえられ隠岐に流された。児島は流される途中の行在所に忍び込み、この句を桜の幹に彫り込んで天皇を励ましたと伝えられている。要するに、「天は後醍醐天皇を見捨てない、時が来れば忠臣が出て助けてくれる」と言う意味であり、引いては大東亜戦争において日本は劣勢であるが、「天は日本を見捨てない、時が来れば忠臣が出て助けてくれる」という国民の願いである。そうは言いつつも、他力本願のような希望的観測が、兵士や国民の自己犠牲の要求へと繋がり、国家や軍の施策として特攻を助長したのは遺憾である。国家の

ために生命まで犠牲にするという個人の思いは尊崇を受けるべき立派な志であるが、国家や軍中央が国民と将兵個人に求め、前提として作戦を計画・実施するなどは邪道である。国家や軍中央はあくまで「優勝劣敗」を原則として軍事を司るべきであり、国民の願望や希望を頼りとしてはならない。つまり、これらの思想が究極に行き着くところは「日本は神の国だからイザというときは神風が吹く」である。しかし、遂に最後まで神風は吹かなかった。面白いことに、この空想は戦後、正反対に姿を変えて左翼の人間を蝕んでおり、「日本には平和憲法があるから戦争は起きない」との呪文となつて継承されている。言われている内容は真逆であつても、イメージされる映像と雰囲気は「空想」という同一の概念である。つまり左翼の学者とマスコミは空想を真剣かつ真面目に信じ論じているのである。参考のために付言すると、句踐は春秋時代の越の王であり、会稽山の戦いで呉王夫差に敗れた（「会稽の恥」）が復讐を誓い、「臥薪嘗胆」で富国強兵を図り、遂に呉を滅ぼした。この部分は、中国の歴史書『十八史略』の中で最も生き活きと描かれる場面で、傾国の美女「西施（せいし）」、「狡兔死して走狗烹られ、高鳥尽きて良弓蔵る（狡賢い兎が死ねば猟犬は煮て食われ、飛ぶ鳥がい

なくなれば良い弓は仕舞われる)」、「越王の容貌が長頸烏喙(首が長くて口が嘴のように尖っている)なので、苦難を共にできても歓楽は共にできない」等、日本でも多くの故事・熟語・慣用句が知られている。

話を元に戻すと、では特攻としての行為やその精神が全く無駄だったのかという、そうではなく、現在に至っても抑止力として機能しているのは間違いない。令和4年12月、閣議決定された安保三文書が示す我が国への差し迫った脅威について、「中国の対外的な姿勢や軍事動向は我が国と国際社会の深刻な懸念事項、北朝鮮の軍事動向は我が国の安全保障にとり、従前よりも一層重大かつ差し迫った脅威、ロシアはウクライナ侵略によって国際秩序の根幹を揺るがし、欧州方面では安全保障上の最も重大かつ直接の脅威であり、中国との戦略的な連携と相まって、安全保障上の強い懸念」であると明示された。しかしそうは言っても、この三つの脅威のいずれに対しても、核を持たない我が国が独力で対処することは不可能で、日米同盟を主軸としつつ、民主主義国家群と共同・協力して対処しなければならぬ。左翼の間には「日米同盟は戦争に巻き込まれるから破棄すべき」との論があるが、もし日本単独で防衛を成り立たせるとしたら、恐らく今の防衛

予算の10倍位は必要であろう。核兵器も保有しなければならぬ。核には核しか対抗できないからである。しかし、そんなことをしたら防衛より先に国家経済が破綻してしまう。しかも現代において最も重要な安全保障政策は、侵略や紛争の発生を未然に防止すること、つまり「抑止」である。この「抑止」と言う機能を働かせるためには、国家レベルで考察する場合、直接的には防衛力整備と自衛隊の精強化及び日米同盟の強靱化であるが、間接的には外交力、経済力、科学技術力、人口、地理的環境、国内統治力、国民の士気、伝統・文化等のあらゆる要素が効いてくる。そして忘れてならないのは、過去の日本人の歴史の実績も機能しているということである。

かつて防大教授(戦史講座主任)として戦史を研究する中で、「ああ、これが抑止力として現在も機能しているのか」と気が付き感嘆したことがあった。具体例を挙げれば、ノモンハン事件、英スリム中將の回顧録、沖繩戦、特攻、義烈空挺隊等である。

2 ノモンハン事件

ノモンハン事件については、私はCGS(指揮幕僚課程)かつての陸大に相当)とAGS(高級幹部課程)の研究論文でも取り上げ、相当地研究を積んだと自負している。ところで、外務省外向時代

(昭和58〜60年)、次の興味深い体験をした。

当時の国連や在外公館のロビー外交で「どこの国の軍隊が一番精強か」と話題になったことがある。結論は「ゼネラルは米国、将校はドイツ、下士官は日本、兵隊は韓国」であった。米独はNATOで公開演習をやっており、韓国軍はベトナム戦争で蛇や蛭の生息する沼に沈んでベトナムを待ち伏せする姿が報道されており理解できる。ところが日本はまだこの当時、PKOも日米共同実動演習もしていないのに何故だろうと疑問に思った。

結論は「世界中の軍学校でノモンハン事件が研究され、ジュコーフの報告書や回想録が読まれていたためではなからうか」と思い至った。極端に言えば「ノモンハンでの第一線の勇敢闘闘、勉強な闘いぶりが、現代の日本の抑止力の一翼を担っていた」のである。

ノモンハン事件は、我が国よりむしろ米国やNATOの軍学校において研究され学ばれた。何故なら、ここには当時のソ連軍の戦いの様相と戦術・戦法の萌芽が全て含まれているからである。そのような観点から東西冷戦が強く認識されるに従い、各国陸軍はソ連軍を模範とする場合にせよ、対ソ連戦のモデルとするためにせよ、ノモンハン事件から現代的な戦術・戦法を学んだ。そしてその当時採

用された思想や戦い方は、その後も研究と改良を重ねられ、今日の世界中の陸軍へと受け継がれている。

また更に特筆すべきは、これまでの兵学の常識では殲滅戦生起の条件は、攻勢衝力の逆用にしろ、敵の過失に乗ずる場合にしる、いずれも相手側によって作られるとされていた。従って、そのような条件・場面を作り出すことが作戦の主眼であった。ところが、ノモンハン事件におけるソ連軍の戦法は、第二次世界大戦の独ソ戦において完成したトハチェフスキー元帥の教義と戦術・戦法の萌芽が見られる。別の見方をすれば、ノモンハン事件はソ連軍現代化の実験場であったと言える。具体的には膨大な近代兵站に支えられた殲滅戦方式、全縦深同時打撃(第2梯隊)、二重包囲、両翼包囲、諸兵連合部隊と戦車・装甲車・飛行機との協同等により、主動の地位を確保する今日の陸軍国家の戦術で強調される戦い方が、既に昭和11年の「赤軍野外教令」で示され、それが昭和14年の8月攻勢で実行に移されたのである。

一方では、日本軍はソ連が考えていたより精強であった。ノモンハンで軽く一撃を食らわせ、ポーランド侵攻(ヒットラーとのポーランド分割合意)に専念する積りであったスターリンにとって、日本軍の頑強さは想定外のことであった。

ノモンハン事件においては、戦力比がソ蒙軍の方が4・5倍であったのに、損害は2千人以上多かった。ソ連側が公表したノモンハン事件の評価は、次のとおりである。①社会主義国の経済力、軍事力を誇示した。特にソ連の軍隊は、戦闘能力、兵器、指揮官の優秀性を世界に示した。②ソ連軍は、自己の国際的義務への忠実性、ソ連邦と蒙古人民共和国の強固な地位及び国境の不可侵性を保証した。③ハルハ河畔におけるソ蒙軍による日本の第6軍の撃破は、日本帝国主義に対する中国及び朝鮮民族の民族解放運動に深い感化を与えた。④ソ連を日本との戦争に引き込もうとする帝国主義反動の計画は、西欧における場合と同様失敗に終わった。

これを読む限り、ソ連は日本に勝利したと公表しているが、実際はソ連の政府及び軍首脳は日本軍の「手応えの強さ」には肝の冷える思いであった。ノモンハン事件のソ蒙側指揮官であったジュコーフは晩年、回顧録の中で「自分は生涯を祖国の戦争に捧げた。我が生涯で最も苦しい戦いは、ハルハ河での日本軍との戦いであった」と述懐している。ジュコーフは、36才で師団長、42才で大将・ソ連邦英雄、49歳で地上軍総司令官・ソ連邦元帥になったソ連陸軍のスターである。そのジュコーフがノモンハン戦直後、ス

ターリンに「日本軍の訓練精到、規律の高さ、戦闘の頑強さ、特に若い指揮官と兵士たちの優秀さ」を報告している。この若い指揮官とは、前後の文脈から「小隊長クラスの初級将校と班長クラスの下士官」と読み取れる。

ところで、大東亜戦争の戦況の切迫に伴い、日本軍は関東軍の精鋭師団、航空部隊を次々と南方へ転用した。ソ連は米国から対日参戦の要請を早い時期から受けていたが、日本の敗色がハッキリする昭和18(1943)年までは応じようとしなかった。そして、対日参戦に際しては、ソ連の情報網で関東軍がモスクワの殻であることを承知していたが、それでも、独ソ戦の参謀総長であったワシレフスキー元帥のもと80個師団、158万を動員して、ようやく開戦に踏み切った。これらのことは、ノモンハン事件の印象がソ連にとつていかに深刻な印象を与えていたかを物語っている。ソ連軍首脳には、「ノモンハンで勝った」というより、「日本軍はとんでもなく韌強だった」という印象の方が強烈であった。戦後日本は、世界に類をみない僅かの自衛力をもって平和と安全を享受して来た。特に、冷戦崩壊までの50年間、色々とすることがあった中で、北海道の防衛をわずか4個師団(5万)の勢力で、極東ソ連戦域軍36万を抑止し得たことは、軍事

専門的に見れば驚きである。この抑止・防衛の根源は、何であろうか。その要因は、日米安保体制と我が自衛隊の存在であることは間違いない。しかし、強調しなければならぬのは、「ノモンハンにおいて困難な状況下に勇戦奮闘した日本軍将兵の血と汗の代償」も要因の一つであるということである。それが、冒頭の国連と在外公館ロビーで言われた「下士官は日本」という評価に繋がっていたのである。つまり、ハルハ河畔の土となった将兵の死は、決して無駄死ではなかったのである。もちろん、だからと言って、今後、我々が防衛力整備の不十分、情報の軽視、兵站の軽視あるいは作戦指導の失敗を隊員の血と汗で償えるのでは決してない。作戦の失敗を第一線将兵の血と汗と決死の覚悟で償うようなことは兵法・軍法の邪道である。

いずれにしても、1世紀近くも前に勇戦奮闘した将兵の働きが、現代の抑止力に繋がっているという見方は、多分、本稿が世界で初めてかもしれない。しかし、私は自信を持って、このような見方があることを世間に提示したい。

3 スリム中将の回顧録

NHKは令和4年8月10月にかけて、「NHKスペシャル」として「絶望の戦場 ビルマ」を放映し、その内容を翌年8月に同題名の図書として発刊した。そ

の中に英第14軍を指揮しビルマを奪還したウイリアム・スリム司令官(中将)によって戦後描かれた次の回想録の一節が紹介されている。

スリム中将は日本兵の精神力に対して「日本軍の強さは、個々の日本兵の精神にあつた。日本兵は死ぬまで戦い続け、行進し続けた。500人の日本兵が陣地を守るよう命じられたとしたら、我々はその陣地を奪うまでに495人を殺さねばならなかった。そして、陣地を奪われた最後の5人は自決するのだ。この従順さと悍猛(どうもう)さの組み合わせが、日本軍を非常に手強いものにしていった」と高く評価する旨を述べている。一方で日本軍の将校については、「日本軍の指導者の根本的な欠陥は“道徳的勇氣の欠如”である。計画が失敗し、練り直しが必要であることを認める勇氣がない。彼等は命ぜられた任務が不可能であることを十分に知りながら、自分自身が受けた命令をそのまま部下に伝えた。このような責任転嫁が、最高司令官から最下層の将校まで、何度も災いの連鎖を生んでいた」と述懐している。

いずれにしても、このような日本軍兵士の強靱な戦闘場面がスリム中将によって英文で紹介され、何らかの形で今日の日本の抑止力に繋がっていることは間違いない。

4 沖縄戦

米軍は昭和20年3月17日までの硫黄島での激戦に引き続き9日後の3月26日、沖縄本島西方の慶良間諸島に上陸し、本島攻略のための後方基地を築いた。そして米軍は319隻の戦艦と巡洋艦などから艦砲射撃を開始、4月1日、本島中部の嘉手納海岸に上陸した。この作戦に参加した米軍は、上陸部隊約18万3千人、支援の海軍部隊を含めると約55万人の規模で、太平洋戦争史上、最大の上陸作戦だった。これに対し、沖縄本島に配備された日本の総兵力は、陸軍約8万6千人、海軍の陸戦隊約1万人に過ぎなかった。現地の第32軍は、中南部の首里を中心に構築した陣地にたてこもり、持久戦に徹する方針を採った。

米軍は、上陸初日の1日だけで約6万人が上陸、同日中に北と中(現在の読谷、嘉手納)の両飛行場を制圧、4月3日には本島東海岸に達し、沖縄本島は米軍により南北に分断された。この飛行場が早期に米軍の手に落ちたことは、大本営はじめ各方面に大きな衝撃を与えた。第32軍にしてみれば、持久戦が当初からの狙いであって予想通りの展開であったが、大本営にしてみれば「何故反撃に出ないのか。消極的に過ぎる」と非難轟々で、大本営は4日、北・中飛行場の奪還を強く求める電報を打った。結局第32軍は総

攻撃を決断し、数次にわたる攻撃を実施したが、いずれも強大な米軍によって撃退されたのみならず、戦力の半分を損耗し、結局、4月22日に退却を決定した。6月4日頃までに、第32軍は摩文仁の新陣地に集結したが、撤退作戦は悲惨を極めた。6月23日、牛島司令官と長参謀長が自決し、沖縄戦は事実上終結した。戦死者は日本兵約10万人、県民も約10万人が犠牲になった。

一方の米軍は約2万人が戦死し、約6万人が負傷した。沖縄戦直前の硫黄島の戦いにおいて日本軍約2万人が戦死したが、米軍は7千人が戦死し2万人が負傷した。米軍は離島とはいえ日本領土での余りの損害の多さに驚くとともに、来るべき本土決戦に際しては「どれほどの多くの若者の血が流されるのか」と畏怖した。これらの事実は記録として残され、参加した将兵により語り継がれた。それはそのまま、今日の抑止力の一翼を構成している。また似たような話で海自ではよく知られた次の話がある。海兵隊の退役将校(大佐)が戦後、「ペリリュー島で日本軍と戦った本官は、太平洋戦争後に親日家となった。何故なら、もう2度と日本軍とは戦いたくないからだ」と語ったとの由である。

5 特攻

沖縄戦において米軍は空と海でも凄惨

な戦いを強いられた。米国の研究者の推定では「特攻により約120隻の米艦船が沈没、約3千人の米兵が死亡し、約6千人が負傷した」と発表している。そして米兵は「狂信的な自爆戦術」として恐れた。

昭和20年3月24日、沖縄戦で特攻を受けた元海軍のマックス・パイン氏は平成19年、米紙に「自分たちの船が標的にされていると悟った瞬間の気持ちは、とても言葉で表現できない」と証言した。また太平洋上で特攻機に2度、回天に1度、攻撃を受けた元海軍のジェラルド・W・トーマス氏は、退役軍人の団体機関誌への寄稿で「パニックに陥った艦上の射手が味方の戦闘機に発砲したり、射程外の特攻機にやみくもに発砲したりした」と述べている。

昭和20年4月5日、小磯内閣は総辞職し、鈴木貫太郎に組閣の命がくだった。その翌6日、航空特攻「菊水一号」作戦参加の陸海軍機が、鹿屋や知覧など九州各地、台湾の基地から、沖縄周辺に群がる米軍艦船を目指して出撃した。6日だけで222機が出撃、340人が戦死した。その中には学徒動員された大学生も多かった。7日は90機、140人、12日に109機、193人、16日に157機、344人……。特攻は、沖縄での地上戦闘が終結した後も8月まで続けられるこ

とになる。昭和19年10月、大西瀧治郎海軍中将が主導し、フィリピン・レイテ海戦で「統率の外道」として始まった体当たり攻撃が、沖縄戦では遂に作戦・戦闘の「主役」となったのである。

以下は私の持論であるが、戦いに参加する将兵が個人として自らの生命を犠牲にして国や家族のために準ずるのは尊敬に値する崇高な行為・心情である。だからこそ、自衛官は現在も任官するにあたり、「事に臨んでは身の危険を顧みず：」と宣誓するのである。戦場にあつては当然、必死の覚悟が求められることが多いだろう。そして、その場へ従容として臨むには個人としての覚悟や死生観が求められる。人々はその気持ちを尊敬し感謝するのである。しかしだからと言って、片道分の燃料しか搭載しないと、爆弾を抱えて敵艦に体当たりすると、必死を前提とした戦いを国や部隊が個人に要求するのは邪道である。ましてや、それを「死中に活を求める」などと美化した言葉で誤魔化して、作戦として採用するなど絶対にあつてはならない。兵士の命を軽んずる風潮は、結局は国民の命を軽んずることに通じ、最終的に原爆投下を招き、竹槍で戦車や戦闘機に手向かわせる非合理性へとつながってゆく。

『特別攻撃隊』(特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会編)によると、3月中旬から

終戦までの間、沖縄方面での航空特攻の戦死者は、陸海軍計3千人にのぼり、航空特攻の全死者の8割近くに達した。絶え間ない特攻機の攻撃に、米軍は混乱に陥った。沖縄・慶良間諸島の停泊地には、特攻による損傷艦があふれ、米機動部隊指揮官のミッチャー中将の旗艦も損害を受けた。沈没したのは、駆逐艦などの小型艦ばかり26隻だったが、損傷艦は空母など164隻に上るとされる。菊水作戦では、人間爆弾「桜花」、練習機「白菊」も出撃した。一方では「桜花」を胴体下にぶら下げて重くなった一式陸攻などの母機は、米グラマン戦闘機の格好の餌食となった。特攻隊を送り出した第5航空艦隊の字垣纏司令長官は、日記『戦藻録』に、「特攻隊として機材次第に欠乏し、練習機を充当せざるべからざるに至る」と記している。速成に次ぐ速成で、やつと飛べる程度の技量しかない若者たちが練習機を操り、リーダーと敵戦闘機の迎撃と対空砲火をくぐり抜け、体当たりしようとしたのである。

そして4月5日、連合艦隊は戦艦「大和」以下の第二艦隊に対し、海上特攻として沖縄に突入することを命じた。第二艦隊の伊藤整一司令長官は当初、作戦とはいえない無謀な挙だと納得しなかった。しかし、草鹿龍之介参謀長が「一億総特攻のさきがけとなっていたきたい」と

述べると、伊藤司令長官は吹っ切れたように「それならば何おかわんやだ。了解した」と応じた。「大和」の沖縄特攻を最初に主張したのは連合艦隊の神重徳首席参謀だった。彼は「大和が残れば、無用の長物だったと言われる」と訴え、豊田副武連合艦隊司令長官もこれを聞いて了承した。

戦艦「大和」は日本人及び日本海軍にとってシンボルであり、「カミカゼ」特攻隊や「戦艦ヤマト」はこれ以外にも多くの映像やアニメとして世界中で繰り返し取り挙げられている。本稿を執筆している最中に「宇宙戦艦ヤマト」が製作50周年を迎えると聞いて、その人気の長寿さに驚くとともに、日本はもちろん世界中で受け入れられている事実に“ソフトパワー”の威力を感じる。織田邦夫・元空将が何かの雑誌に書いていたが、中国人民解放軍の大佐が「日本が魚釣島で中国にちよっかいを出すなら中国は日本に攻め込むぞ。静かにしとけ。日本は憲法で何もできないだろう」と日本人を馬鹿にして脅したそうである。しかし、大佐はしばらく考えて「いや、待てよ。日本には特攻がある。特攻が攻めてくるな。特攻なら間違いなく攻めて来る」と自問自答したとの由であった。このやり取りの真偽は別にして、このような噂は結局は我が国の抑止力の一角を形成している。

また更に言えば、ウクライナのゼレンスキー大統領が米国上院で演説した際に、日本の真珠湾奇襲攻撃を9・11テロと並べて批判したが、産経新聞が「止むを得ず開戦に至った真珠湾攻撃を弁解のしようのない卑劣なテロと並べるのはケシカラン」と論陣を張っていたが、世界的に見れば、「宣戦布告なしの攻撃開始はテロと同じだ」という理屈かもしれない。ただ世界中の庶民にとっては両者とも恐怖の対象であることに違いはなく、更にアラブ・イスラム社会では真珠湾攻撃の映像は、今でも大喝采を浴びる場面であると聞いている。

6 義烈空挺隊

前述したように、米軍は4月1日、沖縄上陸開始の日に北中飛行場（現在の読谷と嘉手納）を占拠した。沖縄の第32軍は5月中旬、本島南端の喜屋武（きやん）半島への撤退を迫られていた。そのような中、「米軍が占領した北と中飛行場に航空機で強行着陸し、基地を制圧すべし」との命令が「義烈空挺隊」に下された。

同隊は、サイパン島の米軍基地を破壊するため、奥山道郎大尉を指揮官として昭和19年12月に編成されたものの、中継地に予定していた硫黄島が陥落したため待機を命ぜられた。次に硫黄島への投入が検討されたものの、天候気象や彼等の戦況推移予測から中止となり、またも待機

が続いた。義烈空挺隊は陸軍第6航空軍に所属していたが、出撃には大本営の許可が必要だった。大本営の許可を得るため、菅原道大（すがはらみちおう）第6航空軍司令官が願ひ出た文言は、「特攻隊に指定されてすでに半年、計画しては取りやめになること再三に及ぶは、その心情忍び難い」というものだった。これを見る限り、彼には出撃させることだけが目的で、作戦がもたらす効果を十分に考えた形跡はない。あたかも「特攻」で死ぬことが作戦目的となつていように見える。

余談であるが、ここで空挺作戦と特攻の本質的な違いを明らかにしておきたい。空挺作戦は基本的に地上部隊と提携する戦略的な運用形態であり、敵中に降下しても帰還することを前提としている。ところが、特攻は帰還することを想定しておらず、必死の作戦である。いずれにしても、隊員個々に決死の覚悟が求められることには変りがない。沖縄戦の場合、地上軍の第32軍も6月23日に玉砕しており、提携できたか否かの記録も残されていないが、もし提携できたとしても帰還は想定できなかった。そういう意味では、菅原中将の言う特攻の概念の方が当たっていたのかもしれない。

第6航空軍は義烈空挺隊投入の機会を

伺っていたが、4月中旬になつて沖縄の米軍飛行場の強化が進むと投入の好機と考えて、大本営に使用の許可を求めた。大本営が義烈空挺隊の投入を容易に許さなかつたのは、5月3日に開始された地上軍の総攻撃が失敗に終わり、勝利の見込みの薄い沖縄に日本陸軍最精鋭の義烈空挺隊を投入するのは惜しいと考え、来る日本本土決戦のために温存しておこうという目論見があつたからである。菅原中将は「特攻隊に指定されて既に半年、計画しては取りやめになること再三に及ぶは、その心情忍び難い」と決断を促した。また義烈空挺隊指揮官の奥山道郎大尉は「空挺隊として若し未使用に終わるようなことになつては何の顔（かんばせ）あつて国民に相まみえん。当局の特別な保護と、世上の絶大な尊敬に対して、武人の最期を飾るべき予期の戦場さえ与えられないとなると、国民国家に対して顔向けができませんか」と早期投入の覚悟を吐露した。

このようにして義烈空挺隊の投入が決定され、昭和20年5月24日夕、12機に分乗して熊本の健軍飛行場を離陸、同日午後10時過ぎ北飛行場に5機が突入した。1機が胴体着陸に成功、13人の戦闘隊員は、拳銃、手榴弾、短小銃又は機関短銃、柄付爆薬、破甲爆薬等で武装しており、

地上の米軍機を破壊した。戦果については、日本側には記録が残されていないので、米軍の記録に依らざるを得ないが、それによると、「海軍攻撃機3機、哨戒爆撃機2機、輸送機4機を破壊、F4戦闘機2機、F6戦闘機3機、B24爆撃機2機を損壊、7万ガロンの燃料を消失した」と記録されている。ちなみに、7万ガロンというのはドラム缶1,300本分に相当する。

義烈空挺隊の壮絶なる突入は内外に大きな衝撃を与えた。米軍は我が軍の忠烈の凄まじさに畏怖の念を強くし、本土決戦回避に傾き、我が国民は大いに士気が高まり、一億総玉砕の決意を新たにした。義烈空挺隊員として、持てる力を全て出し尽くして散華された英霊の崇高な勇姿を永く後世に伝えることは我々の使命である。現在の日本の平和と繁栄が英霊の方々の尊い犠牲の上にあることを想い、改めて感謝と崇敬を表する次第である。いずれにせよ、歴史学者としての立場から、特攻隊員及び義烈空挺隊の壮烈な戦闘は米軍に強烈な印象を与え、各種のアニメや映像として世界中に広まり、今日の我が国の抑止力に寄与していると信じている。

連載山ある記28 東京都「南高尾山稜」

会員 池田 康博

南高尾山稜は、京王線の高尾山口駅から登れば、草戸山、榎窪山、泰光寺山、入沢山、中沢山、コンピラ山、大洞山（おおぼらやま）と連なっている。標高は、草戸山の三百六十四mから次第に上がって、大洞山の五百三十六mが最高峰となる。近頃は「南高尾セブンサミッツ」と称されてもいる。この縦走コースは、大洞山から一丁平、高尾山を経由して駅に戻ると、その行程が「ハート」の形になるとして話題である。しかし、歩行距離は約16km、長ければ7時間半を要する。この点で登山を躊躇していたが、日が延びてきたこともあり、思い切って行ってみた。

朝、8時5分に高尾山口駅を出発、川を渡って国道20号を少し歩くと、「高尾山入口」の横断歩道がある。ここを渡って住宅地に入っていくと、すぐに案内板が表れ、住宅の脇から登山が始まる。結構急な坂道を登って、四辻という尾根に着いたら、いよいよ草戸山への登りが始まる。

アップダウンを繰り返しながら登って行き、9時20分に草戸山に到着、10分休んで榎窪山に向け出発した。ところが30

分で山頂の筈が、一向に山頂は現れず休憩所が現れた。やむを得ず他の登山者に聞くと、「通り過ぎている。」と言う。慌てて少し戻ったが、時間の無駄と思い、先へ進むことにした。10時17分に泰光寺山に到着。小休止後、10時47分に入沢山次に中沢山、そして、11時40分にはコンピラ山に到着、ここで昼食とした。

西山の龍（西山峠付近）



山頂というより休憩所といった感じで、うっかり通り過ぎてもおかしくない。標識も、「コンピラ山」と書かれた小さな板が、側の立木に打ち付けられているだけである。ただ、休憩所は、テールや椅子が十分に用意され、リュック掛けまで備えてある。これは、ここばかりではなく、泰光寺山などにもあり、撮影用にスマホ台まで設置されていた。また、倒木を利用して、本物か？と見まがうような龍の彫刻や、梟と鷲を彫ったトーテムポールが設置されている休憩所もある。登山道にも各所にイスやテールが備えてある。そのサービ

ス精神には、整備をされた方々に頭が下がる。

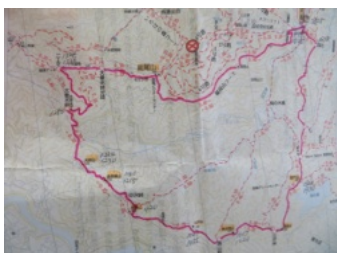
大洞山山頂



さて、コーヒーマも済まして、12時15分にコンピラ山を出発。同24分には7つ目の山で、かつ、セブンサミッツ踏破となる大洞山に到着した。30分に下山開始。こ

こからはハートの形になる帰路に入る。大垂水峠まで下ると、国道20号の陸橋を渡って、小仏城山に向かう登山道に入る。そして、その途上にある防火帯の急登を登り切って、一丁平園地に着いたのが13時24分。ここで小

“ハート”形？の行程



休止し、36分には高尾山頂を目指して約1時間の道のりを歩き出した。しかし、山頂直前で気が変わって巻き道に入り、そのまま稲荷山コー

スを通して、高尾登山ケーブルカーの清滝駅横に下山した。高尾山口駅到着は15時25分であった。

頂上経由で下らなかつたためハートも多少歪になったかも知れない。

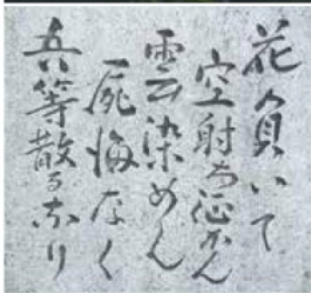
(令和6年4月29日)

顕彰譜 (17)

会報134号から始めた特別攻撃隊全史第二版の顕彰譜の
ご紹介第十七回目です。

空挺落下傘部隊発祥之地の碑

空挺



碑の台に刻んである

護國神社の例祭と共に行われるが、その際に落下傘部隊の戦友も多数参加している。

嘗てこの地には陸軍挺進部隊の兵営と広大な降下場があった。レイテに特攻出撃した高千穂降下部隊（挺進第三、第四聯隊）も、義烈空挺隊の母隊である挺進第一聯隊も、この地に在って訓練に励んだ。
陸軍挺進練習部の構内には、挺進神社があつて、空挺部隊一万二千の戦死者及び殉職者をお祀りしていたが、戦後米軍によって焼払われてしまった。そこで、昭和24年地元川南村の護國神社が再建されたとき、空挺部隊の戦死者もその中に合祀した。
更に昭和38年になって、生き残りの戦友達の手で、護國神社の裏庭にこの碑を建立した。



川南町護國神社例祭

所在地 宮崎県児湯郡川南町川南
建立 昭和38年
例祭 毎年11月23日
主催者 川南町

空 挺

空の神兵之像



空挺館



この像は陸軍航空本部にあった石膏の像を原型にして銅像を作り、全日本空挺同志会が自衛隊習志野駐屯地に寄贈したものである。

昔の落下傘兵が手にはめた時計を見ている姿を象ったもので、その面構えは逞しい。陸上自衛隊空挺部隊がここに駐屯しているので、後に続く者をこの像は見守っている。

空挺特攻については第一章で述べた通りであるが、同駐屯地の「空挺館」の一室には、義烈空挺隊をはじめとし、陸海軍空挺部隊に関する多数の資料が展示されている。

所在地

千葉県船橋市薬田台

建 立

自衛隊習志野駐屯地内
昭和46年5月9日

写真提供

三机青年団

陸軍海上挺進

海上挺進戦隊慰霊碑



(碑文) 海上挺進戦隊顕彰之記

昭和十九年戦局の頽勢を挽回すべく、船舶特別幹部候補生の少年を主体とし全軍より選抜せる下士官、将校の精鋭を以て編成されたる陸軍海上挺進戦隊は、二五〇キロ爆雷を装備せるベニヤ製モーターボートにより一艇以て一船を屠るを任務とし、此処幸ノ浦の船舶練習部第十教育隊に於て昼夜分たため猛訓練に励み、第一戦隊以下三十ヶ戦隊が同年九月以降続々沖縄、比島、台湾への征途にのぼり、昭和二十年一月比島リンガエン湾の特攻を初めとし同年三月以降の沖縄戦に至る迄壮烈鬼神も泣く肉迫攻撃を敢行しその任務を全うせし者、或は戦局の赴く所已むを得ず挺身陸戦に転じ、奮戦せし者を含め戦闘参加の勇士二二八八名中、再び帰らざる隊員実に一六三六名の多きに達し、挙げたる戦果敵艦船数十隻撃沈、誠に赫々たるものありしも、当時は秘密部隊として全く世に発表されざるままに終れり。

而して又第二次訓練再開されるや第三十一戦隊以下十二ヶ戦隊が九州、四国、紀州の各地に展開し米軍の本土上陸に備え、更に第四十一戦隊以下十一ヶ戦隊は終戦当時当地に在り原爆投下直後の広島市民の救出残骸の整理に挺身活躍、同年十月艇を焼き部隊を解散せり。

此等教育期間中の殉職者も数十名に及び又各戦隊に配置されたる基地大隊も戦隊出撃後は陸戦に転じ殆んど生還するを得ず、その運命を共にせるものの如し。

祖国の為とは言え春秋に富む身を国に殉ぜし、多数の若者の運命を想う時誠に痛惜の念に堪えず、ここにその霊を慰め後世に伝える為此の碑を建立するものなり。

昭和四十二年十二月三日

元教育隊長 齊藤義雄書

祭神

陸軍海上挺進戦隊戦没者
一、八二九柱

建立の経過と現況

昭和40年春活動開始

海上挺進基地隊戦没者

一八二九〇柱

広島県江田島市幸之浦

広島市宇品よりフェリーで20分

切串上陸、自動車で10分

昭和42年12月3日

42年12月3日除幕式 46年顕彰会組織
62年大祭実施 平成元年11月2日小祭実施
幸ノ浦住民及び若潮会広島支部の手で維持管理
「教法寺」にて永代供養

建立

所在地
交通

若潮の塔



碑文 若潮の塔由来記

第二次大戦の末期風雲急を告げる国難に殉ぜんとして、ここ小豆島の陸軍船舶特別幹部候補生隊に率先志願した若人たちは昭和十九年入隊の第一期生から翌年の第四期生まで八千余人夜を日につぐ特別訓練を経た第一期生は海上挺進隊員として小型舟艇に爆雷を搭載し比島沖縄台湾方面の第一線に出陣敵艦船に肉迫攻撃を敢行その多くは護国の神と散華した。

第二第三期生は本土の要地に第四期生は小豆島沿岸の各地に分散配備され特殊任務就役のうち昭和二十年八月十五日の終戦を迎えた。

十五才から二十才未満という候補生はけなげにも青春の生命を殉国の生命にペンを操舵に握りかえその猛訓練の血と汗を小島の土にはたまた瀬戸の潮に染めこの美わしき自然と風土の小豆島を第二のふるさととしたのである。

今わたしたちは南溟の潮騒に密林の葉かげに雄々しくも散華した第一期生と原爆犠牲をはじめ本土の任地において殉じた第二第三期第四期生及び部隊関係者あわせて壱千数百柱にのぼる還らざる友の冥福を祈るとともに魂の象徴としてここに塔を建立するものである。

昭和四十八年十一月二十三日

若潮会

祭神	陸軍船舶特別幹部候補生隊卒業戦没者 壱千数百柱	実施団体	若潮の塔奉賛会
所在地	香川県小豆郡上庄町 淵崎富丘八幡神社境内	連絡先	富岡八幡神社 (〇八七九一六二一五三八)
交通	岡山・高松より小豆島行フェリー 港より徒歩五分	建立の経緯と現況	昭和47年7月建立発議 昭和48年11月23日除幕式 富岡八幡神社と若潮会により 維持管理
建立 例祭	昭和48年11月23日 毎年11月23日		

陸軍海上挺進

豊浜留魂像



碑文 留魂像建立記

陸軍船舶幹部候補生隊ハ昭和十九年四月ヨリ終戦ニイタルマデ豊浜ニ駐屯セリ船舶兵ハ第一線ニオケル海洋機動力ノ主体トシテ挺身難ニ赴キ全軍ノ人柱トナルベキ使命アリ 隊員ハ深ク之ヲ肝ニ銘ジテ日夜鍛練ニ励ミ業ナルヤ将校トシテ陸続前線ニ身ヲ投ジ激戦ノ間燃ユル生命ヲ祖国ニ捧ゲテ不帰ノ客トナリシ勇士マタ少シトセズ イマヤ弋ヲ収メテ星霜四十ヲケミシ往時慟哭ノ記憶漸ク風化セントスルニ際シ隊友力ヲ合セ 舟艇上ニ指揮ヲ執ル候補生像ヲ思出深キ此ノ海岸ニ建立シ英霊ノ名籍ヲ像下ニ納メテ鎮魂ノ祈念ヲ秘メ永ク後世ニ伝フル事トナセリ

昭和六十年十月十四日

豊浜会

祭 神

陸軍船舶幹部候補生隊

卒業戦没者 二五〇柱

戦後物故者 九〇名

所在地 香川県観音寺市一宮神社境内

交通 予讃線豊浜下車

建立 昭和60年10月14日

建立の経緯と現況

昭和58年8月

豊浜会に於いて発議60年10月14日除幕式

一宮神社氏子と豊浜会により維持管理

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部



● 赤とんぼ 姿をかえし 君が飛ぶ

● 夕焼けに 征きし貴方の 姿おう

凜

● 顔上げて 空の高さに 秋を知る

● 十五夜の 月冴えわたる 秋の宵

ネコ



● ない知恵を 絞って作る この一句

● あと一句 汗は出るけど 句が出ない

ネコ

新刊図書紹介

「日米史料による特攻作戦全史」

本書は令和5年2月号で紹介した「米軍から見た沖縄特攻作戦」と同じく、アメリカ人のロビン・リエリー氏が著し、当顕彰会会員の小田部哲哉氏が翻訳したものです。

前作が、特攻機と米戦闘機、レーダーピケット艦の戦闘模様が主となっていたのに対し、本作は、特攻隊の精神面、装備、作戦など全般にわたって記述されています。

本文の構成は、大きく2つに分けられています。

第1部は「カミカゼの起源と組織、運用」で第1章「武士階級の発展とその精神」から第6章「海と陸のカミカゼ」の六章からなっています。

特攻の精神を武士道精神を起源とするとともに、特攻の使用機、戦術を述べています。第6章は陸海軍の特攻艇、④や震洋に触れています。米軍資料によるもので、その構造は勿論、戦術やフィリッピンや沖縄への配備など多岐にわたって解説しており、震洋、④の理解を深めるのに役立つと思われました。

回天、蛟龍、海龍についても解説されています。これらも米軍資料に基づくものです。

第Ⅱ部は「特攻作戦史」です。

第7章から第17章から成り、主要部分は特攻隊の攻撃を受けた艦艇の記録です。特筆すべきは、攻撃を行った特攻隊を推定して記載されていることです。これは前作を読んだ読者からのコメントに答えるものであることを小田部氏は「翻訳にあたって」のなかで語っておられます。

著者のロビン・リエリー氏は「はじめに」で次のように述べています。

私は本文中で「自殺 (suicide)」という言葉を使い続けてきた。日本人は、特別攻撃隊の作戦を自殺行為とは考えていなかった。むしろ、航空

機1機で敵艦船を沈めたり、大きな損害を与えたりすることができ、目的達成のための方法と考えていた。1人の命で百人の命を奪えることは、人間の命がほとんど意味を持たなくなった戦争では、効果的な手段だった。

・中略・

後述するようにこの訓練は1944年10月の特別攻撃隊の編成と同時に始まったのではなく、民間で実施

していた数十年にわたる軍国主義的な訓練の結果であった。カミカゼは、一般的に信じられているのと異なり、単に第2次世界大戦の現象ではなくて何世紀にもわたる伝統の集大成であったというのが私の主張である。」

特攻全般にわたって書かれており、理解を深めることに役立つものと感じました。

本書は、書店で購入出来ませんが、Amazonなどの通販でも購入できます。出版社・並木書房
定価…6820円(税込み)

日米史料による 特攻作戦 全史

航空・水上・水中の特攻隊記録

ロビン・リエリー [著]
小田部哲哉 [編訳]

米軍を震撼させた
カミカゼ攻撃から80年!

新たに作成した日本側の特攻出撃リストと
米軍の戦闘詳報・証言を付き合わせて
明かされる出撃後の特別攻撃隊!

事務局からの報告等

一 住所等の変更について

現在、会報は、メール便にて皆様にお届けしています。メール便は、あて先が少し違っただけでも事務局に返送され、お届けすることが出来ません。

実は、毎号、十数通が「宛先不明」で返送されており、郵便局から再度発送の事務を行っております。

転居又は地番等が変わった場合には新しい住所名を、また、同居されるようになった場合は、「〇〇様方」まで必要となりますので、電話やメール、FAXなど、事務局にご連絡下さいますようお願い致します。

二 年会費及び寄付金の税額控除

当顕彰会は公益財団法人として認定されていますので、年会費も税制上は「寄付金」となります。このため、年会費を確定申告する事により税額控除を受けることが出来ます。

確定申告に必要な「寄付金受領証明書」と「税額控除に係る証明書⑤」が必要な方は遠慮なく事務局へご連絡下さい。
なお、年会費も含めて一万円以上の御寄付をされた方には、ご連絡の有無に係なく十二月上旬に送付しています。

三 寄付者御芳名(敬称略)

(令和6年7月1日～9月30日)

(単位千円)

三〇〇	御船 滋	五三	館本 勳武	三	森本 益夫	三	平田 重夫
四〇	松澤 健	二〇	遠山三千代	二	岩浅 博之	三	生熊 義正
一二	降矢 達男	一〇	吉田 三郎	二	奥谷知枝美	三	山下 博
一〇	千 玄室	一〇	猪瀬 和英	二	伊吹笑美子	二	川田久四郎
一〇	木下 強	一〇	廣川 恭子	二	松本 忠幸	二	大林 喜一
一〇	粕井 隆	一〇	亀倉 孝浩	二	岩館 芳雄	二	沖 周治
七	杉山 蕃	七	白田 智子	二	中熊 真一	二	島田 正登
七	多田野 弘	七	前田 俊郎	二	竹本 佳徳	二	柄澤 寛之
七	幸野 聖子	七	横山 司	二	梶原 武	二	呉 正男
七	服部 武志	七	中村光太郎	二	田崎 鉄男	二	石井 敏子
七	若月 良介	七	神林 千祥	二	野村 朋美	二	茅野 幸雄
七	武安 俊隆	七	宮倉 崇	二	森山 敏明	二	生峯 和代
七	小堀桂一郎	七	藤永 雅彦	二	岡田 敏治	二	田中 臣二
七	加藤 拓	七	橋本 亀	二	大川 吉昭	二	鈴木 馨
七	佐藤 義信	七	小林 一朗	二	松元 光恵	二	北村 芳正
六	堂坂 清	六	安永真理子	二	豊岡 久	二	飯田 美絵
六	尾関 南山	六	長岡 暢俊	二	酒見 奎一	二	沢田 進
六	ノブレス株式会社			二	迫田 一生	二	山田朱実子
六	東洋物産株式会社			二	島野 雅子	二	石川 武
五	福田 文治	五	内田 真吾	二	秋元 光広	一	佐藤 穰
五	田村 豊彦	五	天野 弘子	一	寺田 好孝	一	佐多 和仁
五	林 佐吉	四	早瀬 昇	一	加藤 千佳	一	金子 浩
三	椿 孝則	三	吉田 紀	一	小森 正明	一	安藤佐智子
三	今井 敏	三	氏家 康宇	一	青木 義博	一	江守 聖孝
三	田辺さだ子	三	山中 進	一	福島 隆夫	一	森澤 勇司
				一	古川 淳一	一	川端 幸夫
				一	ロバート・ママダ	一	前芝 辰二

四 新入会員名簿(敬称略)

(令和6年7月1日～9月30日)

群馬	内田 真吾
埼玉	北野天神社
千葉	亀倉 孝浩
東京	畔柳 みゆき
	藤森 博昭
	相澤 直樹
新潟	加藤 かよ
静岡	鈴木 勝貴
滋賀	寺田 好孝
広島	清水 好
広島	石橋 林太郎
熊本	新宅 満
宮崎	多久 善郎
	小倉 和彦
五 会員計報(敬称岐阜略)	
ご冥福をお祈りします。	
東京	村野 日出男 (5)
	三好 栄 (6・8・23)
岐阜	田中 清 (5・9)

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰(他団体への参加を含む)
- ・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
- ・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

○ URL: <https://tokkotai.or.jp>

QRコード



ご投稿についてのご案内

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。PDFファイルは編集の都合上、お受けできません。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。
- 3 投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返し致しません。が必要な場合はその旨お書き添え下さい。
- 5 会員以外の方の投稿も歓迎致します。

- 6、投稿記事等の送付先は、左記宛てとして下さい。

〒102-0072

東京都千代田区飯田橋一丁目5-7

東専堂ビル2階

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

電話 03-5221-3459

FAX 03-5221-3459

E-mail jimukyoku@tokkotai.or.jp